
月読巫女 翠の章

式乃菜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月読巫女 翠の章

【Nコード】

N3987F

【作者名】

式乃菜子

【あらすじ】

ゴールドエンウィークを間近に控えたある日。解決士、天倉竹はクラスメイトの女の子からとある依頼を受ける。自分の身を護って欲しいという翠の巫女。竹は彼女の身を護っていく末にとある因縁に辿り着く。少し戦闘と少しの恋愛が介在する現代ファンタジー風味。

ヒツノハジマリ 01

つくよみこ
月読巫女 翠の章

視える今と、視えぬ過去。

満ちる月と、欠けた月。

そのどちらも視ることの出来る私には理解できない。

どうして笑えるのだろう。

どうして生きられるのだろう。

どうしてその道を選べるのだろう。

人の記憶は醜悪で、

人の記録は腐臭に満ちて、

もう何も視たくない。

いつもいつも眩暈がする。

0

頭上には黄金の月。

夜空には雲一つなく、透き通った夜空には星々が絢爛と瞬いてい
る。

それらの輝きは灯りのない暗闇の山の中でも、対峙する人物の顔
を朧げに照らしていた。

「百数十年前に『素戔鳴』が消え、貴女までもが消えてしまうこと
を我らが許すとも思ったか？」

先に声をかけたのは青色の眼をした女。

声をかけられたのは緑色の眼をした女。

二人の女は煌びやかな装飾で彩られた衣を身に纏い、両者ともが
何らかの権力者であることを示している。

森閑を切り裂いた青色の眼をした女の表情はきつく、鋭い視線で

緑色の眼をした女を睨み付けていた。

「さて、それを決めるのは貴女です『天照』。私が消えれば天岩戸の最高権力者は貴女となるのですから」

緑色の眼をした女は無感動な声で応える。

その声と同じく、表情には感情というものがみえない。

草木を風ぐ夜風は冷たく、しかし、それ以上に二人の間で交錯する空気は冷え冷えとしていた。

「——岩戸を開くことを諦めたのか『月読』よ」

『天照』と呼ばれた女の声は殺気すら込められた、威圧するような声だった。

その常人であれば身を竦ませるような声に、

「いいえ、諦めてなどいません」

『月読』と呼ばれた女は平然とした風に応える。

「ならば納得のいく説明をしてもらおう。何故、我らの前から去る」

「私が——『月読』がここにいないことを知ったから」

「どういうことだ？」

「あれは時が来れば開かれる。しかし、それをするのは私や、貴女ではありません。勿論、消えてしまった『素戔鳴』でもない」

「そなたは何を知った？」

「岩戸の記憶を。そして私は全てを解した。ゆえに私はここを去るのです」

「岩戸の記憶、だと？ それはどんなものであった？」

『天照』の声には驚きがあった。

それだけ『月読』が口に出した言葉は意外なことだったのだろう。だが『月読』はかぶりを振った。

「教えることはできません。それが岩戸を開くことに繋がるのです。ただ私は知った。岩戸の成り立ちを。岩戸に刻まれた記録を」

「……………馬鹿な。今までそなたは、岩戸だけは視ることが出来ないと——」

「虚言だと思われるのなら、この身を裂けばよいでしょう。ただそ

の場合は、私も最大限の抵抗をさせていただきます」

『月読』は僅かに身構えるように言った。

その顔に浮かぶ表情はやはり隠されたように無表情なものであったが、それでもその緑色の両眼からは断固とした決意が揺れていた。

——両者とも微動だにしない殺伐とした沈黙が数秒、あるいは数十秒ばかり続いただろうか、『天照』がようやく口を開いた。

「……この場で雌雄を決する、か。それもまた面白い。……だがやめておこう。純血の神の末裔であるそなたに、我如きが勝てるとは到底思えぬゆえな」

諦めたような、どこか自身を卑下するような声だった。

その声に、二人の間で無言のうちに交わされていた殺気は打ち消される。

後に残ったのは清涼とした肅然なる空気だった。

「賢明な判断です。十中八九勝つのは私でしょうが、貴女が死んでは意味がない。貴女にはこれから天岩戸を存続させ続ける役目がある」

「……それが岩戸を開くことに繋がると？」

「無論のこと。私たちの目的は後にも先にもそれただ一つ」

女の白磁の肌がぼんやりと月明かりに照らされる。

今まで変化のなかった『月読』の顔に薄い笑みが浮かんでいた。

「……『素戔鳴』もそうであったのだろうか」

「会ったことのない者のことなど、私にもわかりません」

『天照』の言葉に『月読』の頬が一層緩んだ。

「それもそうか」

それに釣られるように『天照』も笑みを浮かべ、すぐさま表情を引き締めた。

『月読』も再び表情を消す。

元より二人がこうして会っていることは誰も知らぬこと。

もはやこれ以上の時間はかけられなかった。

お互いの立場——去る者と残る者として。

「では『月読』よ。最後に一つ、伝えよう。そなたが去ることを我は認めよう。だが天岩戸は認めない。ゆえに追いかけてみよう。――だが去るからには決して見つかるな」

それはどこか奇妙な言い回しだった。

だが今の『天照』にとつて、その選択肢が精一杯の譲歩だった。

真実、神の末裔である『月読』と違って、『天照』は神の血を引いておらず、天岩戸という組織の中で他の反対を押し切って我を通すだけの突出した力も持っていないのだ。

毅然とした『天照』の言葉と、その裏に秘められた最大限の気遣いに『月読』は深々と頭を下げた。

「ふん、これで三貴神も『天照』のみか」

顔をあげた『月読』に『天照』は皮肉と自嘲を混ぜたように言った。

『月読』はその声に応えずに体の向きを変える。

『天照』もそれを見送ろうとはせず、踵を返す。

背を向けた二人の女。

閑寂の山林の風に乗せるように、緑色の瞳をした女が口を開いた。

「……いつか、また揃うこともあるでしょう。……いつか」

「ほう、それは予言か？」

青色の瞳をした女が楽しそうに、そしてどこか嬉しそうに応えた。その言葉を交わす間にも、二人の足は止まらない。

振り返っても互いの姿が視認できぬ距離まで歩いたところで、一際強い風が吹いた。

女は一度だけ立ち止まり、緑の瞳で新円を描く月を見上げて口ずさむ。

「予言？ 真逆。」

私に予言など出来るわけがないでしょう。

私には未来などわからない。

私がわかる真実は――過去だけです」

木々のざわめきに隠された女の言葉を聞いた者はいなかった。

しかし——岩戸はいずれ開かれる。

過去しかわからぬといった者が、未来を断言したその矛盾。
その真意に気付く夜は、まだ遙か遠い。

ヒトツノハジマリ 01（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

この作品の時系列は『殺戮天使 蒼の章』の前、スタートの作品になります。その為、初見の方にも読めるような作りにしようと思っております。

それではよろしければ最後までお付き合いください。

翠の章 02

1

4月29日。

例年より多少足早に通り返ぎていった桜前線の気紛れな行動に、外を歩くと稀に見かける桜の木々の冠はピンクからすっかり新緑に色移り、道路の端には役目を終えた花卉が干物みたいに色気なく散り積もっている。

時折、体を撫でていく風は心地良い程度に冷たさを残し、急ぐように桜を散らしていった温暖な気温と合わせれば最高の気候だろう。天空には青空が広がっている。

そんな文句の付けようもない気持ちの良い卯月の終わり。

盛大に景気の悪い顔をした少年が閑静な住宅街を歩いていた。

少し長めの黒髪に、目鼻立ちがはっきりした端正な顔立ちは、やや女性的でもあり中性的な美少年といったところだろう。

背は高くもなく低くもなく、上下とも細身のシンプルな洋服で、薄手のジャケットの下から覗く肌が男性にしては白いというのも彼を中性的に見せている一因だ。

ただその表情は、一足先に梅雨を先取りしているかのようにどこかじめじめとしていて、その魅力が今は翳っていた。

「……はあ」

大きなため息。これはもう何度目だったか。

あまくらたけ
天倉竹はその表情と寸分違わぬ景気の悪い息をつき、黙々と目的地まで歩を進めていた。

ポケットから携帯を取り出して時間を確認する。

11時32分。

自宅を出たのが大体20分前。

起きたのがそれより40分前だったから、起床時間は10時半過ぎ

になる。

高校生である竹の起床時間としてはゆっくりといえる時間だが、今日は祭日で学校は休みだ。

何時まで寝ていようが問題はない。

それを見越して昨晩は深夜、殆ど明け方といえる時間まで起きていたわけだが――

『竹か？ 今から私の家に来い。話したいことがある』。

そんな回避不可な電話に出てしまったことが運の尽きだった。

気持ちよく惰眠を貪るはずだった不健康な予定を潰され、十分な睡眠は取れなかった上にこの行脚だ。

いくら気持ちのいい陽気であろうと、気分が高揚できるわけもない。

しかも――これから竹が向かう先に、十中八九、良い事が望めるわけもないのだから。

竹は再度ため息を吐いて歩き続けた。

閑静な住宅街の中にそのマンションはある。

どこにでもある特徴のない平凡な造りの6階建てのマンションで、元は外装は白であったのだがそれなりの築年数の為に、一面灰色にコーティングされてしまっている。

それでも元々特徴のない造りだったのが功を奏したのか、灰色に変色してしまっているのに全く違和感はない。

あえて言うならマンションの周辺にはごく一般的な住宅しかないのだ、一際マンションの高さが浮き出てしまっているのが違和感といえば違和感だが、それも長い時間の経過によって元からそうであるというように、当たり前前の風景の一つとして認識されてしまっている。

そのマンションの最上階にあたる6階の一室が竹の目的地であり、竹を呼び出した人物の根城であった。

「それで？ 何ですか話したいことって」

竹はその部屋に通されると、普段なら必ずといっていいほど入れている沈黙の間を取らずに早々に切り出した。

どことなくぶつきら棒に聞こえる竹の声には、どうせ碌なことじゃないんだろう、という諦めと、早起きをさせられた不満とが混ざっていた。

「そう急くな。コーヒーくらい出させる。眠気覚ましだ」

竹の不満声に、不遜に返して二人分のコーヒーカップをそれぞれの席の前に置き、そのまま竹の対面の椅子に腰掛けた女性。

黒澤^{くろさわ}怜は竹の急いた態度と対照的に、湯気の立つコーヒーにゆっくりと口を付けた。

長い足をテーブルの下で組み、優雅にコーヒーを飲む怜の姿は非常に絵になる。

それは彼女がかなりの美人であることや、竹よりも7つばかり年上の大人の魅力ということもあるだろうが、今日の怜の姿は普段よりも何割か増して絵になっていた。

いつもは後ろで束ねているセミロングの髪を今日は下ろし、飾り気のない黒い詰襟のシャツに、珍しく丈の長い黒のフレアースカートと上下黒で統一されたその姿はどことなく不吉で、それゆえに彼女のイメージにぴたりだったのだ。

現代に生きる魔女。

それが黒澤怜である。

あまりにも嵌った怜の姿と態度に竹はほだされるように息をつき、とりあえず出されたコーヒーに口を付けた。

手馴れたもののなかコーヒーは竹の好みの甘さだった。

怜はテーブルに置かれていたタバコを吸い始める。

「吸うか？」

「じゃあ一本もらいます」

高校生と一応その保護者となっている者との会話とは思えないやり取りを、二人はごく自然にした。

まあ喫煙どうのこうのなんて問題は、竹や怜が足を突っ込んでい

る世界の中では瑣末なことである。

天倉竹、職業『解決士』。

黒澤怜、職業『魔法使い』、その他色々。

それが竹と怜の、平穩な表の社会とは一線を画する裏の世界での肩書きだった。

竹がぼんやりと怜の姿やヤニで少し黄ばんだ壁紙を眺め、貰ったタバコを一本吸いきったところで、今度は怜から口を開いた。

「さて、それじゃあ呼んだ理由を話そうか」

怜は少々吊り上った三白眼で竹を見た。

竹は無言で怜の次の言葉を待つ。

わざわざ呼び出されたのだ、それなりの理由があるのだろう。そんな当然の覚悟ともいえる思いが竹にはあった。

しかし――

「実はだな……そろそろ蒐集品の整理をしないとまずいんだ」

「は？」

予想外の言葉に竹は間抜けに口を開けた。

それに構わず怜は続ける。

「今は使っていない部屋に詰め込んでいる状態だな。どこに何があるか全くわからなくなっている。だから整理を手伝え」

怜の言う、使っていないという部屋はこの部屋のことではなく、6階フロアの他の部屋のことだ。彼女は6階ワンフロア全てを貸しきっていた。

ワンフロア全てを貸しきっているのだが、生活空間として使っているのはこの部屋のみ。

それ以外は彼女の集めた古今東西の品物の倉庫状態となっている。怜は様々な肩書きを持っていて、その中で『蒐集家^{しゅうしゅうか}』という仕事も持っている。

本来は依頼人から受けた品目を集めて売るだけという職種のはずなのだが、何故か怜は依頼者が不在なのに色々と物品を集める癖があ

る。最近は特にそれが顕著だ。

ここまで来ると仕事というよりも殆ど趣味の領域だが、本人も趣味だと認めているので問題はないだろう。

だが――

「何故に、オレが整理を手伝う必要が？」

そこは大いに問題である。

怜が個人的な理由で集めたものなのだから、整理なら一人でやればいいだろう。

竹が手伝う義理はないはずだ。

しかし、怜はそんな竹の正論はどこ吹く風。

「いつの間にか私一人ではさすがに厳しい量になっていてな。どうせ明後日から連休だろう。だから手伝え」

「……」

何が『だから』なのかさっぱり理解できなかった。

連休は竹のものであって怜のものではない。

それに厳しい量というほどの物品の整理をどうして手伝える気になれるだろう。

しかも怜が集めている品物の多くは宝具と呼ばれるもので、それ自体に特殊な能力が秘められている云わば神秘が具現化した異形のモノだ。

仮に取り扱いを間違えた場合、洒落で済ませられるようなものではない。

どこをどうとつてもマイナスばかり。

更にそんなことをわざわざ伝える為に今日、呼び出されたのかと思うと徐々に腹が立つてくる。

――断ろう。

そう竹が決断して口を開こうとしたところで怜が遮るように言う。

「無論タダとは言わん。整理中に気に入ったものがあれば好きなだけ持っていけ」

「え？」

怜の太っ腹を通り越して暴挙ともいえる大盤振る舞いに竹は驚いた。

仕事で集めたものは別にして、趣味として集めた蒐集品は怜にとって何よりの宝のはずだ。それをいくつでも持っていていいなどと、普通に考えてありえないことだった。

少なくとも怜と知り合ってから3年間の間に、こんなことは一度もなかった。

何か裏があるんじゃないか、と竹は懐疑の目で怜を見た。

だが怜はそんな竹の視線に気付いても全く態度を変化させず、あまつさえそんな疑惑を向ける竹に皮肉に口元を吊り上げてみせる。

「なんだ？ 別に裏などないぞ。手伝ってもらった場合の正当な報酬だ。まあそれだけ整理が大変になりそうということだが。どうだ？ 手伝ってくれるか？」

「……ああーつと……」

怜の言葉に裏がないというのはわかったが、その分面倒だということもわかった。

竹は中空を眺めてどうしようか考える。

確かに報酬は魅力的だ。

もしかしたら気に入るものがないかもしれないが、そのときは適当に何か貰って誰ぞかに売り払ってしまってもいい。

面倒ということを差し引いても十分お釣りのくる仕事だが――

「何だ？ 予定があつたか？」

答えを出さない竹に怜がコーヒークップを傾けながら尋ねた。

その態度はどちらでも良いと敢えていつているようで、逆にプレッシャーだった。

そして竹は考えあぐねた拳句――

「当日、暇だったら……」

そんなどちらとも付かない、微妙な解答を寄越してみせた。

怜の眉がぴくりと持ち上がる。竹の解答に納得がなかったのだろう。

「随分と曖昧な答えじゃないか」

「ええ、まあオレも学生ですから連休中、遊ぶ予定が入らないとも限りませんし」

「……学生ね。まあいい。それじゃあ予定が入らなかったら手伝わってもらうぞ？」

怜は含みを持たせた視線で竹を見た後、念を押すように言った。

竹は首肯する。

「了解です。でも怜さんの方は予定入ったりしないんですか？」
「ないな」

竹の質問に怜は即答した。

「最近『紹介者』の仕事も殆ど開店休業状態だ。どこかで大きな事件でも起これば仕事も入ってくるんだろうが、まだ私の耳には届いてないし、暫くはこんな状態だろう。まあだからこの機会に倉庫整理というわけだ」

怜はそう言つて肩をすくめた。

「それはまた……景気の悪い話ですね」

「何を言う。これまで景気が良い話の一つでもあったか？」

怜はニヒルに笑つてみせる。

竹はこれまでのことを一通り思い浮かべ――

「……ないですね」

鼻先で小さく笑つて言った。

竹や怜が住まう世界は、結局のところ血で血を洗う暴力の世界だ。仕事があるうがなかるうが、どちらにせよ景気が良いなどと言えるような話ではないだろう。

「だろう？ まあそういうことだ」

怜は小さく肩を竦めて言つて二本目のタバコに火をつける。

竹は今度は自分のタバコをポケットから取り出して、そちらを吸い始めた。

口から漏れた紫煙が真っ先に前髪に当たる。

「髪、伸びたな」

それを見た怜がぼつりと呟いた。

竹はタバコを銜えたまま前髪をいじる。

確かに大分伸びている。

前に髪を切ったのはいつだったか。

少なくとも新学期が始まる前だった。

竹はそこまで思い返して、

「今日、切りに行きます」と思いつきで口にしていた。

思いつきで言ったことだったが、中々に良い思いつきだったと竹は思った。

元々惰眠を貪るだけで終えるはずだった休日だ。

勿論、午後の予定はない。

こういう切欠でもなければ、髪を切ろうと次にいつ思い立つかわからない。

「そうしたらいい」怜は小さく頷いた。

話自体は終わっていたし、それを止めるような理由も当然ないのだろう。

しかし、それこそ電話で済むような内容で呼び出しておいて、その素っ気無さはいかなものか。

竹はそう考えて、何か皮肉の一つでも言ってやろうかと思い――

「……」

結局何も言わないでおいた。

暖簾に腕押し、豆腐に鎚。

存在の半分が皮肉で出来ているような怜に皮肉を言っても無駄だろう。

竹はタバコを吸い終わると、コーヒーを半分ほど飲み干して立ち上がった。

思い立ったが吉日。決心が鈍らないうちに行動するべきだ。

「それじゃあ、明後日予定がなければ」

「ああ、よろしく頼む」

怜は竹に予定が入らないと見越している風に言った。

それもまた癪だったが、まあいいか、と竹は片方の口角を小さく上げて苦笑いを作り、

「それじゃあ」ともう一度言って黒澤怜の自宅を後にした。

明後日の予定は今のところ白紙。

恐らく怜を手伝うことになりそうだ。

竹はマンションの玄関から出た後、一度小さく肩を上下させてから歩き出した。

——今日はとりあえず髪を切りに行こう。

翠の章 02（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

藍の章の12月から半年以上戻った5月のお話です。

人物描写に関してはお浸りの部分と、最初の物語になるのでやや詳しく描写していく予定になります。

それでは開始しました翠の章。最後までお付き合いよろしくお願いします。

4月30日。連休前の最後の登校日。

昨日が祝日で休みだったからだろう。

登校中の学生の顔には、どうせだったら今日も休みにして欲しい、という気だるさが浮かんでいる。

普段であれば竹もそんな一般論に大いに同意したいところであったが、今日に限っては何故か手放しに同意する気が起きなかった。

それは別に髪を切ってさっぱりしたから、なんてことではない。

髪を切ったことに関して言えば、むしろ前髪を短く切りすぎてやりちまった感があるくらいである。

だからこれは予感。

朝起きた時からなんとなく、今日は学校に行く必要がある気がしていた。

そしてその予感は学校へ近づけば近づくほど強くなっていく。

竹は時たまこんな安定感のない気持ちに駆られることがあるのだが、その殆どが悪い予感だった。

しかし、今日感じているものは珍しくそんな悪い方向性のないものだった。

元々根拠のないものだけに良い悪いという考え方自体が間違っているのだが、これまでの経験上、竹の予感というものは大抵が当たる。だから竹は、久しぶりに感じた良い予感というものに少しだけ心躍らせていた——のだが、

「ういー」

後ろからかけられた声に全部が霧散した気がした。

別に普段であればそんなことも思わなかったのだろうが、せっかく良い予感のした朝だ。どうせ朝イチで声をかけられるならむさ苦し

い野郎よりも、女の子の方がずっといい。

とはいえ声をかけられたものは仕方ないし、無視する謂れもない。
「ういつす」

竹は横に並んできた人物に軽く挨拶をした。

身体のサイズよりも大きめの竹と同じ学校の制服を着た、坊主頭で口元と顎に髭を蓄えたどう見ても高校生には見えない男子は竹の横に並ぶと、

「竹、今日学校来たんだ」

といきなり失礼な発言をかました。

「……いや、来るだろ普通に。何でよ？」

とりあえず発言の真意を尋ねる。

「昨日休みで明日からも休みだったじゃん？ だから休むかと思っ
た」

男性にしては高い声で松田聡也^{まつだ ともや}は言った。

「なんだそりや……」

竹は軽く息をついてから、

「それを言ったらお前だって同じだろ。昨日休みで明日も休み」と
言い返した。

「あー、まあね。でもクラブのイベント今日だし」

何が『でも』なのか。

まあ多分、昨日がイベントだったら今日は休んだということだろ
う、と竹は理解した。

「竹も一緒に行く？ おいちゃんは来るけど」

松田は今夜のイベントにおいておいちゃんこと^{たてばな}館花直人^{なおと}と行くらしい。

「そっか。まあオレは行かないけど」

「何で？ 女の子いるよ？」

「そりゃいるでしょ。でも行きません。おいちゃんと二人で楽しんで
きてくれ」

自分がああいう空気が肌に合わないことを知っているのだから竹は断る。
松田も一度固辞した竹が心変わりすることがないことを知っている

るので、それ以上誘おうとはしなかった。

「うー。そういえば髪切った？」

「おう、切った切った。前髪邪魔だったから短くしたんだけど、完全にイキ過ぎた」

「あー、いつちゃった系ねー」

そんなとりとめのない会話をしながら並んで歩いていると、いつの間にか八里浜高校に到着していた。

クラスの違い二人は下駄箱の前で一度別れた。

たまたま人の少ない時間帯だったらしく、竹のクラスの下駄箱には女子生徒が一人しかいなかった。

あと10分もして予鈴間際になれば、下駄箱の前はドツと人数が増えるだろう。

「あつ、おはよう！ 天倉君っ！」

「ん、おはよう」

竹は先客だった同じクラスの女子に軽く挨拶を返し、靴を履き替えようと下駄箱の扉を開けようとして、一時停止した。

その竹の奇妙な行動に、幸いにも先客だった女子生徒は気付かず、下駄箱の前から立ち去っている。

竹は大きく息を吐いて、意を決したように下駄箱を開けた。

そのスチールで小さく区分けされた埃っぽい空間に入っていたのは、見慣れた上履きと、可愛いライトグリーンの封筒が一通。

「……うわお」

誰にともなく呟いた。

どうやら朝から感じていた良い予感というのは、このことらしい。

何もしていないのに、ワテンポ早くなっている心臓の音がその証拠である。

この可愛い封筒が果たし状の類なわけがない。

ゆえに下駄箱に仕込まれたこれはラブレターだろう。

これが誰かの悪戯でなければ、だが。

まあそれは内容を読んでから判断すればいい。

竹はとりあえずその封筒を鞆の中に押し込んで靴を履き替え、先に靴を履き替えていた松田に合流し、そのままそれぞれのクラスへ向かう。

松田にこのことを言うつもりはなかった。

言ったら面倒だからだ。

——今時ラブレターというのもなんだが、せっかく学生やっているんだからこんなイベントも悪くない。

そんなことを考えながら、竹は自分のクラスへ向かった。

*

結論から言えば、竹がラブレターだろうと心の中で断言したそれは、本当にラブレターなのかいまいち判別に苦しむものであった。

——本日放課後、屋上にて待つ。

こっそりと休み時間に封を開けて読んでみると、便箋に書かれた内容はそれ一文だけ。

差出人もわからぬ上に、微妙に果たし状チックだった。

しかも、かなり達筆な文字だったのが疑惑を増加させていた。

屋上に呼び出してから告白的な流れ、というのも可能性としてはあったが、そもそも屋上は立ち入り禁止で常に施錠されているのだ。

屋上で待つのも何もないだろう。

——悪戯だろうか。

自分では悪戯を仕込まれるようなキャラではないと思っていたが、ここにきて悪戯の線も濃厚になってきた。

確率でいうならばまだラブレター3、果たし状3、悪戯3、それ以外1のイーブンといったところだが後の3つは嬉しいイベントとは残念ながらかけ離れている。

ここにきて竹のテンションは良い感じに落ち始めていたが、さりとて無視するわけにもいかず竹は指定された通り放課後、屋上へと

向かった。

放課後の屋上。

言葉面だけなら何か甘い雰囲気をかもし出しているが、完全にプロの犯行と思われるピッキング技術によって開錠されている扉を見て、まだそう信じられる者などそうそういないだろう。

もしいるとするなら、それはよっぽどの間抜けかともないメルヘンだ。

しかし、この世の中はどうかやら勘違いする者ほど強く出来ているらしい。

竹が初めて足を踏み入れた屋上で待っていたのは、長い烏の濡れ羽色の髪をした美少女であった。

深窓の令嬢。

おおがみしんり

大神深翠を一言で現すのならそれが最も的確な表現だろう。

雪のように白い肌をした日本的な美人で、クラスの人間の名前をまだ殆ど覚えていない竹でも彼女の名前はしっかりと覚えている。

儂げな雰囲気を持った美少女、というのが一般高校生の中で浮いているだけと言ってしまったええそれだけかもしれない。

実際、彼女はクラス、学年、もつといえれば校内でも飛びぬけた美人だが、アイドル的な立場にはなっていない。

それは近寄り難い彼女の雰囲気と、基本的に誰かと会話するわけでもなく日々教室の自席に座っているだけということがそうさせているのだろう。

それでも彼女はいるだけで存在感があった。

学年が上がって同じクラスになっただけの竹が、自然と名前を覚えてしまうほどに。

「——来てくれましたね」

屋上のフェンスから程近い場所に佇んだ大神深翠は、竹の姿を確認するとゆっくりと口を開いた。

「あの手紙は大神さんが？」

「そうです。今日は天倉君に話したいことがあって呼び出しました」
「話したいこと？」

「はい。ただこれを話す前に一つだけ約束してください。私がこれから話す内容を絶対に他人に口外しないで欲しいんです」

大神深翠の言葉は同じ年の男子学生に告げる言葉にしては、奇妙な警戒心と何かを敵視するような刺々しい響きに覆われていた。

「……」

竹は彼女の姿を見た時は一瞬、この世の中はどうかやら勘違いする者ほど強く出来ているらしい、などと思ったがどうやらそれは大間違い。

数十秒間の甘い幻想だった。

「……わかった」

竹は数瞬の沈黙の後、頷きながら答えた。

「それで、話したいことって何？」

問い返した竹の声には何かを諦めたような響きがある。

それは竹の中で何かが切り替わった合図だった。

大神深翠はそんな竹の雰囲気を感じたのか、それとも始めから竹が頷くのを予想していたのか、竹の問いかけにすぐさま応える。

「——私は命を狙われています。だから私を護ってください。解決士」

翠色の瞳で竹を捉え、淀みない口調で大神深翠は言った。

彼女が口にした解決士という言葉。

それは少なくとも普通の社会に生きている者が知るわけもない肩書きだ。

しかし、竹は彼女の口からその肩書きが出ても、驚いた素振りをみせなかった。

ラブレター、果たし状、悪戯、それ以外。

そのどれもが不正解。

あえていうならそれ以外が正解なのだろうが、こんなことになるとはさすがに想定していなかったのに、である。

——それはやはり予感。

それも悪い予感の方が大神深翠の声を聞いた瞬間にしていたのだ。しかも始末の悪いことに、竹が感じたものは怜に厄介事を持ちかけられた時の感覚に似ていた。

だから覚悟は出来ていた。

だから気持ちを切り替えた。

何を言われてもいいように。

竹は表情を消して、事務的な口調で尋ねる。

「いつから？」

「明日から」

「いつまで？」

「私を護り切るまで」

「報酬は？」

「望みのものを用意します」

竹の問いかけに深翠も淡々と事務的に答えた。

竹はそれらを聞くと一度小さく、うん、と頷くと、

「OK。その依頼、確かに承った」と薄く笑いながら言った。

その殆ど内容を詰めていない、常識的に考えても安請け合いにかみえない竹の態度に、

「……いいんですか？」

と深翠はさすがに怪訝そうに問うた。

しかし竹は、

「ん？ まあいつもだったらもつと色々聞いてから判断しただろうけど、今回は特例」

「特例、ですか？」

竹の妙な言い回しに深翠が形のいい眉を寄せる。

竹はそんな深翠のことを見て、短い前髪をいじりながら、

「そう、特例。——美少女の護衛の方が、どう考えても倉庫整理よりは楽しいだろうから」

と微笑みながら深翠には意味がよくわからない言葉を使った。

「――」

深翠はその言葉に一瞬フリーズしたが、すぐに気を取り直したように、

「よろしくお願いします」と頭を下げた。

「はいよ、お願いされました。それじゃあ明日からオレは君の護衛
つてことで」

そう言ってもう一度小さく頷いた竹には、深翠がその口元を妖しく歪めていた事に気が付かなかった。

そしてもう一つ――

物事の始まりの季節。

明日から始まる黄金週間の出来事が、

もう一度、あの黄金の少女まで到る物語のスタートだとは、竹はこの時まだ気付いていなかった。

翠の章 03（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

間が空いてしまい申し訳ありません。

出だしだからなのか、あるいはまだ自分の中でふわふわと固まってい
ない部分があるのか、中々に難しい章です。

とはいえ既に走りだしているので、完走目指してやっていきたいと
思います。

5月1日。ゴールデンウィーク初日。

人によつては一昨日から始まっていたかもしれないが、竹にとっては今日が連休の初日である。

それに対してとりあえず不満はない。

今年は1日から5日まで続けての休日になっているからだ。

春でも夏でも、冬休みでもない時期外れの連休でこれ以上を望むのはさすがに欲張りすぎだろう。

黄金週間という名が実に相応しい大型連休。

世間の方々が競い合うように行楽地へと群がっている中、竹と深翠はそんな混雑とはまるでかけ離れた、無人の電車で揺られていた。

無人といっても竹と深翠、そして車掌が乗っているので正確には無人ではないのだが、それでも自分たち以外に乗客が皆無の電車に対してそう称しても、なんら差し支えはないだろう。

貸切り状態。

少なくとも竹は今までの人生で乗客が自分たち以外におらず、しかもこれからも増える気配のない電車に乗ったことはなかった。

喧騒とは無縁の山岳風景をのんびりと走る、2両しかないローカル鉄道。

話には聞いたことがあったが、実際に体験してみるとそれなりに感動的ではあった。

——周囲の視線がないというのがこれほどまでに心地いいものだとは。

竹はそんな小さな感動を感じながら、少し間を空けて横に腰掛ける深翠の顔を横目で見た。

竹は疲れたように小さく嘆息を付く。

人ごみが嫌いな竹としては、混雑が予想される行楽地へ連れてこられるよりかはよっぽど良いのだが、それでもため息をつきたくもなるというものだ。

横目で見た大神深翠は私服の竹とは違い制服姿。

表情を消した状態で、車窓に流れる風景をただぼんやりと眺めていた。

この電車に乗るまで数本の路線を乗り継ぎ、最初の方は席に座れないこともあったが、その時も彼女は窓の外を無言で眺めていた。

これまで二人の間に、雑談と呼べるものは一切なかった。

確かに竹と深翠は友人でもなんでもなく、昨日初めて会話をしただけの仲なのだが、それでもこうして二人で同じ目的地へ向かっていくのだ、多少の雑談があってもおかしくはないだろう。

だが深翠は一向に口を開かなかった。

竹が今日、深翠の声を聞いたのは朝に待ち合わせ場所で会ったときの挨拶と、電車を乗り換える時の指示だけだ。

別にべらべらと喋りたいわけでもない。

沈黙が嫌いなわけでもない。

それなりに気心知れた仲なら、このような沈黙はむしろ心地よいとすら感じるだろう。

だがしかし、昨日今日知り合ったといってもいい者と、この沈黙は辛かった。

音楽でも聴いて一人の世界に、という案もないわけではなかったが、昨日今日の仲でそんなことをしては、それこそこちらから会話を拒絶しているようでそれも出来なかった。

居眠りも同様だ。

彼女の方はこの沈黙が平気なのだろうか、と竹は道中、何度か深翠の表情をさり気なく伺ってみたが先述の通り深翠はまるで参った空気がなかった。

これならまだ周囲の雑音が入る混雑地帯の方が心地良く感じたはずだ——と考えてそれも思い直す。

今回に限っては、それもまた辛いものだ。

竹は再び嘆息をついてから、緩やかに流れる風景に眼を移した。

若々しい緑が生い茂る山林の間を縫って、2両ぼっちの電車は進む。

——それにしても随分、辺鄙なところまで連れてこられたな。

沈黙に耐えかねて若干ながら滅入った心持ちで内心呟き、竹は本日何度目かになるここに至るまでの経緯を思い返すことにした。

*

昨日の放課後、深翠の依頼を受けた竹は、そのあとも何かを聞くと
いうことはしなかった——というよりも出来なかった。

「詳細は明日話します」

竹が口を開くより前に、頭を上げた深翠がそう告げたからだ。

これにはさすがに竹も困惑の色を隠せなかった。

殆ど概要も聞かずに二つ返事で依頼を受けたのは確かに先走ったと
いつてもいい行動だったが、それでも竹は依頼を受けた後に必要な
情報は聞こうと思っていた。

だが深翠はそれを拒否した。

その拒絶染みた言葉は先手を打たれた感があった。

何が悲しくて護るべき依頼主に先手を打たれなければならないのか。

——もっと詳しく聞いてから判断するべきだった。

当たり前の事で竹は後悔した。

とはいえ普段の竹であれば、こんな周到さに欠ける行動は取らな
かっただろう。

基本的に竹は事前に必要そうなものは集めておくタイプなのだ。
ならば何故、こんな浅はかな行動を取ったのだろうか。

ラブレターだと勘違いして気分が高揚していたから？

告白だと思ったら仕事の依頼でやけになっていたから？

怜の倉庫整理と称した強制労働に参加したくなかったから？

そのどれもが正しい気がして、そのどれもが間違っている気がし

た。

どうにも満点の解答が見当たらない竹であったが、すぐに思考を切り替えた。

というよりも切り替えざるをえなかった。

竹が意識を外からはずして自問自答をしていたのは、数秒足らずのこと。

その僅かなうちに、いつの間にか深翠が竹との距離を詰めて目の前にいたのだ。

気を張っていたわけではないが、気を抜いていたわけでもない。

深翠からの話が裏稼業の話に及んだ段階で、竹はそれなりに緊張感を持っていた。

なのに、竹は深翠がほんの目の前に来るまで気付かなかった。

そんなこと、例えば賞金首の上位連中でも中々出来ることではないだろう。

彼女に敵意がなかったから気付かなかった、と言ってしまえばそれまでだが、それでも異常なことだった。

いくら自分の裏の肩書きを知っていても、所詮は女子高生。

ましてや1年間同じ学び舎にいて、なんら異常性を感じなかった相手。

そんな大それたものじゃないだろう。

竹はそんな風には大神深翠のことを捉えていたのだが、どうやら考えを改めなければならぬようだった。

——完全に早まったみたいだわ。

竹は内心で苦々しく笑い、もの凄く後悔し始めた。

今から契約解除できないものか、なんて思案を始めるほどに。しかし——無理っぽいな……。

「明日の朝9時に八里浜駅前に来てください。向かわなければならぬ場所があります。そちらに宿泊することになりますから、そのつもりで準備をお願いします。契約は既に結びましたが、仕事の開始は明日、合流してからで構いません」

竹の思考を先回りするように深翠はまくし立てるように言っていた。

「……宿泊って泊まりってこと？」

「はい。泊まりです」

「それは二人で？」

「そうなりますね」

「……」

二人の顔の距離は１メートルと離れていない。

近くで見れば見るほど深翠は綺麗な顔立ちをしていた。

透き通るように白い肌と腰元まで届きそうな長い黒髪のコントラストは美しく、堅固な意思を示すような眉に綺麗に筋の通った鼻。

引き締まった小ぶりの唇は瑞々しい。そして眉上で切り揃えられた前髪の下に覗くやや垂れ気味の大きな両の瞳は、人を包み込むような翠色。

竹が今まで出会った女性の中で間違いなくトップ１０、いや、トップ５に名を連ねる美貌だった。

こんな美少女の頼みを断れるだろうか？

——断れるわけがない。

竹とて健全な高校２年生の男子なのだ。

その頼みの裏にどんな怪しげなものが匂っていても、ここまでの美少女の口から二人で宿泊を口にされて断れる漢気はない。

それに——まあ何があっても別に大丈夫だろう。

そんな楽観論が竹の中には確固としたものとしてあった。

竹は別に自分個人の力を過大評価はしていないし、そのつもりもない。

むしろ過小評価しているくらいだ。

しかしその上で、何が起きても大丈夫、そんな考えが竹にはある。それは裏の世界でも屈指の、そして恐らくは現在最強の名を轟かせる集団、十三夜をまがりなりにも纏めている天倉竹だからこそそのものだ。

個で最強にして集なれば無敵。

一人で危なくなれば助力を願えば良いのだ。

それでどんな話であろうと済むだろう。

竹は自身が束ねる十三夜に絶対的な信頼を抱いていた。

「——わかった。それじゃあ明日、駅前で。一応、携帯の番号教えといてくれる？」

竹はあまり顔を直視しすぎるのもよろしくないだろうと思い、視線を微妙に後ろのフェンスに移しながら言った。

「携帯は持っていますせん」

「あ、そうなんだ」

一瞬、今時携帯持っていないのか、と思ったが、まあそういう人もいるだろうと納得する。

ポケットから携帯を取り出そうとしていた手が何も掴まずに元の位置に戻る。

「それじゃあこっちの番号だけ教えるわ。メモ取れる？」

「ないけど大丈夫です。覚えますから」

「ああ、そう。それじゃあ——」

竹が自分の携帯番号を口にすると、深翠は「覚えました」と言つて一度竹の番号を復唱してみせた。

今伝えただけの番号を復唱するくらいなら大抵の人には出来るだろうから、それで完全に覚えられたのか判断はできなかったが、本人が覚えたと言っているのだから覚えたのだろうと竹は納得した。それに別に番号を忘れたところで深翠自身が携帯を持っていないのだ。明日から行動をとにもするであろうことも併せて考えればそれほど問題もない。

「——じゃあ今日はこれで解散しますか」

竹は再び深翠に視線を戻して言った。

「はい。二度目になりますけど明日からよろしくお願いします」

「こちらこそ。とりあえず詳細は明日聞くから」

竹の言葉に深翠は頷き、そして竹が踵を返すよりも早く竹の横を

すり抜けて屋上をあとにした。

「……」

先に去ろうと思っていた竹だったがタイミングを逃し、深翠の姿が扉の中に消えるまで眺めた。

鉄製の少し錆びた扉が悲鳴を上げるように開閉する。扉が閉まる時にその自重で一際大きな音を立てた。

竹はその音に少しだけ眼を細め、鼻で息を吐いた。

——大神深翠は命を狙われていると言った。

誰に？

どうして？

何故、自分の裏稼業のことを知っていた？

結果的に自業自得だったとはいえ、その辺りの重要事項は何一つ聞けなかった。

まあ依頼者の意思を尊重して、今日は何も聞かないことにしたのだ、と竹は自分に言い聞かせる。

……単純に深翠に押し切られる形になっただけで負け惜しみなのだが、そう考えてしまうのは竹がまだまだ子供ということだろう。

はつきりしていることといえば、彼女を護るという依頼内容だけ。

今回の仕事は一寸先は闇だ。

友人であり十三夜のメンバーである脇光太郎わきこうたろうに調べてもらえば、そんな不明瞭な部分など一切合切判明するのだろうが、今のところ竹はそうするつもりはない。

それは無意味で不必要な博打。

天倉竹という少年は十中八九、悪い方向に流れるのが予見される、下手をすれば自身さえも危うくなるようなところで、そんな賭けをしたがる傾向がある。

——なんとなく、その方が面白そうだから。

竹は暫くデザイン性の欠片もない鉄製の扉に目を向け続けた後、思い出したようにポケットに手をつ込んで携帯電話を取り出した。

「……」

ディスプレイを眺めながら十数秒思案した挙句、竹はメールを打ち始める。

宛先は黒澤怜。

——暇じゃなくなったので、明日からの倉庫整理は手伝えません。すみません。

簡潔に文面を作成し送信。

電話にできなかったのは厭味や皮肉を回避する為だった。

怜はメール、というか機械系全般が苦手なのだ。

すぐに返信がくる。

案の定なのか、それとも竹が勘繰りすぎていただけなのか、怜からの返信は竹以上に簡素だった。

——わかった。

ぱちり、と携帯をたたみ定位位置のポケットに戻る。

そして一度、大きく息をついて屋上から立ち去ろうとして扉に手をかけ、半分ほど開けたところで止まった。

この屋上は本来立ち入り禁止で施錠されている。

その扉を開けたのは先に帰った大神深翠だ。

「——え、まさかこれはオレが閉じるのか……？」

そう確認するように呟いてみるも応える者はおらず、そして答えも一つしかない。

開けっ放しで去ればその後、校内で色々と問題として取り上げられるだろう。

それはどことなく後味が悪い。

「……めんどくせえ」

竹は心底たるそうにため息をついて、扉の前から離れた。

そしてそのままフェンスの方に近づいていく。

長年の風雨による汚れと、手入れをされずに錆びて、ところどころメッキが剥がれたフェンスに手をかけて屋上から眼下に広がる街並みを俯瞰する。

別段目新しいものが見つかるわけでも壮観な風景でもないが、あ

と2年足らずとなつた高校生活で、多分もう二度と上ることのないだろう屋上からの景色を独り占めするくらいは、これからの時間外労働に対して正当な報酬として許されるだろう。

竹は飽きるまで暫くの間、退屈な風景を見続けた。

そして次の日、竹は八里浜駅前に9時5分前に到着した。

駅前という漠然とした待ち合わせ場所の上、大型連休の初日ということもあり、混雑が予想される中で携帯を持っていない深翠との合流は、それなりに時間がかかるかもしれないと思っていた竹だったがそれは杞憂だった。

その理由は駅前を通りかう人々の視線が、ある一点に一度は向けられていたからだ。

その群集の視線の先には、大神深翠の姿があつた。

深翠は竹よりも早くに待ち合わせ場所についていたらしい。

それにしても――確かに彼女は人目を惹く美少女であるが、それでもその注目のされ具合は少ばかり異常だった、がすぐに竹はその理由に得心がいった。

深翠のスタイルは学校の制服に大きめの鞆と、なんだか一世代前の家出少女チックであつた。

――そりゃ人目も惹くわ。

竹は苦笑いと嘆息を同時進行させ、肩に背負つたスポーツバッグを持ち上げて位置を直してから深翠の元に歩み寄つた。

何故注目されているのかわからないといった表情を微かに浮かべていた深翠は、竹に気付くと表情を引き締めて挨拶をした。

竹も軽く挨拶を返す。

ここから仕事開始と相成つたわけだが、竹と深翠が合流した途端に周囲の視線が一層集まつた気配がした。

それもそうだろう。

制服を着ていた深翠だけなら、まだ高校の修学旅行という目もなきにしもあらずだったのに、ここにきて同年代の私服の男だ。

事情を知らぬ者たちから見れば、想像力を掻き立てられる光景だ
というのは想像するに難くない。

実に居心地の悪い視線を感じ始めた竹と、そして同じ気持ちだっ
たであろう深翠の二人は挨拶もそこそこに、その場から逃げるよう
に駅の構内へと向かった。

既に切符を彼女が用意してくれていたのは、余計な時間を食わず
に多少なりとも救いであつたが、やはり行楽シーズン。

二人の組み合わせは、他者に構っている余裕などないようなごつ
た返しの電車に乗っても人目を惹き続けた。

その注目のされ具合は、それこそ人がいない路線に乗り換えるまで
続いた。

その間、二人は周囲の視線に耐え続け——そして漸くそれらから解
放された、沈黙が息苦しい今に至るといふわけである。

翠の章 04（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

前話と比べて早めに更新することができました。

ただその分もしかしたらミスがあるかもしれないので、もしお気付きになられたらご指摘くださいませ。

*

最後に乗った無人電車を降り、目的の駅に二人は到着した。
白銅郷駅。

それが二人の降り立った駅の名前だ。

時刻は既に正午を大幅に回っているから、それなりの長旅だった。
不調、というわけではないが、それでも4時間弱電車で揺られていたのだとことなく身体の節々が凝っている気がする。

まあ殆ど気分的なものだろうから、少しすればそれ自体を忘れ去っていることだろう。

降りた駅には自動改札なんてものはなく、それどころか駅員すらもいなかった。

無人駅というやつだろう。

これも初体験だった竹はちよっぴり感動した。

切符は下車時に車掌に渡していたので、駅からそのまま外に出る。
このシステムを竹は知らなかったが、深翠は勝手知ったるといった感じだった。

ここでも新鮮な感動を覚えた竹は、いつから自分はこんなに感動屋になったのか、と内心で自身を皮肉ったが、すぐに思い直す。

仕事は始まっているとはいえ、そこまで斜に構えることもないだろう。

経緯や実情はどうあれ、せつかくの美少女との旅行なのだから。
気楽に気軽にいこう。

竹は軽く首を回した後、結局ここまで殆ど会話のなかった同行者に尋ねる。

「えっと……大神さん。これからどうするの？」

竹は今回の仕事の詳細についてまだ聞いていなかった。

ここまではさすがに人目があるという理由でその話題を避けてきたわけだが、そろそろ話してくれてもいいだろう。

たった今降りた電車内では人目はなかったが、話をするような雰囲気でもなかったし。

しかし、深翠は竹の言葉をそのままの意味で取ったらしい。

「ここからは徒歩です」

そう素っ気なく聞こえる声で応じた。

「ああ、そうなんだ」

期待していた答えではなかったが、とりあえず頷いておく。

ただし意思疎通がうまくいかなかったのをアピールするように、声には若干の落胆を混ぜておいた。

だが深翠はそれにも気付かない。

「はい。目的地には1時間程で着きます」

「……ああ、そうなんだ」

あくまでも普通の対応の深翠に竹はあからさまにため息をついて、ここでの会話を切り上げることにした。

深翠に話す気がない以上、これ以上催促するのはよろしくないだろう。

もしかしたら何らかの事情があつて、まだその話題を避けているのかもしれない。

真相はどうあれ、そう考えて自身を納得させる。

そして竹は駅周辺を見渡す。

駅前にはバスやタクシー、商店どころか人一人見当たらない。

足以外の移動手段がないのは明白だった。

「歩きですみません」

竹が気だるそうな返答をしたからだろう。

やはりそのままの意味で取った深翠は謝罪の言葉を言った。

ただしその表情はどこまでも無表情。

まるで済まなそうではない。

とはいえ歩くのは確かに面倒だが、現在の竹はあくまでも深翠の

護衛であり、彼女は依頼人だ。

雇用者と労働者。

こんなことで謝罪をされる立場ではない。

彼女の表情が変わらないのもそういうことがわかっているからだ。それでも形として謝罪をしたのは、同級生というもう一つ立場がそうさせたのだろう。

「いや、全然構わんよ」

竹はこれまでのやり取りと合わせて、同級生の、しかもさして仲の良くない依頼人との関係に若干のやり辛さを感じながらもそう応じた。

白銅郷駅に到着するまで車中からも時折見えたが、どうやらここは海が近いらしい。

しかし、今は駅に降り立った時には微に感じた海の香りはしない。代わりにするのは木々の香りだった。

見渡す限りが緑色。人の気配はない。

竹と深翠が歩いているのは、相当の年月が経っているであろう太い幹の木が目立つ樹海だった。

天は既に高くなっているというのに無数に折り重なる広葉が空を遮っている為、辺りは薄暗く乳白色の霧が辺りを覆っている。

それはある種の清涼感とともに、死体でも転がっていそうな不吉な雰囲気を感じさせる。

樹海に入る前は民家をちらほら見かけることもあったが、現在は当然のことながら人どころか人工物の類すら見かけない。

人の手が加えられた形跡のない鬱蒼とした森林で、辛うじてそれと判別できる細さの道を探して歩く。

探して——といっても、それは竹だけのことで先導する深翠はまるで迷うことなく、すたすた先を歩いている。

案内する立場なのだからそれは最低限のことではあるが、それでもこの道なき道をちつとも迷わずに歩けるというのは見上げたものだ。

った。

加えてこの山道をかれこれ30分以上歩いているというのに、深翠の息は一つも乱れていない。

それは竹も同じなのだが、仲間内では体力なしを公言しているとはいえ、常人以上には体力のある竹と一介の女子高生を比べるべきではないだろう。

が一般的にみても彼女は意外に体力があるらしい。

深窓の令嬢、というイメージだったが、少しだけ考えを改めた竹であつた。

大神深翠は相変わらず無言で、竹も話しかけなかった。

歩きながら詳細を尋ねても良かったのだが、これだけ深い森だけに、先導する彼女の気を逸らした拳句、迷子なんてことにならないとも言切れない。

それにここまで勿体付けるように後回しにされていることだけに、聞くときは落ち着いて聞きたい、という心理も働いていた。

深翠が向かっている目的地がどんな場所かはまだ知らないが、宿泊という話だったから、少なくとも歩いているよりかは落ち着けるだろう。

竹はそんな目算を立てていた。

そして、それは間違っていないことがすぐに証明される。

今までの左右を木々で覆われた道が途切れたかと思うと、唐突に拓けた場所に出た。

テニスコート一面くらいの広さだろうか。

立ち込めていた樹木はその場所を避けるように湾曲して立ち並び、代わりに高低がまちまちの雑草が生えている。

そして生い茂る雑草もある一点には生えておらず、黒々とした地肌をむき出しにさせていた。

ちょうど竹たちが出てきた地点から一直線に道のようになっていて、その道に沿って点々と等間隔で飛石が敷かれている。

深翠はその飛石を丁寧歩いていく。

歩くペースは山林を歩いていた時よりも遅いくらいだった。

竹もそれに続いて歩くと、すぐさま深翠が何故ペースを落としてあるいたのか納得した。

渋めのこげ茶色の飛石は少し湿っぽく、よく見みると端々に苔が付着していて滑りやすくなっているのだ。

竹は足を滑らせないように下を向きながら深翠の後ろを歩く。

そこまで過剰に気をつける程の道ではない——にも関わらず竹は下を向いて歩いていた。

「——この上です」

深翠はそれの前で立ち止まると、竹の方に体を向けて言った。

無視するわけにもいかず、竹は緩慢な仕草で視線を正面に戻した。高さ4メートル弱の石造りの鳥居と、その先に延びる石段。

その何の変哲もない神域への入口が、竹が視まいとしていたものだった。

顔を上げた瞬間、郷愁に似た感情が胸を埋め、猛烈に襲ってきた既視感に眩暈を覚えた。

「——うおう」口の中で呻くように呟く。

「どうかしましたか？」深翠が無表情に問いかける。

「……いや、なんでもないよ」竹は軽く首を振って深翠の声に応えた。

「………そうですか」

深翠はどこか観察するように竹の姿を一瞥した後、小さく頷いて再び体の向きを正面に戻した。

そして、そのまま石段を上り始める。

竹は深翠の後ろ姿を眺めたまま、その場に根でも下ろしたかのように動かない。

——既視感。郷愁。

それはこの鳥居を正面に見据えた時に強くなったが、それより少し前、山道を抜けてこの広場まで出た時には湧き上がっていたものだった。

ここはあまりにも似ていた。

竹が幼少時を過ごした天岩戸という組織の隠れ里に。形では決して現すことの出来ない、創り上げることの叶わないその空気が。

しかしここは当然、竹が胸に抱いた故郷ではない。似ているが違う。

あの隠れ里もここも古色蒼然としたものがあつたが、こちらの方がむしろ原始的な雰囲気がある。

まるで時が止まってしまっているかのような――

自分の知らない、ずっと昔の天岩戸にいるかのような――

「来ないんですか？」

深翠に声を掛けられて竹は我に戻った。

前方を仰ぎ見ると、深翠は石段を十数段登つたところで立ち止まっていた。

「――ああ、ごめん。今行く」

竹は慌てたように視線を切り、深翠にそう返答して飛石と同じ色をした、それ以上に苔の張り付いた石段を上り始めた。

目測で5、60段ほどの石段はそれなりに急な傾斜だった。

竹はなるべく視線を下に向けて石段を上りながら、ぼそりと呟く。

「……………白、かな」

霧が立ち込めていたのとすぐに視線を切った為、断言は出来ないが、まあ間違いはないだろう。

バッグを掛けていない方の手で小さくガッツポーズ。

常人の域を超えた動体視力に感謝しつつ、制服の素晴らしさを改めて認識した竹であった。

翠の章 05（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

少し短めですが更新しました。

まだ書いていませんが、次話とのバランスを考えてのことです。

全体の文量を蒼と紅と同じくらいにしようと思っているので、文字数的には大体5分の1くらい進んだところでしようか。

まだまだ先は長いですが、最後までお付き合いいただければ幸いです。

翠の章 06

石段を上りきった竹の目に最初に飛び込んできたのは石畳以外何もない、まっさらな広場。

30メートル程でその石畳も途切れていた。

元々はその途切れている先に何か――鳥居があつたのだから恐らく社が建っていたのだろうが、今はその痕跡はみられず、草が生い茂り、所々地肌が透けている。

そして、その石畳が途切れたところから幾らか離れた場所に木造の平屋が建っていた。

「あそこです」

石段を上がつたところで待っていた深翠が指差したのは平屋の方。一瞬、自分に向けられた視線が幾分きつくなっている気がしたが、思い当たる節もなかったので竹は気にせず頷く。

「あそこが目的地だ？」

「そうですね。それと宿でもあります」

ふうん、と竹は何の感慨も込めずに言った。

外観は古そうだがそれでもボロっちいといった程でもない。

元々、宿泊施設に豪華なスイートルームなんて幻想を抱いていないから、不満も満足もなかった。

それよりも竹の頭にあつたのは、深翠があの手が目的地であるということだった。

どうしてあそこが目的地なのか？

あの平屋に何があるというのか？

それだけが気になっていた。

だが、それももうじき判明するであろうことだ。

竹は深翠の後ろに付き従って平屋の方へと向かった。

建物の内装は旧家然とした見た目の割には、それなりに現代的で

あつた。

とはいえ、それは外観と比較してのことなので、良く言ってもせいぜい昭和中期のモデルハウスだろう。それなりに骨董品的だ。

竹は宛がわれた部屋で荷物整理などをしながら、そんなことを考えていた。

普段、旅先で荷物整理なんてことは竹はしないのだが、あまりにも手持ち無沙汰だった。

建物に入ってから深翠はまず竹にこの部屋を与え、そして自分が呼ぶまで部屋の中にいてくれと言ったきり、かれこれ30分戻ってきていない。

深翠が何をしているのかは知らないが、護衛という立場上、早いところ建物の構造など色々と知っておきたい竹はそろそろ痺れを切らし始めていた。

感覚として今この周囲に人の気配は自分と深翠以外にいないのはわかっているが、それでも依頼を受けた以上は万全にこなしたいし、そもそも感覚なんてものの自体があやふやなものだ。

いくら鋭敏に研ぎ澄まされていたところで、それが絶対だと言えない切れない。

現実との齟齬はいくらでもあるし、欺くことだって可能だ。

少なくとも竹は自分の眼で一度も視ないうちに、それを絶対的に確かな現実と捉えるほど世界を侮つても、自身の能力を過大評価もしていない。

荷物整理という名の暇つぶしに見切りを付け、部屋の中心に置かれた丸い卓袱台の前に胡坐をかき、耳を澄ます。

少しでも状況を把握しようとしての行動だったが、やることななくて仕方なく、という後ろ向きな考えで始めた行動だけに長続きはしない。

竹はポケットに入っていたものを卓袱台に乗せて嘆息する。

財布、携帯、タバコ。

その中で竹の視線はタバコに向いていた。

ここでタバコでも吸えたら気が紛れただろうが、それも今は出来ないのだ。

この部屋で喫煙が許可されているのか不明な上に、喫煙者としてはエチケット違反だが竹は携帯灰皿を持っていない。

さすがに、それらを押し通してタバコを吸おうとするほど竹は無頼ではない。

それに竹がここに持ってきたタバコは吸いかけで、箱の中にせいぜい半分ほどしか残っていないかった。

なくなったら現地で買おう、と考えていたのだが、この山奥に当然タバコを売っている店も自販機もない。

それは駅周辺にも同じことが言えた。

駅からここに来るまでに何度か民家、商店を見つけたがタバコの影はなかったのだ。

健康かつ健全な田舎である。

そんな僻地にどれくらい滞在するのかわからない以上、消費量を抑えなければならぬだろう。

竹は渋い顔を作って指で軽くタバコを弾いた。

箱の上に置いていたライターが衝撃で滑り落ちる。

丁寧にそれを元の位置に戻してから二度三度繰り返してみる。

暗い遊びだった。

竹は苦い笑いをしてからタバコとライターの位置を再度、元通りに戻して姿勢を直す。

それから数秒置いて、トントンと控えめに襖がノックされる。

どうぞ、と応えると、襖が横滑りして開いた。

「お待たせしました」

——霞のかかった声を伴い入室した大神深翠は着物だった。淡い緑の扇柄の紬。

どうやら時間がかかったのは着替えていたかららしい。

女子高生から和服美人へクラスチェンジした深翠は静かに竹の前に座る。

「……」

「なにか？」

じいっと見られていることに気付いた深翠が小首をかしげた。

和服と相俟って中々に魅力的な仕草。

「いや、なにも？」

竹はゆるゆると首を横に振った。

竹の頭から30分待たされた事への苛立ちなんてものは完全にすっ飛んでいた。

ここでも先手を取られた、という思いは拭えないが、久しぶりに見る和服美人にいきなり文句を付けるのは憚られた。

竹はなんだかんだ軽い頭の作りをしているのだ。

それはブレザーからチラリズム度がダウンしたことに多少思うところがあったり、この神社風な場所の雰囲気からどうせなら巫女服が良かった、なんてマニアックな要求が彼女の姿を見た瞬間に浮かんだりする辺り、推して知るべしである。

「そうですか。ならいいです」

本心から納得したのかは不明だが深翠はそれ以上の追及はしなかった。

代わりに――

「それではお待たせしましたが、今回の依頼したお仕事のあらましをお話します」

ようやっと勿体付けるように先延ばしにしていた本筋に触れたのだ。

「始まりは1年前に実家。つまりこの家に届いた一通の信書――手紙でした」

「手紙？ てかここが大神さんの実家だったんだ？」

いきなり話の腰を折るようだったが、事前情報は殆どないのだ。

気になったところから順々に聞いていっても罰は当たらないだろう。

「そうです。中学まではここから近隣の学校に通っていました」

……近隣？

どう見ても近隣に学校があるような土地ではなかったが、まあそれは触れなくてもいいところだと竹は判断した。

「どうして高校はあつちに？」

自宅のある土地をあつち呼ばわりというのも妙な表現だったが、現在の仕事場がこの土地なので、ここを基準に考えた方が良く。

「近くになかったからです。八里浜にしたのは、あそこに両親が伝手を持っていたからです」

「伝手って？」

「不動産関係です。今は一人暮らしですから。八里浜高校には寮がありませんから」

それならわざわざ実家から電車で4時間、実質5時間はかかる公立の八里浜ではなく、もう少し近場で寮のある私立校にでも行けばよかっただろ、とは言わない。

そんなこと今更だし、竹が口に出す問題でもない。

「ああ、そういうこと」

竹は理解した、と頷いて続けて問う。

「それでその手紙ってどんな内容だったの？　ってかその前に、ここが実家っていうなら大神さんの両親は今どこに？」

「両親はいません。正しくはいなくなりました」

「いなくなつた？」

「そうです。1年前にその手紙が届いてからすぐに、両親は失踪しています」

まるで国語の授業で朗読でもしているかのような、心の籠もっていない素っ気無さ。

深翠は淡々と他人事のように両親の失踪を告げた。

「――失踪ね。それは件の手紙の内容と関係が？」

「恐らくは」

「恐らく？」

「はい。私は届いたという手紙の内容を知りませんから」

「内容を知らない？　いや、でも始まりは一通の手紙って……とい

うかそもそも警察には連絡しているの？」

「していません。それが両親の望みでしたから」

「はあ？」

さっぱり意味がわからなくなってきた。

始まりは去年、この家に届いた一通の手紙。

その手紙を切欠に両親は失踪したのだと、彼女は言う。

しかし、彼女は当の手紙の内容を知らず、更に両親の失踪を警察に届け出ていない。

それが失踪した両親の望みだったから。

——全く話が繋がらない。

竹が困惑するのも当然の話だった。

だがまだ話は途中だ。

現状で理解不能でも、この不条理を埋めるピースがまだあるのだらう。

竹は反射的にねめつけるようになってしまった視線を緩め、

「……えっと、それで？」と先を促した。

「両親は失踪する直前、私に連絡をくれました」

——時を知らせる信書が届いた。

わたしたちはこれから身を隠す。

案ずる必要も捜す必要もない。

「こんな内容だったと思います。それから両親は行方知れず。消息を絶っています」

両親の最後の言葉を思い出しながら語る深翠の表情に、少しだけ何かを偲ぶような儚い色が浮かんだが、それもすぐに消えた。

もしかしたら勘違いだったかもしれない。それほど微細な変化だった。

それはともかく——時を知らせる信書？

竹はその意味を問おうとしたが、それよりも早く深翠が胸元からあるものを取り出した。

「そしてこれが先日、私宛に届いた手紙です」

すつ、と卓袱台の上に置かれたのは3つ折にされた手紙。封筒はない。

「……読んでも？」

元々、読ませるつもりで出したものだろうが、一応断りを入れる。

「どうぞ」

竹は小さく頷き、手紙に目を通した。

「——これは……」

竹は言葉を失った。だが何故か驚きの表情の中には2割の呆れが混ざっていた。

竹がざつと読んでみたその手紙に書かれていた内容は、端的に、簡潔に述べれば何のことはない、何の変哲もない脅迫状。

大神深翠への殺人予告。

手紙の末尾に書かれた差出人の名前は——まかみ大神真上、けいり桂里。

「失踪していた両親からの手紙です」

「……まちでか」

そう呟くも、名前を読んだ時にそんな気はしていた。

しかし——

手紙は古くは消息と呼ばれた。

1年ぶりに両親の消息を掴んだのが、自身宛の殺人予告とはどういう見だろう。

これが真実だとするのなら、いささかヘヴィすぎる。

だがこれは本当に彼女の両親からの手紙なのだろうか。

「これは大神さんの両親の字？」

「父の字だと思います。いくつか父の書いたものと照らし合わせてみましたから。母の名前だけ母の字ですね。これも一応、照らし合わせてみたけど、ほぼ間違いないと思います」

深翠は首肯する。自信ありありといった風だった。

しかし、竹はまだこの情報を確定させるつもりはなかった。

深翠はかなり入念に筆跡鑑定した様子だが、別に彼女はプロでもなんでもないし、筆跡を似せることなんてそれなりに訓練さえ積みめば

どうとでもなるからだ。

だがしかし、もしこれが本当に彼女の両親からの手紙だとするのなら、いや、そうでなくともまだわからないところがある。そもそもその大前提——を聞くその前に、小事を片付ける。

「……そうなんだ。これはいつ届いたの？」

「2日前。4月29日ですね」

「じゃあオレに依頼したのは、手紙を貰った次の日だ」

それが遅いか早いかでいえば、遅すぎる。

しかし、殺害予告に対して、何故すぐに依頼をしなかったというのは置いておく。

質問する必要がないと感じたからだ。

両親と思しき人物から娘宛ての殺人予告には、きっちりと開始の日時が明記されていた。

5月1日の夜から、と。

竹はさすがにこれには内心、失笑した。

まだ確定しない差出人にも、これを信じた大神深翠にも。

日時を明記した殺人予告。

馬鹿馬鹿しいくらいに素人くさい。

人殺しをしたいのなら、それも狙った人物を殺したいのなら、わざわざこんなものを予告する必要性はないのだ。

そして殺人を予告された側の人物が、この予告日時を鵜呑みにしたのも馬鹿らしい。

竹が読み終わってすぐに表情の中に混ぜた呆れは、これによるものだった。

まあそうは言っても、実際にこの手紙が届いたという29日から今の今まで深翠の身に何も起きていないのだから、後者についてはすでに言及する意味のないものだった。

けれども前者、わざわざ日時を明記した殺人予告については一応、聞いておく必要があるだろう。

「どうして、この手紙の差出人は日時を明記したんだと思う？」

まだ竹の中で差出人が大神深翠の両親だとは確定していないので、差出人とだけ言う。

これも大事の小事——のつもりだったのだが。

大神深翠はほんの一瞬、口元を歪め、再び胸元に手をやり、

「それはこれを読んでもらえれば理解できると思います」

そう背筋が凍るような美声で告げて、一冊の古びた書物を差し出した。

元の色が何であつたのかわからなくらいに変色し、端々が虫に食われた薄い古書。

その古文書の表紙を眼にして、竹の背筋。

否、全身が凍りついた。

「——なっ?! ……これは……」

竹の声は微かに震えていた。

先ほどまでの、上っ面の驚きではない。心からの驚愕で。

「——両親が日時を明記した理由。

両親が私を殺そうとする理由。

私が解決士、天倉竹に依頼を持ちかけた理由。

その全てがそこに記されています」

大神深翠はそう言つて、竹を見た。

大事の前の小事。

そう思つて質問した内容に、竹が後回しにしていた大事がくつついてきた。

それも超一大事をおまけに。

竹は薄く灰色がかった、黒色の瞳を大きく見開き目の前の少女を見返す。

昨日からこの短い間で幾度も竹の先手を取つた大神深翠。

最上級の翡翠がはめ込まれたような、翠色の瞳。

その瞳は——

「大神深翠、改め、三貴神『月読』が末裔。

豊葦原統治者、月読の巫女。

以後、お見知りおきを。天岩戸の破壊者」
記録でしか知らない、神様の色をしていた。

翠の章 06（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

一度書いていられませんが、現在書いている黒の書シリーズ（仮）ですが、この翠の章から始まる全7章の位置付けは大きな括りの中で中編の位置に当たります。

前編2章、中編7章、後編2章。

これが黒の書シリーズ（仮）の全容です（前編と後編については、この場で公開するか微妙ですが）。

多少、物語ごとに差異はありますが、全てが1章完結にして一連の物語、というスタンスで書いております。

何故、こんなことを急に書き出したかというと、単にあとがきで書くことがなかったからです。深い意味はありません。すみません。まあいつか書くこうと思っていたことだったので良い機会だった、と思います。

それでは引き続きお付き合いください。

もし間違いを発見されましたらご指摘お願いします。

翠の章 07

＊

その組織の起こりは二千年以上前とされている。
正確なことは知らない。

天岩戸。

あちら側、神々の世界と、こちら側、人々の世界を繋いでいた岩戸を再び開く為の組織。

極東へと辿り着き、神話の時代に幕を引いた神々。

神話の終焉。

だが全てが終わり、全てが消えたわけではない。

神々が世界から消えようと、神の時代が終わろうと、影響は世界に残る。

世界はどこまでいっても地続きなのだ、あたかも証明するようにそれは陽炎のように儚い残滓から、確固とした形を持ったものまで。その中でも最たるものが、それだろう。

天照と月読。

紛れもない、真正の神。

こちら側にたった二人だけ残った神。

人と同じ形をしていながら、人の幻想を体現する超越者。

対を成す二人の神は、人とまぐわい、その血を、その力を、その意志を嗣子へと託しながら二千年前の組織の起こりから、千年前の七つの部署の形成まで存在し続けた。

緑色の技術部。

青色の情報部。

赤色の製作部。

橙色の戦闘部。

黄色の治療部。

藍色の司法部。

紫色の作戦部。

そして、それらを統べる三貴神。

天照。月読。素戔鳴。

前二つはその名の通り神の血脈から、後ろの一つは最も優秀な人から選ばれ、組織を運営、運用させた。

岩戸を開き、あちら側に行く為に。

ただし、千年、二千年、流れていく時が全て順風満帆というわけではなかった。

始めは天照。

その血脈が途絶えた。

次は素戔鳴。

この組織から離れた。

最後は月読。

血脈が途絶え、人が座するようになった天照と、空位とされたままの素戔鳴。

そんな破綻し始めた組織、天岩戸の中樞を担った、否、唯一残った神として中樞そのものになっていた神は六百と五十年前に忽然と姿を消した。

途絶、離脱、消失。

頂点であり、指針であったものを失い、組織として瓦解するはずだった天岩戸は、しかし——目的を見失わなかった。

それは月読が姿を消した後三席あった天岩戸の頂点を天照一つに変更し、たった一人で組織を纏め続けた当時の天照の功績であると同時に、それに付き従い、岩戸の向こう側を夢想し続けた人間たちの願い、というよりは呪いに近い執念によるものだろう。

そして、その呪いを抱き続けた天岩戸は、3年前、もうじき4年前になるが——崩壊した。

完膚なきまでに、徹底的に、もう二度と組織として成り立たないように、天岩戸は破壊された。

天倉竹と、その友人たち——後に十三夜という集団を名乗る少年たちによって。

彼らは天岩戸で生まれ、造られた存在でありながら、神の世界の繋がっていた岩戸を、彼ら二千年の想いを、その存在意義を打ち砕いたのだ。

根絶やしにはされなかったとはいえ、再起不能の致命傷を負った天岩戸は瓦解し、生き残ったものたちは離散し、その名前は流れる時間の中で、闇の歴史の闇の中に埋没していく。

それは決まったこと。

岩戸という決定的な存在意義を失ったゆえの必然。

だから竹もその組織の名前を記憶の片隅に追いやっていたのだが——月読。

崩壊した組織の、過去に消えたはずの神の末裔だという少女が竹の目の前に現れている。

それは運命か必然か。

はたまたただの偶然かなんて議論は、この際置いておく。

そんな問題は現実目の前で起きている事態に何ら影響のないことだからだ。

『月黄泉文書』と記された古文書。

竹は自分の人生を痛烈に皮肉っているような現実と向き合う前に、心の中で小さくため息をついた。

「これを読めば全てがわかると?」

竹は差し出された古文書を手に取ると、一枚一枚丁寧にめくりながら聞く。

先ほどの驚き様を失態としているのか、努めて抑揚をなくした声。こくり、と深翠は頷く。口元は再び一文字に結ばれている。

「ああ、そう……うん……」

気のない返事を返して、ぱらぱらとその内容を眺める。

どれだけの時間が経過しているのかわからないが、かなり丁寧に

扱われていたものらしい。

表面の劣化具合に比べて中身はかなり綺麗なものだった。

見たところ紙魚などに強い麻紙のようだが、その分、麻紙は長時間を経ると強度が劣化するからめくるのに神経を使う。

蚯蚓がのたくったような、というのは少々言葉が悪いが筆記体でかなりの達筆。

頁数が少ないのが幸いだった。

眺めるだけで頭痛がする。

ぱたり、と静かに古書を閉じて深翠に返す。

深翠はそれを受け取りながら、

「わかりましたか？」と問うた。

どことなく期待しているようで、少しだけ得意気な顔が一瞬だけ見えた。

それは竹が始めて垣間見た、大神深翠の年相応の表情。

竹はそんな彼女に対して、申し訳なさそうに苦笑を返し、

「あー、ごめん。読めない」

と鼻の頭をかいた。

「は？」

「いや、そんな拍子抜けした顔されても、普通の高校生はこんな文字読めないから」

「普通の高校生？」

「ん、それは言い過ぎか」

深翠の前では今更そんなことを取り繕う必要はない、と竹は思い返し、そして言いなおす。

「あーっと、だ。——いくらオレでも、こんなこの言語にも当て嵌まらない文字は解読できねえわ」

天岩戸で生まれ育った者は、古文から主だった外国語まで数種の言語を学ぶ。

前者は天岩戸の者としての一般教養。後者は歴史が流れていく上で必要に迫られて。

その後、配属される部署によってはヒエログリフやら未解読の原文字なども学ぶことがあり、竹も一時期それらを齧ったこともあったが、『月黄泉文書』は竹の知識の中にあるどの言語の言葉とも一致しない。

せいぜいわかるのは筆記体で書かれている、という程度。

だがその文字は行書でも草書なく、そもそも日本語には当て嵌まらない。

だからといって、ラテン文字などの外国語かといえそうですが、表紙が読めたから中身も読めると思ったが、とんだ肩透かしだ。

しかし、肩透かしをくつたのは深翠も同様だった。

「読めない？ そんなはずはありません」

「そんなはずないって言われても、読めないもんは読めないよ」

「……ふざけているんですか？」

竹の言い草に深翠は不快感をあらわにする。

「ふざけてないって。そんな切れられても……」

「怒ってなんかいませんっ。……いえ、少し怒っています。こんなところでふざける人だとは思いませんでしたから」

深翠は憤然とした表情をつくる。

「……」

何か致命的に噛み合っていない感じだった。

そう。まるでボタンを掛け違えているような――

怒りから少し興奮したらしい深翠は、若干顔を紅潮させて竹を非難するように、

「どこの言語にも当て嵌まらない文字だから読めない？ そんな馬鹿な話ありません。だって、この古文書に書かれている文字は、一般的に、平均的な、極々普通の日本語じゃないですか」

とさも当然の如く言い放った。

「――は」

竹は一瞬、呆けたような顔をした。

そして次の瞬間には、

「ああ、そういうことだ」と独り、納得したように頷く。

これはボタンを掛け違える以前の問題。

竹には全くの未知の言語にしか見えないこの文字は、大神深翠の眼から見れば当たり前前の日本語として映っていたのだ。

解読する必要も、読み砕く必要もない。

ただ、見るだけで読める。解読できる。

言葉が直接、意味として頭に入り込む。

つまりは——『月黄泉文書』は大神深翠にだけ解読可能な暗号文というわけだ。

これは知識や技術なんて後付の力ではなく、恐らく先天的な血による力。

彼女が本当に月読の末裔かどうかまだわからないが、少なくとも大神深翠が何らかの特殊な血筋の者であるという証明にはなるだろう。この書物を読めるという事実に嘘がなければの話ではあるが。そこまで疑心暗鬼になっても仕方ない。

疑うよりも信じてしまう。

それが一番、楽な手法。

それが竹の解決士としての信条。

嘘も本当も、大きな力の前では圧倒的に無意味であることを知っているから。

だから肝心なのは、自身を月読の巫女と称した彼女が命を狙われていると言い、竹に護衛を頼んだという事実。

ただそれだけ。

その背景にどんなものが渦巻いていようと、あるのはたった一つのシンプルな話。

そのシンプルな話の入口がこの読めもしない古文書に書かれているのだというのなら、竹はその内容を知る必要がある。

「そういうこと——とはどういうことですか？」

深翠は一人で納得した竹に怪訝そうに問う。

竹は一瞬考えるように間を空けてから、竹が読めなかった理由と深翠が読める理由を説明した。

「――多分だけど」

最後にそれだけは忘れずに付け加えた。

十中八九間違っていないだろうが、推測の話だ。

万が一の時の為に予防線を張っておく。

まあ間違っていたところで、どうというわけでもなかったが。

「そういうことですか」

「そういうことです。だから悪いけど、ここに書かれていることを教えてくれる？」

竹の言葉に、深翠はやや戸惑ったような態度になる。

「それは構いませんけど……」

「けど、何？」

「私が教えることが全て真実だとは限らないんじゃないですか？」

「嘘を吐くつもりなんだ？」

「いいえ、そんなつもりは全くありません。でも少し無警戒すぎませんか？」

「まあそうかも。でも依頼人のことは信じることにしてるから」

「例え嘘を吐かれても？」

「例え嘘を吐かれても」

嘘だと知らなければそれは真実になるから、とは言わなかった。

そこまで気障な台詞はさすがに言えない。

「……人が良いんですね」

深翠はため息混じりに言った。

竹は自分ではそんなことは断じてないと思うのだが、まあ人が悪いと言われるよりは高評価だとうと思って訂正しない。

竹は何かと計算高い人物だった。

それに竹のことを人が良いというのなら、深翠も随分と人が良い部類だ。

これから嘘を吐こうとする人間が、わざわざ確認なんかしないだ

ろう。

竹は深翠の言葉に肩を竦めて応えた。

その軽く映る態度への返答か深翠は小さく眉を寄せ、『月黄泉文書』に書かれている内容を説明し始めた。

翠の章 07（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

事前に敷いたレール上をこれでもかというほど忠実に走っておりま
す。

それが逆に怖い感じですが、まあどこかで確実に脱線するでしょう
から、ある意味良い経験でしょうか。

*

大神深翠の語った月黄泉文書の内容は、驚くべきものではあったが、驚愕するほどのものではなかった。

それは事前にある程度筋道だった推測と、その話の結末を提供されていたからである。

謎解きの工程と解答を明かされたミステリー小説を読んだような気分。

それでも少なくはない驚きを得たのは、やはりそれだけ衝撃的な内容だったということだ。

月黄泉文書の大筋は家系図のようなものだった。

ようなもの——というのは実に曖昧な表現だが、これ以上適切な表現も見当たらない。

かの古文書には、大神家のこれまでの巫女——当主と夫の名が整然と横並びで列挙されている。

当主と夫、という形で分けられているのは、どうやら大神家は女系の家系らしく、ただ一例を除いて授かる子供は全て女で、たった一人のみ。

そしてその女は巫女と呼ばれ当主となり、婿養子を迎えるという形式であった。

ただ、授かる子供が全て女で一人きりだろうが、婿養子を迎えて女性を当主にしていようが、竹はそれだけなら別に驚きもしない。

それは一般世間では、それは異常とさえ映るような希少さや古臭さだろうが、いくら普通に振舞おうとそもそも常識外で育った竹だ。その辺りの常識が少々ズレている。

ならば竹は何に驚いたのか。

それは本来、記し継ぎ足されていくはずの記録が、始めから終わ

りまで全て最初の人物によって記されていたからだ。

序文には筆者である月読、大神翠の名と、これを記した年が記されていた。

そして彼女は誰が、いつ、どこ、誰と結ばれ、そして誰を宿すのか。

序文と奥書を除き、それを延々と書の終わりまで記していた。

つまり月黄泉文書は、家系図ならぬ、大神家の血筋を予め定めた予定書だったのだ。

深翠が言うには、その事前に記されていたはずの記録の全てが、紛れもない事実だという。

これは大神家がこの予定書の通りに動いてきた結果そうなった、と言いで片付けられるようなことではない。

何百年も前に書かれた予定書の通りに婚姻と配偶を繰り返す事が出来た、ということが既に異常なのである。

これではまるであの忌まわしい预言書と同じだ。

黒の書。

世界の歴史が全て書かれている预言書と。

聞いているだけで、思ってしまっただけで暗澹とした気持ちが心を覆う。

家系予定書である月黄泉文書と、歴史書である黒の書ではその内容はまるっきり別物。

それでも、だ。

もう二度と関わりあいたくないと思っていたものの類似品。

それと触れてしまっただけで、嫌悪と恐怖が感情の水面下で蠢くのだ。

竹が深翠から語られた月黄泉文書の内容を聞いて、大きく驚かなかったのはそれらの感情が邪魔をしたせいもあったのだろう。

だがあくまで類似品は類似品。

そう割り切って、竹は深翠の言葉を聞いていた。

割り切らなければ、やりきれないから。

——月黄泉文書、予定書の中には唯一の例外。

月読、大神翠とその夫、大神深夜から始まる、予め記された家系図の最後。

その夫婦と子の在り方だけが異質だった。

巫女、大神桂里。

忌子、大神真上。

そう記された大神深翠の両親は、夫婦で、双子の姉弟であった。

それが『月黄泉文書』の、一子全女で構成されていた大神家の唯一の例外。

つまり――

苗裔――月読巫女、大神深翠。

家系図の最後にそう名を連ねている彼女は、近親姦により授かった子供ということになる。

それを淡々とした表情で、それまでと同じように至極当たり前に深翠は告げた。

耐性が付いていたのか、頻繁に驚くのに疲れたのか、竹はその異常性には驚かず、書の終わり、奥書には記されていた二つの事柄を聞いた。

それはこれまでとは毛並みの違うものであった。

この二つが、深翠の両親が日時を明記した理由。彼女を殺そうとする理由。そして、深翠が解決士、天倉竹に依頼を持ちかけた理由の全て。

一つは巫女と忌子、深翠の両親は時を知らせる手紙が届いたら1年間姿を消し、その後の5月1日の日没から、5月5日の日出までに大神深翠を殺すように、という指示。

もう一つは、大神深翠は両親から身を護る為に竹に護衛を依頼するように、という指示。

ただ夫婦と子の名前だけを連ねてきた古文書で、最初で最後の後世への明確な指示であった。

後者の指示では、竹の住まいや年齢、容姿に背格好。更には解決士という職業名まで記述されているということだった。まるで矛盾する二つの指示。

その真意の不明さもさることながら、六百五十年も前の人物である月読が何故、ここまで正確に未来を言い当てることが出来ているのか。

そこがやはり問題だった。

竹はとりあえず全てを語り終えた深翠から、再度古文書を借り受けた。

彼女の言葉が作り話だとは思わなかった。

それは彼女の両親が、この古文書に従い行動をしているという事実を抜きにしてもだ。

大神深翠の語る言葉には、その翠の瞳には竹に信じ込ませるだけの力があつたのだ。

「……」

無言で一度眼を通したそれらをばらばらと眺め見る。

文字や紙の劣化からも、これらが全て同時期に記されたことは容易に判別がつく。

偽装は不可能ではないものの難しい。

まさか月読には予知の力でもあつたというのだろうか。

だとすると、深翠にもその力は受け継がれているのか。

落としていた視線を持ち上げ深翠を見る。

しかし——月読の血筋同士の子供である割には、彼女はあまりにも普通すぎた。

竹の伝え聞く話では月読は真正正銘の神だという。

なのに深翠からは神性というものが、さっぱり感じられない。

神の血も時の流れに勝てなかったということなのか。

人の血と混ざりあう中でその血を消失させていったということなのか。

だとしても、否、だからこそ彼女にだけ月読巫女という名が付け

られていることに納得がいけない。

「大神さんさ、聞いてもいい？」

「何ですか？」

「うん。月読の、これを書いた人の力が何だったかっていうのは伝わってる？」

「予知、と伝わっています。当主が巫女とされるのはその力からきていると」

やはり予知の力があつたらしい。

古来、巫女は神託を得て他の者に伝えることが役割とされていたという。

予知の力があるとするなら頷ける話だった。

だとしても、初代のその力は少ばかり常軌を逸している。

「それじゃあ、その予知の力は君には受け継がれてるの？」

「いいえ。予知の力は何代か前に既になくなっています。私にも当然ありません」

「そうなんだ。じゃあさ、どうして大神さんだけが、巫女じゃなくて月読巫女って書かれているんだと思う？」

「わかりません」

竹の問いかけに、深翠は首を横に振った。

「わからない？」

「はい。そんな何百年も昔の人が考えていたことなんてわかるわけありません」

「……まあそりゃそうだ」

竹は視線を再び落として、古文書に一通り目を通してから深翠に返した。

内容を一度聞いた為だろう。

なんとなく書いてある内容の雰囲気伝わってきた気がした。

それでも読めるというほど、理解は出来ない。

だからこれは無意味な行為。

ただ結論を先延ばしにする為だけの行動。

しかし、いくら先延ばしにしたところで、乗りかかったところか乗船済みの船だ。

結論は既に出てしまっている。

それがいくら嫌でも。

後悔しか感じていなくても、もう後には戻れない。

出航してしまった船は、着岸するまで止まらない。

竹は姿勢を正して口を開く。

「大神さんが依頼を持ちかけた理由も、命を狙われている理由もわかった」

それらは全て上澄みでしかなく、不明瞭な問題が山積みだということもわかったが、それは口に出さずとも良いことだ。

そもそもそれは穿り返す必要がないかもしれないから。

藪を突いて蛇が出てくる予感がするなら、突かなければいいのだ。無関係を装えるなら装い抜くのが最善手。

竹の仕事は、あくまでも大神深翠を護ること。

それ以上でもそれ以下でもない。

だから竹はそれを確かめるように、彼女に向けて宣言する。

「契約期間は6日に日付が代わるまで。それまでオレは君の事を全力で護り抜こう」

逃げる事が出来ないなら、眼を逸らす。

真実、真相がそこにはなくとも、本来の竹の仕事はそれだけなのだ。

そう自分に言い聞かせるように。

それでもその言葉自体に偽りはなく。

竹は正面を見据えた。

そこには護るべき翠の瞳の少女。

此度の話で、眼を逸らしてはいけない唯一のもの。

真摯な視線で自分を見つめる竹に、深翠は小さく微笑み返し、何も云わずに恭しく頭を下げた。

――月読。

予言書ならぬ予定書。

どう考えても無関係を装えるような話ではないとわかっていたが、竹は自分を欺き目を逸らすよりなかった。

そうでもしなければ、これから確実にやってくる事柄に嫌気が刺してしまうから。

天倉竹は基本的に怠け者なのだ。

翠の章 08（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

このところ体調を崩して寝込んでいた為、更新が止まっていました。すみません。

まだ完調ではないので、遅々とした更新になるかもしれません。

＊

いくら竹が怠け者だといってもやるべきことはやる。

彼女を護ると決めた以上、その為に自分で出来る範囲で手を打っておくつもりだった。

「大神さんの部屋ってどこになるの？」

竹は一度部屋を退室して、二人分のお茶を入れて戻ってきた深翠に問いかけた。

「私の部屋の場所ですか？」

「そう。もしこの部屋から遠いなら変えて欲しかったり」

茶を啜りながら頷く。

攻撃は最大の防御的理論でもって、大神深翠の命を狙っているという彼女の両親をこちらから打倒する、という考えもまあ悪くないが、現状、事の全容をはっきりと把握できていないので、竹は今のところ専守防衛に専念するつもりだ。

その為にさすがに同室とまでは言わないが、それでも部屋は近ければ近いほど良い。

そういう意味でした発言だったのだが、深翠は何故か言葉を濁す。
「……それは……ええと」

先ほど深翠が退室する前に今後、何か手がかりになるかもしれない、ということを手紙と古文書を無理を言っ借りのたのが、もしかしたら彼女の機嫌を損ねたのかもしれない。

それがどうして言葉を濁す原因になるかは知らないが、とりあえず説明を付け加える。

「……いや、そんなに大きな家じゃないみたいだけど、それでも護衛するのに部屋が遠いとデメリットの方が多からさ」

竹は歪に切りそろえられた、かなり短めの前髪をいじりながら言っ

た。

「ああ、そういう意味でしたか」

深翠はほっとしたように頷いた。

「そういう意味って？」

「いえ、気にしないでください」

「そう言われると気になるんだけど？」

それが人の性というものだろう。

だが深翠は答える気がないらしく、断固とした態度を崩さない。

とはいえ何も語らないのも今後の関係に支障をきたすと判断したのか、

「気にしないでください。ちょっとした警戒心です」と最後に付け加えるようにヒントめいたことを言った。

しかし——警戒心？

何に対する警戒心だろうか。

ヒントというよりも混乱させる材料になってしまったその言葉に、全く意味が繋がらず、竹は首を傾げる。

すると——

「……………貞操ですよ」

ぼそり、と何か聞こえた気がした。

「え？ 何？」

竹は顔を上げて聞き返した。

「いいえ、何も言ってますんよ？」

一瞬斜め下を向いていた深翠は視線を戻し、何を言っているのか、としれっとした表情をして逆に竹に聞き返した。

その態度があまりにも堂々としていた為、聞き間違いだろうと竹は一応納得する。

「あ、そう？」

「はい。制服のスカートは短くて危険だとか、そのせいで依頼の詳細を話す前に私服に着替えることにしたとか、仮にも同年代の男の人と一つ屋根の下の状況にある種の危機感を抱いている、なんて

「こともありません」

つらつらと澄ました表情で、リアルに痛いところを突く発言をした深翠に対し竹は、

「あー、それって私服なんだー」とどこかずれた言葉を返した。

だが内心は――

え、何、それは遠まわしの抗議ですか？

まさかオレが見たのわかってたですか？

そのせいであのお着替えタイムですか？

と冷や汗ダラダラであった。

てか、スカートが短いのわかってんのに先に行くほうが悪くないでしょうか？

そもそもあれは事故ですよ、事故。

それにすぐに視線切ったし。

むしろジェントル。

仕舞いには自分を正当化し始めていた。

「……………スケベ」

再びぼそり、と斜め下を向いて何かを呟く深翠。

「……………今、絶対何か言ったよな？」

耳がいい事を自称する竹は、さすがに二度も聞き間違いするわけがない、と強く問うた。

「気のせいじゃないですか？ それとも何か言われるような事でもしたんですか？ 例えば――」

深翠が何かを言おうとしたのを、竹が慌てて止める。

「ストップ。うん。ごめん、君は何も言ってなかった。オレの気のせいでした」

あのまま言わせていたら、今後深翠に頭があがらなそうな気がした。

深翠はどことなく勝ち誇った顔で、

「それじゃあ気のせいだった、ということと話を戻しましょう」と言った。

「そうだな。それで、大神さんの部屋はここから近い？ 勿論、護衛的な意味ね」

竹は深翠の印象を大幅に修正しながら再度問うた。

「あとで案内するつもりでしたけど、私の部屋はこの部屋からそう離れていませんよ。護るのに不自由はない距離だと思います。何なら今、案内しましょうか？」

「いや、あとでいいよ」

「わかりました」

「……」

「……」

会話が止まってしまった。

こちらから仕掛けるつもりがない以上、特にすることもなければ、仕事に関して知りたいことも特別なない。

ゆえに話題がない。

「……」

「……」

重苦しい沈黙の中、卓袱台の上に置いていた携帯が振動した。

竹は一度、深翠に目配せして電話を取る旨を伝えてから携帯を取る。

その動作は緩慢なものだったが、竹は心の中で沈黙を打破してくれた電話に歓喜し、逸る気持ちを抑えるのに必死であった。

電話が来て嬉しいと思ったことは人生で初めての経験かもしれない。

「もしもし、どうした？」

第一声はいつも通りの落ち着いた声。

何とか嬉しさを隠し通すことに成功できた。

「うい、もしもし竹？ 今、家？」

声の主は佐藤顕志^{さとうけんじ}。同じ高校に通っている松田などから比べると、違う高校なだけに電話をしてくる機会は少ない部類だ。まあそれでも珍しいというほどではない。

「いや違うけど、どうした？」

なんとなく会話の先は見えていたが、問い返す。

コミュニケーションは会話のキャッチボールが重要なのだ。

ていうか出来るだけ会話を引き伸ばしたい。

「うーん、いないのか。いやー、今から竹ん家行こうと思ったんだけど」

予想していた通りの佐藤の言葉だった。

佐藤から電話がある時は大抵の用事がこの類のことだ。

「そっか、でもちよつと無理だな。2、3日そっちにいないし。今は白銅郷とか言うところ」

——そういえば深翠は豊葦原とか言っていた気がするが、そっちが正式名称なのだろうか。

などと疑問が浮かぶも、佐藤の切れ目のない応対に意識がすぐに戻され、考えることをやめた。

正直なところ別にどっちだって良い。

「ふうん、仕事か？」

「そんな感じ」

「珍しいじゃん」

「金ないからね」

佐藤の軽口に軽く応じてそのまま2分ほど雑談をした後、切り上げる。

気持ちとは反して、あまり長話をするのは状況としてはよろしくないだろう、と判断してのことだった。

名残惜しくはあったが仕方ない。

「それじゃあ、そろそろ切るわ。暇なんだったら松のところにも行ってやって。女といないけりゃ寂しくしてるだろうから」

「あいよ、そうしてみるわ」

「うい。それじゃお疲れい」

そう告げ、佐藤の応じる声が途切れるのを待ってから通話を切る。頬が緩んでいるのを自覚しながら携帯を元あった場所に戻すと、

「携帯ってこんなところでも通じるんですね」と深翠が話しかけてきた。

「え、ああ」

ここが実家と明かされて言及するのは避けてきたが、どう考えてもこの家があるのは田舎を通り越して秘境だ。

……まあそれは言いすぎかもしれないが、それでも国内で考えればかなりの奥地である。

そこにここまで淡々と案内された事や、かなり特殊な家庭事情も踏まえて、彼女の中の常識はズレているのではと思っていたが、『こんなところ』というくらい自覚はあつたらしい。

そこに少しだけ安心する。

まあ考えてみれば深翠は高校1年時から、都会とまではいかないものの、それなりに開発された土地に一人暮らしているのだ。

それ以前がどうかは知らないが、その辺の常識が育まれていて当然ということだろう。

竹はそんな思考を巡らしつつ、深翠の言葉に応じる。

コミュニケーションは会話のキャッチボールが重要なのだ。

その切欠をみすみす見逃すほど竹は愚鈍ではない。

とはいえ、いきなり話し掛けられて少し驚き、半端な返事をしてしまったが。

まあそのくらいのミスは人生にはよくあることだし、ミスをしたところで減点されるわけではない。

人生は減点方式ではなく加点方式。

ミスは0点。マイナスじゃない。

「普通の携帯は多分、ここまで電波届かないと思うよ。この携帯は特別。衛星を利用した携帯だからこんな山奥でも通話可能。現代技術って凄いわ」

現代技術、というが竹の使用している携帯は勿論、世間一般に出回っているものではない。

外装こそ普通の携帯電話と同じにしてあるが所謂、特注品。

だがまあその全てが現代技術の粋であり、そこに神秘が介在していないのだから竹の言葉は間違っではない。

正確ではないけれど。

そこまで把握していない深翠だが、彼女は感嘆の息をつく。

「確かに凄いですね。今の電話はお友達ですか？」

「友達だね。それとうちのチームのメンバー」

竹は頷きながら、普通に答えた。

もはや彼女に対して普通を装う必要がないと判断していたからだ。しかし深翠は、

「チームって何のですか？ 野球とか？ 天倉君って何かスポーツやってましたっけ？」

と竹が考えもしなかった反応を返してきた。

「は？ チームっていったら十三夜のことだけど？」

「じゅうさんやってなんですか？」

深翠は不思議そうな顔で小首を傾げた。

「え、ちよっ……もしかして知らないの？」

嘘だろう、と竹は顔に驚きを張り付かせながら問うた。

十三夜といえば、裏の世界ではかなりのビッグネームである。

解決士としての竹よりも、十三夜というチーム名の方が有名なくらいだ。

それを解決士の天倉竹に依頼してきた彼女が知らないわけが——「知りませんけど？」再度、知らないことを告げる翠の瞳。

そうだった。

大神深翠は裏の世界にいたから竹を頼ってきたわけではなく、月黄泉文書という予定書を頼りに護衛を依頼してきたのだ。

深翠の伝える月黄泉文書に書かれた竹のデータに解決士、天岩戸の破壊者という名前はあっても十三夜という名前がない以上、彼女がそれを知るわけがない。

余計なことを言ったか、と後悔し始める竹に対し、予想通りというか当然の流れとして、

「十三夜って何ですか？」と深翠は知識欲を刺激されていた。

「……」

竹は5秒ほど考えた挙句――

「あーっとね――」

十三夜に対する説明を始めた。

これは深翠が何も知らないよりは良いだろう、という仕事上の判断というよりも沈黙を取る勇気がなかったただけなのかも知れない。

そして竹はこの話題に異常に食い付きが良かった深翠に対し、少しばかり饒舌になってしまい十三夜のことだけでなく、その他にも裏の世界に関して色々と言った。

十三夜の友人のこと。

賞金首と賞金稼ぎ。

そして、三大組織。

天岩戸。

黒の教団。

騎士団。

前の二つは既に組織としては残っていないが、それでも裏の世界を話すのに外せない名前だ。

やはりというか当然というか、深翠はその三つの組織の中で天岩戸に興味があったようだった。

天岩戸の破壊者。

自身を月読の巫女と名乗った時に深翠は竹のことをそう称したが、月黄泉文書以上の知識がない彼女はその組織がなんなのか、竹が何故そう記されていたかなど何も知らない。

自分が何の末裔なのか、そして目の前にいる人物が何者なのか、気にならないわけがないだろう。

竹はその辺りを詳しく、時にぼかしながら話を続けた。話をぼかしたところは彼女にとって知る必要のない情報や、竹の個人的な事情から話すべきではない情報をより分けた為だ。

竹は依頼人として彼女を信じているが、それでも越えてはいけない、

超えるべきではない一線というのが当然のところとしてある。

話がそこから現在の国内の勢力図に及び、その話に区切りがつく頃には、日はどつぷりと暮れていたが、竹と深翠の表情は護衛の開始時よりも数段明るくなっていた。

殆ど竹ばかりが喋る形だったが、それでもその何時間かは二人にとって初めての雑談だった。

翠の章 09（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

体調も戻り手早く更新、とまでは行きませんがマイペースで更新していきますので今後もよろしく願いします。

5月2日。

竹と深翠は小さな商店にいた。

昨日、深翠の実家に行くまでに見つけた、恐らくこの辺りで唯一の商店。

民家の一階部分を改装して開かれている小スペースには、誰が買うのだろうか、乱雑に並べられた野菜や乾物など食料品の横に何世代か前のテレビが堂々と売られているという中々にハイセンスな店である。

二人がどうして再び山道を下ってここまでやってきたかというと、それは大神家の食事情にあった。

話しに区切りが付き、そろそろ夕食にしようと話が変わったところで深翠は、しまったという顔をした。

深翠のそんな表情を初めて見る竹はさすがに驚いて、

「どうした？」と問うた。

声には現れなかったが問い掛け方が少しだけ普段通りの竹のリアクションだったのは、それなりに打ち解けた証拠だっただろう。

そんな竹に対し深翠は苦い表情で、

「……食べ物がありません」と答えたのだった。

「……まちで？」と驚くと同時に、そりやそうだろうと納得もした。埃っぽさがあまり感じられなかった為に失念していたが、深翠の話の通りならこの家は彼女の両親が失踪して以来、空家状態だったのだ。

食料があるわけがない。

いや、もしかしたら冷蔵庫の中に何らかの食材があるかもしれない

が、かなりの間、放置されていたものだろうから食べられる状態ではないだろう。

というかもし竹の考えている通りなら、恐ろしいことだがそれはもはや開けてはいけない状態になっているはずだ。

竹が冷蔵庫の中の惨状を想像して身震いさせると、竹が何を考えたのか予想が付いたのか深翠が訂正の声をあげた。

「一応、言っておきますけど両親がいなくなってから何度か掃除に來ているので、天倉君の想像している悲劇はないです」

「ああ、そうなんだ」

最悪の悲劇は避けられたので、竹はほつと息をつく。

——自分の家ではないだけに、ちよっぴりだが、その悲劇を体験してみたいという無責任な気持ちもあったが、それは言わぬが花だろう。

しかし——

「でも冷蔵庫の中は空っぽです……」

その事実は依然として変わらない。

「……盲点でした」

ぼそりと、消沈した面持ちで呟く深翠に竹は思わず、

「いや、そこは気付いとけよ」と反射的に突っ込みを入れ、直後に後悔する。

そこそこ打ち解けたとはいえ、まだまだ二人の間には何か言葉では言い表せない壁がある。

案の定、深翠は竹の突っ込みに対し気分を害したように眉を寄せ、「何ですか？ 私が悪いんですか？ ええ、そうですね。私が気付いておけばこんな事態にはならなかったわけですから。すみませんでした」

矢継ぎ早に言って、ぷいっと顔を背けてしまった。

予想通りというか、ある意味予想以上の反応に竹は一瞬言葉を失ってしまう。

だがすぐに意識を戻し、やんわりと宥めるように言う。

「……あー、いやまあ別にいいよ。その辺を聞いておかなかった才
レも悪いし」

「いいえ、私が悪いのは明白ですから」

気を遣われたのが気に食わないのか、それとも元々の性分なのか、
深翠は頑なな態度を崩さずに、すみませんでした、と頭を下げる。
その態度に竹は困ったように視線を宙に彷徨わせ――

「……まあ良いや」と深翠の謝罪を受け入れた。

その際に深翠が拍子抜け、というような表情になる。

もう少し今のやり取りが続くのだと予想していたのかもしれない。
だがこれ以上の問答は無意味だったし、それ以上に面倒だった。

それにあそこで一度フォローを入れただけでも竹にしては優しさ
を見せた方だ。

もし相手が男だったら宥めたりなど決してしない。

「じゃあさ、今この家には何にも食べ物ないんだ？」

気を取り直すように深翠に尋ねる。

「いえ……何もないわけではないです。一応、保存用の食料を置いて
あったと思うので」

深翠はすぐに表情を元に戻して言葉を発する。が、微妙に納得が
いつていないのか唇が微妙に突き出ていた。

本人的には無意識の行動だろうが、それでもそれはお互いの間にあ
った壁が少しだけ更に薄くなっている気がした。

もしかしたら反射的なあの突っ込みは、良い方向に働いたのかも
しれなかった。

それはさておき、とりあえず断食はしなくて済むようだったが、
二人の一日目の夕食はなんとも色気のないものになった。

缶詰数種類とカンパン。それがメニューの全て。

ここは被災地が戦地か、と突っ込みを入れたところだったが、
その言葉は呑み込んでおいた。

まあそれでも調理器具、調味料は当然ながら充実していたから、
色気はなくてもそれなりに味気はあるものにできた。

電気もそうだが、こんな山奥にもガス、水道が通っているのは幸いだった。

どういう方法によってそれらを通していいのか、という疑問は天岩戸と同じで十中八九真つ当な手法を取られていないだろうということは容易く想像できたが。

——何をするのか、と不思議そうに、若干不審そうに眺めていた深翠を放つて缶詰を調理したのは竹。

適当に味の合いそうなものをチョイスして、適当に火を通してただけなのだが、それでも直に食べるよりは味的にも気分的にも幾分マシだった。……それでも酒の肴のようなものしか出来なかったが。

それを食べた深翠の感想は、

「……見かけによりませんね」というもの。

それが調理された缶詰に対しての感想なのか、それとも調理した竹に対する感想なのかは聞かなかった。

缶詰と自分を同列に考えなければならぬのは微妙なところだったが、どちらにせよ評価が低下したということはなさそうだったし、それよりも話し合うべき議題があったからだ。

それは明日からの食事をどうするのか、であった。

そういう局面を経て、昨晚話し合った結果は『食材の買出し』に決定した。

その取り決め通り、今朝、候しい朝食を取った二人はこうして再び山道を一時間近く歩いて、この商店にやってきているのである。

昨日と違って荷物が無い分、楽な道程だった。

さて、これも昨晚の取り決めで今後の台所を引き受けることになった——

否、引き受けるといって聞かなかった深翠が真剣な顔で野菜類を見比べている最中、竹は昨日は流し見ただけで発見できなかったタバコの影を探していた。

本当に狭い店なので動き回る必要はない、というか動き回れるほ

どのスペースがない。

視線をふらふらと彷徨わせているだけで事足りるというのは楽で良いのだが、その分、期待を裏切られるのも早かった。

もしかしたら——そんな風に持っていた希望はあっさりと打ち碎かれた。

「どうかしました？」

後ろで竹が小さくため息をつく声が聞こえたのか、深翠が軽く振り返って怪訝そうな顔をした。

「ん、探し物がなくて」

「何ですか？」

「タバコと灰皿」

竹は軽く肩を竦めて答える。

その答えに深翠は僅かに眉を寄せた。

まだ諦めてなかったのか、という呆れと、平然とタバコという言葉の口にした竹への不快感が浮かんでいるようだった。

昨日一日会話をした事でわかったことだが、大神深翠はルールというものに対して、常識的な判断をする人物らしい。

それゆえにあくまでも未成年である竹がタバコを吸おうとすることを、良くは思っていないのである。

それが原因で改善されたと思われた関係には、やや後退した兆しがあったくらいである。

二歩進んで一歩下がったといった感じ。

その原因は竹と深翠の嗜好というか思想の相違。

竹は芯の芯のところでは真面目な人物だが、それ以外の大半がそうではない。

奔放というほど自由ではないが、それでも不自由というほど固定されてもいない。

常識を知り、解っていてもそれを判断基準にしない人物。

言ってしまうば、ただの自分勝手。それが竹である。

それに対して深翠は真面目な、常識を弁えた人物。

常識云々に関して言うなら、それは単に育った環境の違いというのが大きいだろう。

背景はどうあれ、それが改善された関係を一步後退させたのは間違いない事実だった。

だが竹は彼女のそんな心理に気付いても、特に何かを言うことはなかった。

タバコに対する議論は昨晚のうちに既に終わっていたからだ。

竹は昨日、結局タバコを吸うことが出来なかった。

理由は二つ。

一つは雇用者であり家主である深翠が良い顔をしなかった為。

もう一つは若干渋る竹に対して、灰皿がないので駄目、という物理的な問題を提唱された為。

この二つの理由に対して、屋外で吸うという解決策が当然頭に浮かんだが、竹としては人の敷地——あの大自然の中でポイ捨てをする気は昨日のうちではなかった。

別にタバコを吸っていなければ生きていけない、というほどに中毒ではないし、残りの本数も少ないという問題もある。

禁煙できて健康的だと前向きに考えて、昨日はタバコを断ったのだ。まあそうは言ってもこうして商店でタバコと灰皿を探している辺り、まだ諦めたわけではないようだった。

昨日は引き下がったが、今日は吸う。

竹の心と頭の中には密かにその決意と、その為の具体案が出来上がっていた。

しかし、吸うことの問題はクリア出来てもタバコの量は残念ながら増やすことは出来なかった。

竹は自前のタバコを仕事終了までにどうやって遣り繰りするか考えながら話題を変える。

「それよりもそっちはどう？ 何か良い食材あった？」

「ええ、まあそれなりに」

「そっか。それじゃあオレは外で待ってるわ」

二人分をせいぜいあと三日分だし、もし足りなくなればまたやつてくれば良いのだ。

そこまで真剣に選別する必要はないと思うが、真面目に悩んでいる様子だったので竹はそれは言わないでおき、小さな商店の外に出た。眼で追える範囲にある民家の数は両手の指の数より少ない。

商品の数が少ないといっても、あの深翠の様子だと買ひ物を終えるまであと4、5分はかかるだろう。

都会と違って柔らかい、人間の臭いが混ざっていない爽やかな風が体に当たる感覚が心地良い。

竹は商店の横に設置されている、稼動しているのかどうかすら怪し気なボロつちい自販機に硬貨を投入し、明らかに体に悪そうな色合いの瓶入りの緑色の炭酸飲料を二本購入した。

そして、そのうち一本の栓を自販機の右中央に空いている栓抜き用の穴で開け、恐る恐る口にします。

冷えてはいたが、さすがにボロ自販機から出てきただけに賞味期限が心配だった。

だがその心配は杞憂で、昔懐かしなメロンソーダ味がちゃんとした。

竹がちびちびと瓶を傾けていると、深翠が買物袋を両手に商店から出てきた。

その量を見るに、どうやら三日分をいっぺんに購入したらしい。

とりあえず竹は、何も言わずに栓を開けていない方の瓶を片方の袋に無理やり押し込んでから、

「そっち持つよ」

と反対側の袋をやや強引に受け取った。

竹の予想通りこちらの袋に米などの重いものが入っていたようで、ずしりとした重さがある。

深翠は半ば強引に荷物を引き受けられて、なんともいえない顔をする。

面を食らったのか、不服なのか、はたまた別の感情か。

それが深翠自身にも判別が付かなかったからこその表情だった。

「……別に持つてくれなくても——」

そこまで言って、

「いえ、どうせ持つなら両方持つくらいの親切心が欲しかったですね」と言い直した。

特に彼女に対して何かした覚えはないが、どうやら深翠は丁寧な口調とは裏腹に、何かしら悪態を付いていたらしい。

なんとなく彼女の性格をそんな風に理解し始めていた竹は、

「じゃあそっちも持とうか？」と口元を僅かに持ち上げて言った。

「いいです。私が持ちます」

そうくるだろうと予想していた竹はすぐに頷き返す。

「そう。それじゃあ行こう」

「はい……いえ、その前にこれは何ですか？」

歩き出そうとした竹に深翠が自由になった片手で、袋の中から緑色の液体の入った瓶を持って示す。

「何って、飲み物。着色料万歳のな。また歩きで戻るから喉渴くかなと思って。栓抜きはそこにあるよ」

竹は三分の一ほど飲み終えた瓶を持った手で自販機の栓抜き部分を指差す。

「喉なんて渴いてません」

「あらそ。じゃあそのまま持つて帰って後で飲めばいいよ」

「……いらないうって言うてるんですよ。おごってもらう理由もないですし」

ぼそりと呟く深翠の声。

さすがの竹もそれは聞こえたが、聞こえない振りをした。目的の為に。

竹はそれ以上の会話を切り上げて、歩き出した。

すぐに隣に並んだ深翠が恨めしそうな眼で自分を見ているのに気付いたが、それにも気付かない振りをする。

それから二人の間に会話らしい会話はなかった。

竹は再び深翠の実家に戻るまで、妙な緊張感で喉が渇くのを、メロソードで潤しながら早足に歩き続けた。

翠の章 10（後書き）

お読み戴きありがとうございます。
相変わらずスローペースですみません。

翠の章 11

*

二人が家に戻ったのは正午を半周ほど回った頃だった。

深翠がさっそく買ってきた食材で昼食の準備に取り掛かる。

竹は深翠に荷物を渡すと、

「それじゃオレは外でタバコ吸ってくるわ」と告げて居間を後にしようとする。

「ちよつと待つてください」

当然ながらストップの声がかかった。

「何？」

自分の予想通りの反応が返ってきている事を悟らせないように、台所から居間に戻ってきた深翠に自然な素振りで聞き返した。

「何？ じゃありません。タバコを吸うってどういうことですか？

灰皿は――」

「それを代用品にしようかと」

竹が指差したのは居間のセンターテーブルの上に置かれた二本の空き瓶。

「……その為になんぞわざわざ買ったんですか」

深翠は眉を寄せながら言った。

「いや、喉が渴いてたから買っただけ。灰皿にしようと思って買ったわけじゃないから」

無害そうな笑顔を添えて答えた。

だが深翠には効果がなかったらしい。

むしろ猜疑心を一層駆り立ててしまったようだった。

まあ別に構わない。

「嘘ですよね」

「嘘じゃないよ」

勿論、嘘だつたが竹は堂々と続ける。

「たまたま空き瓶が2本並んでるところ見たら、ちょうどいいかなって思いついただけ。まあどうしても吸うなって言うなら従うけど。ここは大神さんの家で、大神さんは依頼人だし」

「……………小癪な」

深翠は2本の空き瓶をちらりと流し見てから、悔やむように呟いた。

2本の空き瓶。

片方は竹が飲んだもの。もう片方は戻ってくる道中で深翠が飲んでしまったものだ。

栓抜きがなかったたので栓を開ける時、微妙に苦戦した。

彼女にしてみれば、喉が渴いてというよりも受け取ってしまった好意を無碍に出来なかった、というところであつたのだが、それがこうやって竹の交渉材料にされるとは思つてもいなかったのだらう。「一個人として借りを返せ、ということですね？」

深翠の言葉に竹は両眉を僅かに持ち上げて答えた。

彼女は竹に借りを作ってしまったている。

それはたかが150円かそのらの瓶ジュース一本だが、それでも借りは借りだ。

真面目な性格の深翠がそれを知らぬ存ぜぬと白を切れるわけがないし、今更ジュース代を返すとも言えない。

加えて彼女が作った借りは、仕事とはなんら係わり合いのないところでのもの。

それに対して彼女が依頼人として、竹の希望を払い除けることは出来ない。

例えできたとしても、それは彼女の性格——プライドが許さない。そんな竹のせこい策略にまんまと嵌った自分に唇を噛む。

竹はまんまと深翠が策に嵌り、そして悔む姿を見て緩みそうになる頬を必死に抑える。

まだ最後の一押しが終わっていない。

昨日は断念せざるを得なかった喫煙への二つの理由。
それに対処するだけではまだ完璧とはいえない。

竹は最後の詰めをするために口を開いた。

「どう？ やっぱ駄目？ だったらそれで別にいいんだけど。昨日から続けてあと2、3日の間、禁煙続けるだけだしね」

どちらでも良いよといいつつ、一日我慢したという勝手な事情を持ち上げ、人情に訴える。

我ながら姑息な手段だが、しかし――

「……わかりました。外で吸うならどうぞ」

不服なのが声にありありと込められているのがわかったが、どうにか成功にこぎつけることができた。

竹は満足そうに頷いて、空き瓶を一本手に取った。

それにしてもタバコを吸うのにここまで苦勞するのは、どうなのだろうと思わなくもない。

頭ひとつ下げれば、深翠は許可しれくれたような気がする。

だがなんとなく、彼女に頭を下げるのはご免だった。

それはプライドとは別の、もっと現実的な話。

台所で空き瓶に水を入れながらそんなことを考える。

「天倉君」

竹の横で買い物袋から買ってきた品物を整理する深翠が声をかけた。
「ん？」

空き瓶に三分の一ほどの水が入ったところで蛇口を捻る。

「――タバコを吸いに行く前に今日買ってきた食べ物のお金。半分払ってください」

「……はいよ」

こんな抜け目のない女にほいほい頭を下げるようになった日には、何か取り返しのつかない事態を招く気がするのだ。

簡易灰皿となった空き瓶を抱え玄関から外に出る。

外に出てすぐにタバコに着火。

一日ぶりのニコチンは相変わらずの味で、期待通りなのか期待はズレなのか微妙だ。

まあたかが一日の禁煙で味覚に劇的な変化が訪れずわけもないのだが。

そんな益体のないことを考えつつ、竹は歩き始めた。

その足取りはぶらつくというには、しっかりとしたもので、彼が確かな目的を持って歩いているのは明らかだった。

竹の目的は大神家周辺の調査。

その為には、深翠の視線は邪魔だった。

タバコを吸う吸わないというやり取りは、ほぼ——自分が一人で外を歩き回る為への口実に過ぎない。

解決士の本質。

依頼をただこなすのではなく、依頼の中にある『何か』を解決するのが解決士なのだ。

こればかりはいくら面倒でもやらなければいけないことだった。

自身に課した譲れないルール。

これは古文書に従って依頼しただけの深翠は知らないことだろう。

それどころか竹の解決士としての本質を知っているものは、極々僅かしかない。

重要なのは自分の眼で見て見極めること。

そして、その『何か』を見極める為には、一人で動く必要がある。

昨日は深翠の言葉を信じると言っただし、それは嘘偽りない竹の本心だ。

だがしかし、その上で天倉竹は大神深翠という女のことは信じていない。

100%信じている。

だが同時に100%信じていない。

その両極端の感情は相反しない。

それは彼女がたかだか一日、二日の付き合いだから、というわけで

もない。

竹は友人——十三夜のメンバー以外全てにその感情を向けているのだ。

ゆえに彼が世界中で、心の底から一欠片の疑いもなく信じているのは僅か十二人。

いや、一人は既にこの世にいないので十一人になる。

それが竹の信じる世界の全て。

依頼主の言葉は信じよう。

だが依頼主自身は信じない。

前者は解決士として、後者は天倉竹として。

——嘘を吐かれても、嘘だと知らなければそれは真実になる。

とんだ戯言だ。

天倉竹は、友人以外の他者から齎された嘘も真実も信じていないのだ。

深翠は竹のことを『人が良い』と言ったし、それは正解なのかもしれない。

しかし、人が良いのと、悪い人であることは全くの別物だ。

有り体に言えば、竹は極上の偽善者でもあった。

怠け者で偽善者。その上、我儘。

結構な性格である。

まず足を向けたのは、階段から続いていた石畳が途切れて出来ている不自然な空白地帯。

深翠は30分もすれば昼食ができるといつていた。

自由時間は多いとはいえないが、護衛という立場からあまり彼女から離れるわけにもいかないので、行動できる時間が一時間だろうと二時間だろうと大差ないだろう。

おおよそ十五メートル四方の空き地とその境界となっている森林の境目まで歩き、足元を入念に確認しながらとりあえずぐるりと一回りしてみる。

この手入れのされていない雑草が生い茂った場所には、立地の印

象から元々、社——何らかの建造物が建っていたのではと予想したが、どうやら昨日、遠くから眺めた時の判断通りその痕跡は見られなかった。

ならばこの不自然な空白は一体何なのだろうか。

首を捻り、先が伸びた灰を瓶口に添えて落とす。

目を凝らしてみるが特に気になるものはない。

竹は早々にこの場所の調査を切り上げた。

時間もあまりなかったし、ここをいくら調べても何も出てこない
と勘のようなものが働いたからだ。

竹は早足で階段の方へ向かった。階下の広場も調べてみるためだ。

一度、振り返り大神家を含めた全体を見渡す。

かなり広い範囲で弧を描き木々が途切れている。

恐らく上空から見れば深い森が大口を開けているように見えるだろう。

ならばこの階段から下は口から伸びた舌か。

自分の突飛な発想に苦笑いしながら、階段を下りていく。

長い階段だ。一段、一段調べている余裕はなかった。

階段の途中でちびたタバコを瓶の中に落とし、そのまま一気に下りきつて『舌』の部分を目と足で調べる。

しかし、こちらも特に気になるところはなかった。

無駄な労働だったか、と鼻頭に皺を寄せ——

「……しまった」

空振りに終わった調査の失望感から、無意識のうちに二本目のタバコに火をつけていた。

こんなペースで吸っていても残り少ない生活必需品はすぐに底を
ついてしまう。アイテム

だからといって今更火を消すことは出来ない。

竹は頭を掻いて、紫煙を肺いっぱいに吸い込んだ。

と、そこで天啓のようにある事実が頭の中にひらめいた。

——あるいはひらめいてしまった。

竹の顔に後悔が張り付く。

万引き犯の足取りを追っていたら、国際指名手配犯に辿り着いてしまったとでも表現しようか。

井戸を掘ったら水ではなく石油が出てきたとでも表現しようか。

いや、それならこんな風に後悔はしないだろう。

敢えて云うなら、魔法使いだと思って仲間にしたら、ただの電波な奴だった――

……意味がわからない。

兎も角、こんなことなら調査なんかするんじゃないかと、と本気で竹は思った。

心の底から。

しかし、解決士、天倉竹という在り方がそれを許してくれるわけがないのだ。

避けることの出来ない――

否、突かなければいけない藪だったのだ。不本意ながら。

竹は観念して思考を巡らす。

大神深翠。彼女はあの月読の末裔だと言った。

三貴神、天岩戸から姿を消した本物の神。

その末裔だという女が住まうこの地で、何も気になるものが出てこないということこそが既に異常なのだ。

竹は微妙な表情のまま、こめかみを押さえるようにして、過去の記憶を穿り出す。

その様子は嫌々思い出しているというのがありありと見て取れた。実際、その通りだったが、それでも気付いてしまった以上、無視するわけにもいかなかった。

気の進まない記憶探索だった為か、すぐには思い出せず、うろろと歩きながらの作業になった。

数分そうしていただろう。竹の足が止まった。

天岩戸の教えでは、離脱することを公に認められた素戔鳴と違い、忽然と姿を消した月読に対して組織はその消息を追いつけていたは

ずだ。

その規模は歲月とともに縮小されていき、終いには名目上だけの搜索班になっていたが、それでも天岩戸は組織が崩壊するまで月読の足取りを追っていた。

そして、その結果はいうまでもなく空振りに終わっている。

天岩戸という人外の化物が何百年も姿を追ひ、その影も踏ませなかった月読。

その血を受け継いだ者の姿が住まう地が『何もない』などとありえないではないか。

なんでこんな重要なことに気付かなかったのか。

竹は渋い面を変えずに考えるが、こちらはすぐに結論が出た。

日和見主義が根付いたというよりも、逃避の感情が大きい。無関係を装いたかったのだ。

あの組織のことは、もう関係のないことだから。

決別した過去だから。

自分には関係ないと嘘をついていた。

それで自分が、自分を取り巻く世界が騙せるわけがないとわかっていても。

——そろそろ時間だ。

竹は二本目のタバコを瓶の中に捨て、階段を上り始めた。

まだ何を解決するのか、見極めることは出来ていない。

だがその為の足がかりは出来た。

どう転んでも、面倒で、眼を背けなくなることになるのは目に見えている。

だけど、どうせそのうち無関係ではいられなくなるだろう。

それだけは見極めることが出来た。

階段を上りきり、平屋へと向かう。

玄関横に吸殻の入った瓶を置き、一息をついて家の中に入る。

突くつもりのなかった藪を突く羽目になってしまったが、仕方ない。

蛇が出るのか蜥蜴が出るのか、それとも大蛇が出てくるか。もはや取るに足らない羽虫ということはないだろう。

それらにどう関わるかは、その時、決める。

決め方は簡単だ――

板張りの廊下を進むと居間から割烹着を着た深翠が出てきて告げる。

「あ。今、呼びに行こうと思っていたところです。お昼ご飯、出来ました」

――彼女を護ること。

それが今は何よりも重要で、決して変わることのない指針。

結局のところ全ての判断は、その上でするしかない。

「――時間ぴったりだ。それじゃあ飯にしようか」

竹は頷き、深翠に続いて居間に戻った。

翠の章 11（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

相変わらずのスローペースですみません。

今年中にと1、2話更新できれば……って感じです。
どうかそうなるように祈っててください。

一応、確認してから更新していますが、もしおかしなところを発見したらご連絡ください。

*

久しぶりというほどでもないが、それでも食卓にまともな食べ物が並んでいるというのは、思いのほか気分を盛り上げてくれるものらしい。

鬱々としだしていた気持ちが持ち直す。

センターテーブルに並んでいるのはキノコの和風パスタとグリーンサラダ。それと冷えた麦茶。

パスタは完成したばかりらしく、まだ湯気が立っている。

商品の少ないあの商店で買えた食材を考えれば十分に上等なメニューだ。

あの店には日持ちのしない生ものが殆ど置いてなかったから、滞在中は野菜やらキノコやらをメインにしたメニューになる。

キノコは別にして、あまり野菜が好きではない竹にとってそれはあまり嬉しくない話だが、一人暮らしの自分は野菜類が圧倒的に不足しているのがわかつていたので、まあここで釣り合いを取っておくのも悪くないだろう。

竹が座り、深翠もその正面に座る。

割烹着はすでに脱いでいた。

和服に割烹着という取り合わせをもう少し見ていたかったが、滞在中は彼女が料理を作るということなので、がつつかなくともまだ見る機会はあるだろう。

いただきます、とどちらからともなく言って昼食の時間になった。そういえば同い年の女子の手料理というのは初めてだった。

一口目にいく前にそこに思い至ると、陰のさしていた気持ちが殆ど平常時と変わらないくらいまで持ち直していた。

「——食べないんですか？」

唐突にどこか探るような声で深翠が言った。

「どうやらすぐに食べ始めなかったことを疑問に思ったらしい。」

「いや、食べるよ？　ただクラスメイトの女の子の手料理に少し感動してただけ」

と竹は正直に答えた。

「え？」

「ん？」

何か変なことを言ったのだろうか。

深翠は意外そうな、意表を突かれたという顔をした。

「あ、いえ、予想外の答えが返ってきたので……少し驚きました」

「予想外？　ならどんな答えを予想してたの？」

「……毒でも警戒していたのかと」

「はい？　毒？　なんだそりゃ？」

全く脈絡のない深翠の言葉に理解が追いつかなかったが――

「――ああ、もしかしてキノコのことだ？」

毒キノコというのはあるが、それを竹が警戒してすぐに料理に手をつけなかったとも思ったのかもしれない。

だがこのパスタに入っている子達はメジャーな形をしている。

色だって普通だ。

赤かったり青かったり変な斑点もついていない。

それにこれは店で売っていたものである。

警戒のしようがないではないか。

しかし深翠はフォークを一度テーブルに置きなおし、

「そうではなくてですね」

と言葉を区切り、腑に落ちない顔を作る竹に説くように言う。

「――私が毒を入れていないかってことです」

「……はあ？　ごめん、ちよつと意味がわからない。何で大神さんが毒を混入するんだよ」

クエスチョンマークがいくつも頭に浮かぶ。

「ええとですね。例えば天倉君はそちらの世界で有名な人らしいで

すから、実は私が誰かに依頼を受けていて天倉君の殺害を目論んでいる、とか。そういう可能性は考えないのかという話です」

そんな深翠の言葉に竹は――

「っは――あははははは――」

爆笑した。

「な、何故笑うんですかつ!？」

本人的には至極真面目な発言で、まさか笑われるとは思っていないかったのだらう。

当惑気味に赤面して竹を睨み付けた。

しかし、竹はツボに入ってしまったらしく、ひきつけを起こしたように暫くひいひい笑い続けた。

「くっ……いつまで――」

深翠はその態度に段々と苛立つてきたらしく、置きなおしたはずのフォークを握り締める。

それを笑い転げながら眼の端で確認した途端、直感が走った。

――このままだとアレは食器じゃなくて凶器に変わる。

笑いも収まり始めていたこともあり、その直感があつてからの竹の変わり身は素早かった。

「あー、笑ったわ」

そう言つて涙の溜まった目尻を指で拭い、佇まいを直した。

説明しろ、という深翠の視線が矢のように突き刺さる。

彼女には理解不能なタイミングで笑われた羞恥と、意味もわからずに笑い続けられた怒りが渦巻いているらしい。

だがまあそれくらいで済んでよかったと竹は思った。

突き刺さったのが視線じゃなくてフォークだったらさすがに笑えない。

竹だつて自分の身が可愛いし、身体を張つてまで笑いを取るキャラではない。

それにしても彼女は感情が昂ぶると手が出るタイプの人間のようなのだ。

その点において今後の付き合いで気をつけなければならない。

それは兎も角――

「――でだ。大神さんがオレに依頼をしてきたのは、実はオレを殺す為だった、と。うん。まあその考えは確かに可能性としては0じゃないわな。

穿ちつて考えれば、ありえない話でもないし。それなりに敵が多いのは自覚してるから。

でもそれを踏まえた上で、それはありえないでしょ。

もしオレを殺そうとしてるなら、わざわざ言う必要なんてないし――
――大神さんじゃあオレは殺せないよ」

ニヒルな笑みを作って竹は言った。

それは絶対の自信と、虚しさが同居しているような笑みだった。

真贋は未だ不明だが、いくら月読の末裔だといったところで大神深翠は、神性のしの字も感じない、紛れもなくただの人間だ。

その程度の存在では、あの組織の狂気の結晶ともいえる自分を殺すことなど夢のまた夢。

可能、不可能を論じるまでもなく、出来るわけがない。

竹と対等の何かでなければ、万が一も、億が一もありえない。

「まあそういうわけだから、オレはそんな勘繰りはしない。それに昨日も言ったけどオレは依頼人は信じてるから」

「……そこまで断言しますか。随分、自分に自信があるんですね。……護衛を頼んでいる私としては、とても喜ばしいことですけど」

どこか棘のある深翠の言葉に竹は肩をすくめた。

「まあ事実だし。その辺は期待してくれていいよ」

尊大に取れる物言いである。

だが仕事前、平時の時ならまだしも、仕事中に謙遜する意味はない。

「あ、あとついでに言っておくと、この料理に毒なんて入ってない。もし毒が混入されていたらすぐに臭いで気付くから」

薬物に詳しいのは十三夜のお医者さんである石渡だが、それには

及ばずとも竹だつてある程度の知識はあるし、それらの訓練も積んでいる。

「大神さんだつて、まさか本当に毒を入れようなんて思ってたでしよ？」

毒云々という話は、竹があまりにも無警戒だったため、依頼人として不安に思ったからだろう、と竹は話している最中に思い至っていた。

「……………そうですね……………毒なんて、入れようと、思つてませんよ？」

「何だその間は。ていうか喋り方おかしいだろ」

さすがにスルー出来ない話だったので、いつもの抑揚のあまりない口調で突っ込んだ。

今のところ彼女に毒殺されるような覚えはない。

……………覗きはそこまで重罪ではないはずだ。いや、あれはあくまでも事故だったけど。

というか彼女はまだ根に持っているというのだろうか。

もしそれで『毒殺』なんて考えが少しでも過ぎっていたとしたら、性悪すぎる。

陰険なんてものじゃない、奈落級の暗黒面だ。

「まあいいじゃないですか」

……………よくねえよ。どう考えてもよくねえよ、と全力で突っ込みたかったが、なんとか踏み止まる。

あまり突いていい話題ではないと直感が叫んでいた。

竹はそれに従い、引き下がった。

それに一旦話を区切らなければ、折角の Pasta が冷めてしまうところだ。

それにしても先のやり取りからもわかるように、いつの間にか二人の間で自然なやり取りが成立していた。

自然というには、いささか物騒な話であったが、概ね良好な関係になってきたということだろう。

竹は心の中で頷き、フォークにくるくるとパスタを巻きつける。
まずは一口。

「――お」

思わず声が出た。

それは毒が入っていたとかいうことではなく――
美味しい。

というか滅茶苦茶美味しかった。

竹はどちらかといえば濃い味付けが好みだ。

自分で料理するときなんかは常に濃い目。

だがこのパスタは薄味。

しかし、そんな好みの差などすっ飛ばす衝撃があった。

料理に詳しいわけでもないし、味に煩いわけでもない。

ただ単純に深翠の料理は美味しかったのだ。

ここは感想を述べないわけにはいくまい。

竹は口の中のものを呑み込んでから、

「これは美味い」

と一言、告げた。

「……それはどうも」

「うん」

言ったあと、自分の表現力の低さに幻滅する。

元より大げさなりアクションを取る方ではないが、もう少し言い方があったのではないか。

ここまで冷静な殆ど普段と変わらぬ口調では世辞を言っているの
と大差ない。

とはいえ、人には得て不得手があるのだ。

いきなり変わることなど出来ないし、ここで急にオーバーリアク
ションを取り出したら逆に気味が悪い。

だから竹はそのまま自分の言葉で彼女の料理を褒めることにした。
「いや、ホントにうまいわ。大神さん、料理上手なんだ」

言えば言うほど、自分の語彙の少なさにダメージを受けていく気

がするが構わなかった。

ここで黙々と食べ続けるよりはよっぽどマシだ。

「……別に、このくらい普通ですよ」

「ただ料理上手の国だよ。これが普通だったら男の浮気は確実に減るわ」

男を捕まえとくには胃袋をつかめ、なんていうくらいだ。

これが平均なら全国の男共は真っ先に帰宅するだろう。

まあその分、肥満率も増えそうな話だが。

「大袈裟ですよ」

そう言って深翠は謙遜するが、どこか嬉しそうだった。

基本的に——特に喜に関する彼女の表情の変化は微細なものでわかりにくいのだが、ようやくその違いというものがはっきりとわかってきた。

「そんなことないと思うけどね。これだけ出来れば。一人暮らしって言ってたけど、自炊してたんだ？」

竹は食べる手を止めずに尋ねた。

食が細く、食べる速度も遅い竹にしては、かなりのハイペースで料理は減っていた。

「はい。料理は好きですし。大抵、和食でしたけど」

「そうなんだ」

なんとなくイメージ通りだった。

「ええ、でも今回は食材も時間も少なかったから、パスタにしました」

それでも和風味なのは、彼女のこだわりだろう。

「夕食は時間は使えるので、ちゃんと作りますよ」

「ちゃんとして……」

竹から言わせればこれで十分過ぎるほどちゃんとしてるのだが、彼女の中の基準は竹よりも遥か高みにあるらしい。

「期待してくれていいですよ」

気を良くしているのか深翠は先ほどの竹の台詞をなぞるように言

つて、不敵に笑って見せた。

謙遜はしていたが、それでもやはり自信があるのだろう。

まあたかが30分足らずでこれだけの料理を作る腕だ。

夕食が彼女の言葉通り期待できるものになるのは間違いない。

「それじゃ期待しておく」

竹は心から期待を込めて深翠に言った。

深翠は頷いてから、冷えた麦茶を一口飲むと、

「そうしてください。毒は入れませんから」

と答えた。

翠の章 12（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

進行状況次第ですが、今年はこれが最後の更新になるかもしれません。

なのでとりあえず、ご挨拶。

来年もよろしく願います。

では良いお年を。

食事中はそれなりに会話が弾んだ。

料理談義というほどでもないが、話題は専ら食についてだった。

竹も一人暮らしの為、自炊の真似事をしないこともないが、話を聞く限り――いや、聞かなくてもわかっていたことだが『自分が美味ければいい』という理念で料理を作る竹と違って、深翠は料理に対する意識が根本から竹とは異なっていた。

なんでも料理は、その料理を作った人の性格を現す。

ゆえに命を分けてもらう食材に感謝し、そして作った料理を食べてくれる相手にも感謝しながら作るのだとか。

普通に生きていたら絶対に根付かない精神である。

しかも腕は超一流。

完全に料理人だった。

彼女に料理を教えたのは母親だというが、一体どういう人物だったのだろうか。

そんな料理人曰く、料理に毒を入れるなんてことは食材に、ひいては食べてくれる相手に対する冒涇でしかなく、決して許される行為ではないとか。

それを聞いて少し安心した。

なんだかんだ、先ほどのやり取りがまだ気になっていたのだ。

そうこうしているうちに両者の皿は空になり、食後の挨拶をもって昼食は終了と相成った。

ここで一服、といきたいところだったが、タバコの残数を考えて止めておいた。

とはいえ、食器を片付け始めた深翠の姿を呆と見ても仕方ない。心情は大いにそれでも良いのだが、残念ながら実益がない。

片付けようか、と一度問いかけてみたが、しなくていいとも言っ
ならば今の竹がやることなどそう多くは無い。

竹は今、思い付いた――

否、元々は食事中の話題として用意していたものだが、予想外に会話が弾んだのでここまで延び延びになっていた質問を、今、思い付いたように口に出した。

「大神さんてさ、いつからここに住んでたの？」

深翠は全ての食器を台所まで運び、再び割烹着を着けようとしている。

そして言った。

「生まれた時からです」

竹の演技が機能したのか雑談の続きだと思っているらしく、彼女の口調は柔らかいままだ。

「ご両親も？」

「はい。というよりも、大神家はずっとこの家に住んでいます」

竹は深翠の言葉に一度言葉を止めて言った。

「それは……月読――大神翠の頃からってこと？」

彼女の話しが本当なら、大神家はこの地に、月読が天岩戸から消えた約650年から住み続けていることになる。

「そういう風に聞いています。大神は初代の頃よりこの豊葦原の統治者をしていたとか」

「豊葦原？　そういえば最初にそんなこと言ってたな。それってどこのことよ？」

「この大森林を含めた地域一帯のことです。私たちが降りた駅なんかも含まれますね」

竹は大森林の全貌はわからない。だがそれでもこの森がかなり広大な面積を有しているのはわかる。それに加えてここから歩きで一時間かかる駅も含まれるらしい。

深翠はさらっと言つてのけたが、それはとんでもない広さではあるまいか。

「でも駅の名前って確か白銅郷じゃなかった？」

「豊葦原という名は、初代が移り住んだ頃に彼女がこの地に定めた

名前。そしてその名を知る者は大神家のみです。ですから白銅郷という名前が公的な正式名称ですね」

「ん？　じゃあ統治者ってどういう意味？」

土地に名をつけたにも関わらず、その名を知るのは大神家のみだという。

ならば統治というのは、どういう意味か。

「難しいですね。大神家は、別に政治に介入したわけでも村の住民と係わり合いを持ったわけでもないんです。だけど、大神翠はこの地の統治者だった。そして子々孫々それを受け継いできた。言ってしまうえば自称ということですね。何をしたわけでもありませんから」つまり月読はこの地に住まい、名を付け、更には統治者を名乗っておきながら、何もしていないということらしい。

いまいち理解の出来ない話だったが、追求は出来ない。

今ここは追求の場ではなく、雑談の場なのだ。

「ふうん……あ、じゃあさ、この家ってここに初代の人に住んでから何回か直したりしてるんだ？」

「そうですね。建直しも含めて、何度も改修しているらしいです。最後に大きな改修をしたのは、私が生まれるよりもかなり前だったみたいです。古い建物ですから、小さな修復は機を見てやっていきますけど」

この建物は昭和の中期辺りのものだろうという竹の見立ては、まあ間違っていないかったわけだ。

同時に意識の奥で感じていた坐りの悪さも解消できた。

ただ古臭いだけの印象しかない建物と、それ以外——階段や石畳、自然すらも含めた悠久の古色とがどこか噛み合わなかったのは、そういう事情があったからだだった。

あの場所に似ている似ていると思っていたが、月読がこの地に根をおろし、そして創り上げてきた土地であるのなら、似ているのも納得できる話だ。

——まああくまでも、その月読とやらが本物だと仮定すればの話で

ある。

竹はここにきてもまだその可能性を捨て切れていなかった。

それは甘さであり、ある種の執着だが、同時に希望でもあった。

平穩、普通、日常。

何も起きないことが一番良いのだ。

手に入らぬとわかっていても、足が抜けぬとわかっていても、それを求めている。

事実、この3年間はそれに近い場所にいることができていた。

運命の物語から外れたような気がしていた。

だが――それはやはり幻想であったのだと、因果の系からは逃れられぬのだと、気付き始めてもいた。

少なくとも、この3年間手元にあったものを捨てる瀬戸際程度には。

因果。

原因から垂らされた糸は、着実に結果へと結び付こうとしている。話の区切りがついたと思ったのだろう。

深翠は竹に背を向けて、食器を洗い始めた。

竹は1分ほどその後ろ姿を堪能してから、立ち上がる。

もう少し眺めていたいところだったが、それよりも優先すべきことがあった。

部屋に戻って少し考えを纏める必要がある。

後ろ髪引かれながら敷居を踏み越えて、居間から身体が半分出たところで深翠が何か思い付いたように声をあげた。

「ああ、そうでした」

竹は身体を大きく仰け反らせて、居間と続きになっている台所の方を覗いた。

横着者である。

声の主の方かというと、首だけで見返って竹の方に目を向けていた。

こちらは横着というわけではなく、食器洗いの途中なので手が離

せないだけだろう。

「この家のことなんですけど、大神翠はこの家には住んでいなかったそうです」

「は？ そうなの？」

変な体勢で発声したせいか、うめき声のようになってしまった。

体勢を元に戻し、一歩後ろに下がってから言った。

「じゃあどこに住んでたんだ？」

今度は普通の声だった。

深翠は蛇口を一度止める。

そして割烹着の前で両手を拭き、体ごと振り返って右手をゆるやかに持ち上げ、ある方向を指差した。

血の気を感じさせないほど白かった手先は、冷水に晒されていたせいか微かに赤い。

彼女の指した先にあるのは――

「あの空き地。あそこには大神翠が存命中のみ社が建っていて、そこに大神翠は住んでいたそうです。階段の下に鳥居があったのは、その名残だといわれています」

「大神翠って月読だよな。何でその時だけ社があったの？」

竹はあらゆる感想を頭の隅に追いやって問うた。

その問いに大神深翠は口を結んだまま笑い、

「わかりません。何分、ずっと昔のことですから」

と締め括った。

部屋に戻った竹は新たに仕入れた情報を整理していた。

まず大神家。

大神家は初代の頃よりこの地に住まい、そして初代である月読はこの地に豊葦原という名を付け、代々統治者を名乗ってきた。

しかし、大神家は統治者を名乗っておきながら、この地に対して統治者として何もしていない。

それがまず一つ目の疑問。

行為としての統治をしてもいないのに、何故、大神家は——否、月読は統治者を名乗りだしたのか。

月読が真に月読であつたのなら、そこに意味がないわけがない。そしてもう一つ、竹の想像した通りあの不自然な空白地に社はあつた。

ただ六百を超える長い年月が、その痕跡を消してしまつていたのだ。

とはいえそこは問題ではない。

むしろそれにより大神の女当主が代々、巫女と記された理由に得心がいった。

社があり、そしてその血脈に予知の力が受け継がれていったなら、そこに住まう女は巫女と記されよう。

だがここで一つの矛盾が浮かび上がる。

社があり、そこに住まつたのは初代の大神翠の時だけだという話なのだ。

それ以降、社はなくなりその横に建てられた民家に大神家は住み続けた。

つまり本来、巫女と呼ばれるべき存在は初代のみなのである。

しかし、その初代は巫女ではなく月読。

繋がっているようで繋がっていない。どこか擦れているのだ。

ただ、大きな謎として捉えたとき、なんと記されていたかなど大して重要ではないと考える。

名前など所詮、二次的な副産物に過ぎない。

だから真に考えるべき問題は、何故、大神翠は社などを建てたのか、そして何故その社は大神翠の存命中のみ存在であつたかということだ。

大枠にして二つの謎。

それは結局のところ月読に関することである。

故に——真に調べるべき、知るべきことは月読という消失した神について。

そうすれば、自ずと答えも出てくるだろう。

竹はおぼろげではあるが、そんな確信を持った。

しかしそうはいつでも、竹は月読について詳しくない。

それは竹が無知だということではなく、月読に纏わる情報が天岩戸の中ですら極端に少なかった為だ。

口を閉ざす以前に語られる言葉はあらず。

目を瞑らずともに見える事象は存在せず。

耳を塞ぐまでもなく聴こえる歴史はない。

月読という過去の存在を知るものは皆無だった。

竹は会ったこともない大神翠に、影すらも踏ませないという言葉通りの印象を抱く。

脇に頼めば調べがつくかといえば、それすら怪しい。

隠された情報ならともかく、月読という情報自体が断絶してしまっていたら、脇ですら調べることは不可能だ。

過去を遡るにも限界があるのだ。

しかし、だとすると、この限られた情報でどうやって抱えた謎を解けというのか。

手がかりは大神深翠の言葉と、月読が記したとされる月黄泉文書のみ。

残念ながら現状では、いくら考えてもわからない。

わかるわけがない。

これは650年もの間、誰も知らなかった歴史なのだ。

たかが数日で考古学者でも歴史学者でも、調査の専門家でもない竹ごときに全てがわかるわけがない。

それにしても自分は何をやっているのだろうか。

護衛の仕事で謎解きなんかのうち込んでいる自分に苦笑いする。

解決すべき問題を見つける為に、まず謎を解かなければならない。

なんと手間がかかることだろう。

竹は下唇を突き出して誰に宛てるわけでもない不満を現すと、深翠から借りている月黄泉文書を手に取った。

限られた情報とはいっても、多分、竹はこの650年間で大神家そのものを除けば最も月読に関する情報を仕入れていることになるだろう。

なにせ月読の末裔だという少女に出会い、その口から様々な話を聞いたのだ。

その上――

竹は古文書をぱらぱらと捲り始める。

その上、月読本人が記したという予定書まで手元にあるのだから。

竹にも意地はある。

これだけヒントがあるのに、何もわかりませんなど情けない言葉を口にするつもりはない。

竹は読めもしない古い書物をただ眺め続けた。

翠の章 13（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

今年最初の更新です。

皆様に楽しんでいただけるよう頑張りますのでよろしくお願いいたします。

*

——ああ、これは夢だ。

そう気付いた時——何か耳元で音がした。

……ら……ん。

……く……ん。

あ………くん。

………らくん。……きて………い。

ゆさゆさと身体が揺れる。

まどろんでいた頭が徐々に覚醒し始める。

やはり自分は寝ているらしい、と認識すると耳元の声はつきりと聞こえた。

「天倉君。起きてください」

途端、夢の世界から完全に引き戻される。

即座にどんな夢だったのか、そもそも夢を見ていたのかすら曖昧になっていた。

「……………ん」

あくびを噛み殺しながら薄く目を開けると、隙間から入り込んできた明るさに目が驚き、一瞬目の前が真っ白になった。

それでも構わず目を開け続けると、漸く閃光の中に飛び込んだように白色一色だった周囲の世界に彩りが蘇る。

目の前に大神深翠の顔があった。

その後ろには人工の明かりを撒き散らす電球。

彼女は長い黒髪を垂らして、仰向けに寝転んでいる竹の顔を覗き込んでいた。

深翠は竹が起きたのを確認すると、竹の肩に添えていた手を引っ込めて言った。

身体が揺れていると感じたのは、竹を起こすために彼女が揺すったからだろう。

「おはようございます……といってもまだ夜ですが」

「……今、何時？」

竹は寝起きの枯れた声で言った。

「夜の7時を回ったところです」

「――7時?!」

竹は驚愕を隠しもせず声を出す。

しかし、深翠は竹の反応とは反対に冷静に返した。

「はい。もう7時です。夕食が出来たので呼びにきました」

深翠はすると立ち上がり、部屋から辞する。

竹は半身を起こし、呆然とその後ろ姿を見送る。

いつの間に眠ってしまったのか全く覚えていなかった。

竹が確実に自分が起きていたといえるのは、昼食後1時間ほどだから最低でも4時間は寝ていたことになる。

意味のわからない文字を眺め続けたのが子守唄代わりになってしまったのか。

昼寝など護衛という立場を考えれば最悪も最悪だ。

しかも耳元で声を掛けられ、身体を揺すられるまで気配すら感じれていなかったのだ。

無警戒にもほどがあるといったところだ。

護衛対象の深翠が無事であることが救いだった。

部屋の外に出た深翠が襖を閉めるのに振り向く。

その顔には当然、非難めいた色が浮かんでいた。

まあそういう顔をされることをしたのだから仕様がなない。

それよりも竹は深翠の顔、というかその立ち姿に猛烈な既視感を覚えた。

どこで観たのだったか――

記憶を探ろうと眉間に縦皺を寄せる竹に、深翠が声をかける。

冷たく、糾弾するような口調だ。

「――護衛って昼寝をしても務まるものなんですね」

そう毒を吐いて、ぴしゃりと強めに襖が閉じられた。

ぐうの音も出ない。

弁解の余地もない。

あれだけ大見得を切っておいて、この体たらく。

申し訳なさでいっばいだ。

内に湧いた既視感などどうでもことだ。

それよりも彼女は命を狙われているのだから、もっと気を引き締める必要がある。

少なくとも彼女に不安を抱かせない程度には。

竹は自分が目を覚ます間際に、深翠の顔に不安そうな表情が浮かんでいたのを見逃していなかった。

そこまで考えたところで、両手にそれぞれ違和感があることにやっとな気が付いた。

右手には眠る前まで読んでいたはずの古文書。

そして左手はいつの間に鞆から出したのか、白い長袋に添えられていた。

長袋の中には竹の愛刀にして最悪の相棒が入っている。

無意識のうちに昼寝をしてしまったとはいえ、生存に必要な用心深さと周到さは、本能にまで刷り込まれていたということだろう。

だがそうはいっても、この状況で完全なまでに熟睡をしてしまっていたのだから言い訳にしかない。

竹はのそのそと立ち上がると古文書と長袋を元の位置に戻し、一つ伸びをする。

少しだけ迷った後、片手で軽く頬を張った。
ぴしゃり、と高い音が響く。

ひりひりと若干赤くなった頬を引っさげて竹は深翠の後を追った。

夕食は品目も多く、昼食以上に美味しかった。

しかし、会話は昼のように弾まない。

それが自分で蒔いた種であることがわかっていたので、余計に針のむしろだった。

非常に美味しいのに味気ないという、おかしい食事を終え、風呂に入り、そのまま就寝という昨日と同じ流れになった。

もし昼寝をしていなければ風呂上りに暫く雑談の時間でもあったのでは、と思うと少しばかり残念な気持ちになる。

風呂上りの女子は普段より何十%増しで可愛く見えるのだ。

なんて邪まな考えもないわけではなかったが、もう少し深翠に大神家やら月読やらのことを聞いておきたかったというのが本音だ。

……いや、まあどちらも本音ではあるわけだけど。

とはいえ、どんな思惑を抱えていたところで結局、話すことは出来なかったわけで詮無きことだ。

風呂から上がり、部屋に戻った竹はロングTシャツにスウェットパンスツというラフな寝巻き姿で布団の上に寝転んでいた。

半端な時間にかなり寝てしまっていた為、暫くは眠れないだろうし、護衛として気合を入れなおした直後にすやすや就寝というわけにもいかない。

竹は体を起こして布団の上に胡坐をかくと、再び月黄泉文書を読むことにした。

そして4分の1ほど捲ったところで何か思い出したように立ち上がり、鞆の中から先ほど仕舞った長袋を取り出して布団の横に置いた。少食の竹にしてはよく食べた方だったので、少しばかり腹が重かった。

それから1時間、2時間、3時間と夜は深まり、日付が変わった頃、静まり返った家の外から奇妙な声が届いてきた。

竹はその微かに耳に届いた声に怪訝そうに眉をひそめる。

「……犬か？」

そう呟いてみたものの、どこか違う気がした。

それは確かに大型の犬が呻るような声であったが、それにしては少しばかり物騒な色があった。

敢えていうなら、ライオンやらトラやらそういう野生の肉食獣のような重厚さがあつたのだ。

だがここは日本だ。

ライオンもトラも動物園くらいでしかお目にかかれないものだ。

ならば野犬の類だろう。

もしかしたら絶滅したとされるニホンオオカミという線もありえない話ではない。

この山周辺にどんな生き物がいるか知らないが、これだけ深い森が続く土地である。

ライオンやトラよりもよっぽど現実的な話だ。

とはいえ野犬であろうと狼であろうと、別に襲い掛かれたわけでもない。

それに声こそ聞こえたが、竹が感じ取れる周辺には気配そのものはない。

ならば放っておいても問題ないだろう——と結論付けようとして思い直した。

今のところ、竹は深翠に依頼を受けてから護衛らしいことを何一つしていない。

やったことといえば暢気に買い物にいたり、謎解きめいたことをしてみたり、仕舞には昼寝だ。

意味のあるなしに関わらず、ここらでそれっぽいことをしておいた方がいいだろう。

外の見回り。

判りやすい護衛の仕事だ。

そう決めると、竹は古文書を布団の上に置き、代わりに長袋を持つて立ち上がった。

そして一度、部屋の外に出たところで引き返し、部屋の隅に移動させた卓袱台の上からタバコの箱を引っ掴んだ。

折角なので見回りのついでに一服しようという魂胆だ。

残り7本。このまま一日3本の消費量を固定すれば明日、明後日

は保つ。

月黄泉文書によれば、深翠の両親は5月5日の日の出までに彼女を殺害しなければならぬらしいから、丁度良いペースだろう、

深翠が寝ているかもしれないので、足音やら物音は極力抑えて家の外へと出る。

夜の森の空気は昼間よりも一層、湿っぽく冷えていた。

電球が切れる間際なのか、表に出る前に点けてきた玄関前の外灯は酷く弱弱しく、ぱちぱちと時たま明滅する。

その上、日のあるうちは時折聴こえていた鳥の囀りもないものだから、鬱蒼とした雰囲気が更に一歩進んで演出されていた。

こういった鬱々とした雰囲気は嫌いではない。

むしろ好きな部類であるのだが、それは景観を楽しむということに限定した場合である。

竹は一人きりでこういう場所を歩くのは好きではない。

幽霊だとかそういったものが苦手であった。

お化け屋敷ですら駄目。

単純に、理屈抜きに怖いのだ。

そういったモノへの対処法、アドバンテージを握っていてもだ。

聞く人が聞けば笑うだろう。もしくは耳を疑うだろう。

裏の社会でも屈指の実力を持った少年が、それこそその存在自体がそちら側よりにいる者が幽霊が怖いなどと平気で口にするのだから

だがこういうのは感性やら感覚の問題であり、腕っ節が強かろうが弱かろうが怖いものは怖いものだから仕方ない。

友人であり十三夜のメンバーであるたてはな館花。

基本的な戦闘能力であれば竹を凌ぐ実力を持っている彼は、竹以上にそういうのが苦手だったりする。

怪談なんか話されようものなら、一気にテンションがどん底に落ちるほどだ。

反対に松田や佐藤なんかはその辺の感覚が完全に切れているので、全く平気だったりする。

閑話休題。

とにかく竹は夜な夜なこういうところを好んで一人歩きをしたくないわけであり、それが昨日の夜は見回りをせず、先ほども奇妙な唸り声を放置しようとした真相だった。

竹は覚悟を決めるように大きく深呼吸し、頭の中を仕事モードに切り替えた。

雑念が消えると同時に、表情も消えた。

断続的に犬だか狼だかの唸り声は聞こえ続けている。

眼球を左右に動かしてどちらに行くか逡巡し、玄関から出て左手側に歩き出した。

翠の章 14（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

更新予定だったものが短かったので、書き足してみたら1話分としては長めになってしまったので分割する羽目になりました。完全に本末転倒ですが、より良いものになったと思うことにします。

翠の章 15

家の左手側は庭になっている。

神社の跡地やらがあつてやたら拓けている右手側と違い、広さはさほど無い。

塀がないので家から3メートルあるかないかのところで森に面していて、幅ほどではないが長さもそれほどなく、小さな長方形の形である。

中央には物干し台が設置されていて余計、こじんまりした印象を抱かせる。

閉じられた雨戸から明かりは漏れてきていないから、恐らく深翠はすでに眠っているのだろう。

月明かりは雲に隠れてしまつていて降りてこない。

光源になるのは玄関前の外灯だけだ。

それも奥に向かうと殆ど届いていないのと一緒にだ。

足元すらおぼつかないほどの暗黒。

しかし、夜目は利く。完全な暗闇でもなければ大して不都合はなかった。

庭を素通りし、家の裏手に回る。

こちらは庭よりも更に森に近く、半分ほどの幅しかない。

声のする方に歩いてきたのだが、ちっともその声が近づいている気がしない。

先ほどから聞こえる距離は一定だ。

竹が歩く度に移動しているのだろう。

どんな生き物かまだわからないが、人を警戒しているのかもしれない。

それとも獲物として観察しているのか。

どちらにせよ、わざわざこうやって出てきたのだ。

その姿を拝むくらいはしておきたい。

竹は整地された裏手の道から外れて、森の中に足を踏み入れる。湿気が多い為か足元が少しぬかるんでいて滑る。

このままいくと、平屋に戻る頃には寝巻きは洗濯コースだろう。替えの寝巻きはないが、普段着で寝ればいいだけなので問題はない。森の中では一段とゆっくり歩き、木の密集する闇に目を凝らし、見える範囲で頭の中に道筋を描く。

獣の唸り声は変わらず前方3、40メートル辺りからしている。

竹は長袋を持った左手を強く握り、息を深く吸い込むと、突然走り出した。

声のしていた地点へ、頭の中に描いておいた最短のルートを一直線に駆け抜ける。

木々の間をすり抜け、倒木を飛び越え、湿った大地を蹴り跳ばす。奇襲めいた唐突な疾走に驚いたのか、今まで声でしか気配を感じられなかった獣が慌てたように逃走を始める音がした。

しかし、先手を取った竹はぐんぐん速度を上げてそれを追走する。一定を保たれていた獣との距離が縮まっていき、20メートルを切ったところでその後ろ姿を視認した。

——なんだありゃ？

竹は走りながら頭の中で首を捻った。

竹の前を駆けているのは、大型の日本犬のような姿かたちをした生き物だった。

形だけならまだ常識の範疇だが、その色がおかしい。

獣の体色は竹が知りうる限り、どんな生き物にも当て嵌まらない色をしている。

それはどこかで観たことのある色。

目の前の獣は漆黒に、濃い緑色を一滴垂らしたような暗緑色をしていたのだ。

しかも——

竹が二つ目の奇怪さに気付いた時、それを証明する出来事が発生した。

「うおっ?!」

咄嗟に身を屈めて走っていた勢いのまま前方に転がった。

服が汚れたが気にしている暇はない。

腕と足、長袋を上手く使って勢いを殺し、体勢を立て直す。

中腰で身を起こし、竹が睨み付けたのはたった今自分が転がった地点。

力任せに地を蹴った為、足跡が残っているそこには、自分が追いかけていたものと同じ四足の生き物が凶暴に牙を鳴らしていた。

「なんとまあ……」

追いかけていた方の獣が遠ざかっていく足音を背に、竹は驚嘆とも驚倒とも取れる声を発した。

目の前の獣は観れば観るほど奇妙な生き物だった。

姿かたちは犬というよりも狼に近く、さほど奇妙なものではない。だからこの生き物を奇妙たらしめているのは、やはり色なのだ。

その不思議な暗緑色は毛色だけでなく、尻尾の先から四肢の爪先果ては獣の口の中の牙までもそれ一色で形成されている。

唯一、色の違うところは眼だ。

獣の両目は体色よりも明るい緑色が淡く燐光している。

間違いなく一般的な図鑑に載るような生き物ではない。

いや、それどころかこの暗緑色の狼が生き物であるかすら怪しい。何故なら、竹はこうしてこの生き物と対峙しているにも関わらず、

殆ど気配を感じ取れていなかった。

生きているものには、生命を持つものには必ずあるはずの生の気配。

それがあるにはあるが、とんでもなく稀薄なのだ。

だから竹は、この生き物が突然、右側の林の中から飛び掛ってくるまで全く気がつかなかった。

飛び掛られる直前の足音と、広角に伸びた視界の端に僅かに姿が映ってくれたことで対処できたが、それでも闇に紛れるような体色の生き物の奇襲に対して竹は無様に転げるのが精一杯であった。

二体いると思っていなかったというのもあるが、それでも完全に虚をつかれた形である。

虚をつもりでいたが、その実は逆であつたということか。それにしても前髪が短くてよかった。視野を広く確保できていたのは、それが功を奏したといえなくもないだろう。

既にもう一体の方の足音は遠く聞こえなかった。

竹はとりあえず目の前の一体のみに集中することにした。

眼前の生き物は狼の形をしているが、時折、陽炎のように輪郭が揺らめいている。

形が一定しているようではない。

——闇に同化してしまふのではないか。

そう思わせる色と形をしているが、燐光する瞳と暗緑色の体色がそうさせずにいた。

兎に角、この生き物の出方を窺わなければならない。

とりあえず敵意らしきものは向けられているが、必ずしもそうとは言えない。

単に警戒しているだけかもしれないし、これがこの生き物のデフオルトなのかもしれない。

予断は禁物、というか獣の気持ちなどわからない。

竹は中腰のまま、その狼らしき生き物から視線を逸らさずにいた。いつ襲い掛かれてもいいように右手は長袋に添えている。

獣は唸り声も上げず、竹の姿を睨んでいた。

——そのまま続くかと思われた膠着状態だったが、そう続かなかった。

竹の背にした森の方から、遠吠えのようなものが聞こえると、暗緑色の狼は即座にその声に反応し、飛び出てきたのと同じ場所から森深くへと走り去ったのだ。

それを見送ると竹は、上下とも土で汚れた寝巻きをはたきながら立ち上がる。

後を追うつもりはなかった。

ただでさえ大神の家から離れてしまっているのだ。

これ以上、離れてしまえば護衛として本末転倒である。

それに見回りとしての収穫は充分だ。

竹は来た道をジョギングペースで戻りながら、そう考えていた。

見たこともない生き物が最低でも2体この森にはいて——それが間違いなく神秘の産物であることがわかった。

あの暗緑色の狼からは確かに神性を感じたのだ。

平屋に着いた竹は走るのをやめ、行きとは反対側を迂回して玄関まで歩いた。

こちらは竹の部屋があるので、僅かながら明かりが漏れている。

玄関前の外灯に羽虫が集まりだしていた。

竹は長袋を玄関扉立てかけ、自分の背も預ける。ポケットの中からくしゃつとしたソフトパックを取り出した。

ポケットに入れたまま転げまわった為、ぐしゃぐしゃになっていないか心配だったが、中身は多少よれただけで無事であった。

ほう、と息をつき紫煙を吐き出す。

最後の最後でドタバタした今日の出来事を思い返しながら、バニラの香りのするタバコを味わう。

フィルターが燃えるギリギリまで吸って、昼間に使った瓶に腰を曲げて吸殻を落とす。

そして出たときと同様、静かに玄関扉を開け、鍵をかけて足音を忍ばせ部屋に戻る。

——と、板張りの廊下を歩く途中で、暗がりだった廊下がいきなり明るくなった。

「……何をしているんですか？」

襖を開けた格好のまま、浴衣姿の深翠が不審そうな顔をして言った。

竹が通りかかったのは、ちょうど深翠の部屋の前だった。

竹は深翠の部屋から注がれる明かりに少し眼を細めて答える。

「何をつて……お仕事だけど」

「こんな時間にですか？」

「そうだね——」そう頷くと、ある台詞がひらめいたので続けて言ってみた。

「実は昼寝したのはこの為だったり」

「……そうだったんですか」

深翠は微妙な顔をして相槌を打った。

疑っているけど一応納得は出来る。そんな曖昧然とした表情だった。

「うん。そんな感じ。それで大神さんはこんな時間に何してんの？」
家を出る時は彼女の部屋の電気は消えていたはずである。

帰ってくる時は逆サイドを歩いたからわからないが、いつの間に彼女は起きていたのだろう。

竹の問いかけに深翠は心底嫌そうな顔をして答える。

「……女性にそれを聞きますか？」

完全に失言だった。

あの謎の生き物と対峙してきたばかりだからだろう。
頭の中が調査一色に染まっていたのだ。

「……」

深翠の視線が痛い。

軽蔑すら含んだ氷点下の眼差しだ。

気まずい空気が流れる。

「……えっと、それじゃお休みー」

竹はその空気に耐え切れず逃亡を選択した。最低である。

そのまま小さくなって自分の部屋に戻ろうと歩き出し――

「ちょっと待ってください」

声で回り込まれた。

逃亡は阻止された。

「何でしょうか？」

ぎぎぎ、と首だけで振り返る。

空気を読んで敬語だ。

「お仕事をしてきたのは良いんですけど、天倉君」

深翠は言葉を区切って、竹の頭の方からつま先まで見やると、
「まさかその格好で寝るんですか？」と言って眉を寄せた。

竹の格好はお世辞にも綺麗とはいえない状態だった。

「え……いや、ちゃんと着替えるよ」

竹は思いがけない問いかけに一瞬もったが、すぐに答えを返した。

彼女の視線からは軽蔑の色が薄まっていたのにも、驚きがあった。
深翠は竹の答えに眉を寄せたまま目を細める。

それでも軽蔑の色は隠れている。

「いえ、そうではなくて……まあそれもあるんですが——」

自分の言いたいことが伝わらなくて面倒になったのか、それとも
タイムリミットが迫ってきたのか、おざなりな風に自分の髪の毛を
一房持ち上げて竹に示した。

「——あ」

竹は自分の髪の毛を触る。若干だが土っぽかった。

服だけじゃなく髪の毛も汚れていたようだ。

もしこのまま寝ていたら布団が汚れてしまっていただろう。

「シャワー使ってもいい？」

「どうぞ。なんならお風呂、沸かしなおしましょうか？」

汚れて帰ってきたのは自分のせいだし、この時間だ。そこまで手
間をかけては悪い。

「いや、それはさすがに悪いからいいよ」

竹は深翠の親切心に感謝しながら、丁重に断った。

「そうですか——」

深翠は一つ頷くと言葉を溜めて、

「それじゃあ私は、お手洗いに行かせてもらいます」とわざと感情
を消した口調で言った。

しかも再び氷点下の眼差しである。

とんでもない攻撃方法だった。だがその発言は女性としてどうな

のか。

しかし竹が無自覚だっただけで、彼女は彼女で竹に対して色々と不満が募っていたのだろう。

それゆえに、竹の失言があつたここが勝負どころと観たのだ。

一度、視線から軽蔑の色を抑えたのは畏だったのである。

肉を切らせて骨を断つとはまさにこのことだ。

「——すみませんでした。それじゃお休み！」

竹は即座に頭を下げ、今度こそその場から逃げ出した。

ざあつと頭から温めのシャワーを浴び、新しい服に着替えて部屋に戻った時間は1時前だった。

あのへんてこな狼と追いかけてこをしてから、まだ1時間も経っていない。

竹は1時間前と全く同じ体勢で布団の上に胡坐をかく。

考えることが増えた割りに、まるで真相に近づけた気がしない。

しかし、何も情報が増えないよりはマシだろう。

そういえば深翠はあの生き物のことを知っているのだろうか。

先ほどは聞ける状態じゃなかったから、明日、聞いてみることにしよう。

……彼女の視線に耐えればの話だが。

まあさすがに明日まであの視線のままってことはない——だろう、と思う。

今までの人生で、それなりに女性から人気のあつた竹は、女性からあんな軽蔑の視線を向けられたことがなかった。

だから先ほどの深翠の眼差しは、ちょっとしたトラウマと化していた。

——どうにも彼女とは相性が悪いようだ。

竹はそう結論付けて、相変わらず代わり映えのしない古文書に目を落とし始める。

それから一応、竹は家周辺の警戒は怠らず、内容の入らない意味

不明な文字の羅列と睨めつこを続けた。

深夜3時を過ぎ、まるで解読のしようがないそれに挫折そうになった頃、いよいよやってきた眠気に体を委ねることにした。

しかし、今度は完全に熟睡するようなことはせずに、半分以上意識を覚醒させたままの就寝だった。

その夜は二度と獣の唸り声が聞こえてくることはなかった。

翠の章 15（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

書き貯めすると、ペースダウンするようです。更新遅くてすみませ
ん。

5月3日。8時過ぎ。

祝日であることを考えればまだまだ寝足りないが、護衛の最中である。

起床時間としては、むしろ遅い部類だろう。

とはいえ寝ているようで寝ていない状態だったから、ずっと起きていたといえなくもない。

そんな殆ど起きているのと変わらない、浅すぎる眠りをしたためだろうが夢は観なかった。

布団の上で大きく伸びをして、のろのろ立ち上がる。

そのまま着替えをしようかと思って、自分の格好を見て思い直す。昨晚、寝巻きが汚れたので普段着に着替えて寝ていたのだ。

多少よれてはいるが、このまま一日過ごしても問題ない格好だろう。そもそも替えの服は、初日に着てきたシャツを含めて3枚。あとは下着と靴下、それと寝巻きの上下に羽織ってきたカーディガンだけだった。パンツは穿きまわすつもりなので1枚しかない。

これでも竹の荷物にしては多い部類だったが、滞在期間どころかどこへ行くのかすらわからなかったので仕方ない。

とはいえ一応の滞在期間が判明し、洗濯も出来ることがわかった今となつてはこれが妥当な量だったといえなくもない。

ちなみに洗濯も深翠がやってくれている。

さすがにそれを言い出された時は遠慮して、自分でやると言った。服はともかく下着まで洗うのは嫌だろうと思つたからだ。

だが意外にも深翠はその辺りのことに抵抗がないらしく、首を傾げながら『わざわざ二度手間にする必要はない』なんて主張するので結局、お言葉に甘えることにしたのだ。

洗面所の洗濯籠を視界の端に歯を磨きながら、竹はそんな洗濯に纏わる2日前のやり取りを思い出していた。

洗濯籠には昨日入れておいた竹の寝巻きはない。

既に深翠が洗濯を済ませた為だろう。

彼女が6時前にはあれこれ家事を始めた音を竹は眠りながら聞いていた。

顔を洗い終え、洗面所からそのまま居間へ向かった。

「おはようございます」

「あ、おはよ」

竹の顔を見るとすぐに挨拶をしてきた深翠に返礼した。

深翠がいたって普通の状態だったので、心の中でほっと息をつく。どうやら昨晚の件は引きずっていないらしい。

彼女はセンターテーブルに朝食を並べている最中だった。

これはナイスタイミング、というわけではなく、正確には料理の仕度が済むのを見計らって竹が起きてきたという話である。

ただそれを知らない深翠は、

「ちょうど良かったです」

と当たり前感想を言った。

そうだね、と相槌を打って竹はテーブルの前に胡坐をかいて座った。

まだ運ぶものがあるらしく、深翠は何度かテーブルと台所を往復する。

昨日は割烹着だったのに、何故か今日はたすき掛けスタイルで家事に勤しんでいる深翠を竹は眺めていた。

そして、一度僅かに腰を浮かし——やめる。

竹は腰を下ろしなおした。

自分から料理を担当すると言った者の手伝いをするほど、竹は親切でも働き者でもない。
やはり怠け者なのだ。

それでも手伝えと言われればやっただろうが、深翠は竹に手伝わせ

るつもりはなさそうである。

だから一度、親切心という名の下心により浮かんだ腰を下ろした。これは竹の想像だが、彼女は自分でやると言った以上、最後まで一人でやり遂げるつもりなのだろう。

なんとなくそんな印象がある。

もしその通りだとしたら中々好感が持てる考え方だが、それ以上に馬鹿馬鹿しいと思う。

助けがいるなら、さっさと手を伸ばして助けてもらえばいいのだから。

竹は今の自分がまさしく彼女と同じく、最後まで自分一人だけでやり遂げようとしていることを棚上げして、あるいはまるで気付かずにそんなことを考えていた。

配膳が終わった深翠が竹の前に座る。たすき掛けスタイルが終了していた。

食事中は殆ど会話がなかった。

本来、お互いに口数の多いほうではない。

どちらかといえば竹の方が話す方だが、竹の口数が多くなるのは仲間内限定でのことだ。

だからむしろ今までがよく話していた方なのである。

それは竹が深翠との間に流れる微妙な空気に耐え切れなかったかなのだが、それが今朝の食事にはなかった。

静かな食事。それが苦ではなくなっていた。

お互いがお互いをどう思っているかはともかく、二晩の間、一つ屋根の下で生活することによってやく二人とも、本来の意味において平時の態度が取れるようになったのだ。いつてしまえば慣れたのである。

——割烹着かたすき掛けか。

どちらのスタイルが好みかを朝っぱらから真剣に考えているうちに食事は終わった。

「今日はどうするんですか？」

食器の片づけを終えた深翠が、食後のお茶を飲みながら問いかけた。

「どうするって——ああ、今日の予定だ？」

「はい。昨日は買い物に行きましたけど、今日はどうしますか？」

「もう食べ物、なくなりそうなの？」

言って、温かい茶を飲む。

昨日購入した量と食事の量を比較すると、まだまだ余裕はありそうだが彼女の料理のクオリティを考えるとどうなのだろう。

「いいえ、少なくとも今日の分くらいは余裕であります。でも明日まで考えると少し微妙です。まあ品目が少なくて良いのであれば大丈夫ですね。一応、滞在中は保つように買いましたから」

「ふうん。じゃあどうしよう」

竹としては料理の品目が少なくなるのは別に構わなかった。

それに護衛としても買い物に行つて外を出歩くよりは、家の中にいた方がやりやすい。

だがそれは竹の都合である。

だから問題は——

「大神さんはどうしたい？」

彼女がどうしたいのかだった。

「は？ 私ですか？」

意見を求められたのが予想外だったのか、深翠は珍しく間の抜けた顔をした。

「質問したのは私なんですけど？」

「まあそうなんだけど。でも依頼人は君で、オレは護衛。だからオレの意見よりも大神さんの意見を優先させるべきでしょ」

「……」

竹の正論に深翠は何か思案するように黙り込んだ。

「今日、何かやりたいことある？ 買い物に限定せず」

竹はそう付け加える。

よっぽどのことでない限り、竹は彼女が出す予定に従うつもりだった。

深翠はお茶を一口飲んで唇を湿らせて口を開いた。

「特にありません」

「ありや。何もないの？」

「はい。特に」

「そうなんだ。でもそれだと一家の中になるけど暇じゃねえの？」別にどこかに遊びに行きたいとかそういう答えを期待したわけはなかったが、特にないという答えには困った。

これでは今日の予定が真ッ白——所謂『暇』になってしまう。

しかし、深翠はそれを否定する。

「いえ暇ではないです。家事以外にもやることはありますから」

「やること？」

テレビどころかラジオもない、この道楽の欠片もない樹海の家に、何か暇を潰せるものがあるのだろうか。

あるとは思えな——否、ここは深翠の実家だ。

竹には想像もつかない何かがあるのかもしれない。

それに予定がないことが暇だというのなら、竹が謎の究明に心血を注いだり、昼寝をしたりしていた時間は彼女は一人だったわけだ。その空白の時間を過ごすだけの方法を持っていたと考えることが出来る。

「やることって何があんの？」

必然の流れというより、半分以上が興味本位の問いかけだった。

深翠は竹の問いかけに一度考えるように口を嚙むと、言葉を選びながら言う。

「そうですね……例えば勉強したり、外の掃除ついでにそのまま少し散歩に行ったり。あとは両親の荷物を整理してみたりですか。それなりに退屈はしないです。ああ、それと天倉君みたいにお昼寝することはないですね」

そう言葉の最後に毒を吐いた。

「……」竹の眉が微かにぴくりと揺れた。

いつの間にか深翠は、一日前まではぼそりと呟いていた部分を隠さなくなっていた。

とはいえ悪い傾向ではないだろう。

とりあえず竹は自分への非難に対する反省は後回し——忘れることにして、気になったところを聞いていくことにした。

「掃除のついでに散歩って、もしかして昨日行った？ それなら――」

「天倉君、昼寝してましたから」

こちらに確認を取らないで、勝手に遠くに行かれては困る。

そう護衛として咎めようとした竹の言葉を遮るように、深翠が声を挟んでいた。

気のせいかもしれないが、平静な表情の奥にどことなく喜色しているような気配を感じた。

「――ぬ」

咎めるつもりが逆に咎められてしまった。

今の返され方をしてしまっただけはもう何もいえない。

なんという失態だったのだろう。

竹は後悔が膨らんでいくのを何とか抑え、話しに戻った。

「えっと……とりあえず、もし次、散歩に行きたいって時があったら絶対オレに言っただけ」

「わかりました」

深翠は軽く頷く。

表情はあくまで平静そのものだったが、今度はどこか勝ち誇ったような気配を感じた。

これまでよりも表情に出ていない分、どことなくその感情は本気っぽくある。

竹は気を取り直すように軽く咳払いをして、話を続ける。

「それとさ、両親の荷物整理って言ってたけど、それオレも手伝っていい？ 何かわかるかもしれない――」

「嫌です」

「——から、ら？」

竹の言葉はまたも途中で遮られた。

「何故に？」

「嫌、というより必要ないと言った方が良かったですね。両親が残した物に手がかりはありません」

「いや、断言されても……一応、確認だけはしておきたいんだけど」
深翠は素人であり竹はプロである。

彼女が何かを見落としている、という可能性は大いにあるのだ。

そのことを竹は出来るだけオブラートに包んで言った。

聡明な深翠である。竹の言いたいことは十分に伝わっただろうが、しかし彼女は首を縦に振らずに横に振った。

「本当に両親の荷物には手がかりはないんです」

「そうか」

竹はあっさり引き下がった。

仕事のことに關しては、やるべきことはやる人物だ。

これは知る人にとっては、今の竹の行動は意外だった。

しかし、それは同時に竹が既にやるべきことをやり終えた、あるいは感じ取ったということの証明でもあった。

——両親の荷物には確実に何かがある。

竹は深翠の目を盗んで、彼女の両親の荷物を探る計画を頭の中で組み立てていった。

「すみません」

深翠が頭を下げる。

「いや、いいよ。しょうがない、しょうがない」

竹はそう言っただけで黙ってみせた。

間者のようになってしまうている頭の中とのギャップに罪悪感が少し浮かんだが、すぐに凍結させる。

「それじゃあ——」

深翠が少し声を張った。

「今日の予定はどうしますか？」

翠の章 16（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

更新遅くてすみません。少しずつ進んでいきますので、見守っていただきます。

＊

——結果、本日の予定は特に決まらなかった。

つまり到着やら買い物やらの時間を除けば、この二日間と殆ど変わらない生活になるとうことだ。

しかし、竹は昼間のうちは部屋に戻らなかった。

部屋に戻って古文書の解読に努める、というのがこの二日間で竹のお決まりのパターンだったが、それをしなかった。

それには昨日のように昼寝してしまつては不味いからという理由や、解読出来そうにない古文書に匙を投げた、なんて理由もあったが、なんといつても深翠から極力眼を離したくなかった。

もう5月3日。深翠の言うリミットを考えれば折り返し地点になる。

昨晚の狼らしき生き物の件もある。

あれが仕事に関わっているのか断定は出来ないが、それでもそろそろ何らかのアクションが起きてもいい頃だ。

深翠の両親の荷物を探るのも含めて、彼女の傍にいない必要があった。

だがしかし、その竹の思惑の半分は外れることになる。

竹は収穫という収穫もなく日没を迎えてしまっていた。

新たな情報といえば、深翠が昨晚の奇妙な生物について何も知らないということだけだ。

『そういえばさ、この辺に狼っている？』

『日本に野生の狼はいませんよ？』

『……じゃあ色が黒くて狼っぽい生き物は？』

『天倉君って……実は頭悪いんですか？ そんなけつたいな生き物、

いるわけがないじゃないですか」

『……ですよねー』

夕食後、外でタバコを吸いながら、そのやり取りを思い返している
と、深翠が玄関から出てきて風呂が沸いたことを告げた。

竹は深翠に先に入るように促した。

結局、日中は深翠の両親の荷物探索をする隙はなかったから、ここ
がある意味唯一のチャンスであった。

しかし、深翠は竹が先に入るようにといって譲らない。

竹はいつもなら自分だろうが深翠だろうが、どちらが先でも構わ
なかったのだが、これまで全部自分が先に入っていたので、そろそ
ろ気が引ける頃だった。

「ここに着てからいつも先に入っちゃってたから、今日は大神さん
が先で」

「いえ、天倉君はお客さんですから、そんなことは気にせず先へど
うぞ」

「いやいや」

「いえいえ」

「……」

「……」

二人とも変に固いところがあり、埒があきそうになかった。

竹は吸殻を空き瓶に落とすと、突然歩き出した。

「どこへ？」

「少し散歩してくるよ。その辺をぐるっと回るだけだから、時間か
からないと思うけど、もし遅かったら先に入っちゃって」

竹はこうやって深翠が先に入る口実を作ったつもりだったのだが、
深翠はその思惑に反した行動をとる。

「私も行きます」

「……ああ、そう」

こうして二人は夜の散歩をするようになった。

散発的に会話を交わしながら、木々の隙間から僅かに降り注ぐ月明

かりが照らす暗い森の中を二人で歩く。

平たい家屋から乏しい光が漏れている。

その光が月明かりとともにかすかに周辺を照らしているのだが、それだけでは足元さえ見えないほどの暗さだった。

だが竹には、この程度の暗さは不都合はない。

それは横にいる深翠も同じらしく、普通であれば気が付かないような道の窪みや木の根などを何の迷いもなしに避けている。

月読は夜の神だというから、例えば血が薄れていてもその因子は彼女に確かに受け継がれているということか、もしくは単にこちら周辺の山歩きに慣れているだけかもしれない。

ぐるりとその辺を一回りし、そろそろ戻ろうとした時だった。

「後ろに下って」

竹は静かに囁いた。

竹と同じく夜目の利く深翠も、事態を察したらしく微かに頷いた。

竹はすり足で二、三步闇の中を前進、深翠は逆に二、三步後退した。

眼を凝らすと、人の輪郭がぼんやりと闇に滲んだように僅かに浮かび上がる。

その数はどうやら三人。全てが男らしい。

そして、男たちはそれぞれが手に同形状のナイフを持っているようにみえた。

月明かりに鋭い刃が反射した。

次の瞬間、竹は体を仰け反らせた。

何の言葉のやり取りもなく、闇を裂いて男の一人が飛び掛ってきたのだ。

男のナイフ捌きは想像以上に巧みで、彼が素人でないことが判る。他の二人もこれ以下ということはないだろう。

まあこんな夜中の人気のない山奥に現れた時点で、そんな甘い考えはさすがに捨てていたが。

必中のつもりだったのだろう。初撃がかわされると男は息を飲む。

だが、それでも男は冷静そのものだった。

身を翻して背後に飛び下がり、竹との距離を取った。

逃亡の為ではなく追撃の為に。

間髪入れず左右から第二、第三の男がナイフを振るう。

最高のタイミングでの連携攻撃。竹の首筋めがけて二振りの刃が襲う。

が、それも空振りに終わる。

竹は咄嗟に体を沈め右の男の足下に転がり、相手の脚に思い切り足払いをかけて自分は素早く立ち上がる。

脚を付け根から刈り取るほどの蹴りを受けて体勢を崩した男は、肩先から石畳に激突した。辛うじて受身を取ったらしく、顔面はぶつけなかったようだ。

だがそのせいでナイフが手を離れ石畳に転がった。竹は無防備に倒れた男の腹に蹴りをぶちこむ。

相手の鍛えられた腹筋に足先が半分ほど埋まった。

惨めなうめき声と血の混じった胃液を盛大に洩らしたきり、男はもう身動きもしない。

あまりの激痛に失神したらしい。

竹は男のその姿を確認する間もなく、次の男に意識を移していた。石畳に転がっていたナイフを拾いながら次の男に駆け寄る。

男がナイフで応戦の構えをみせやいなや、竹はそれを嘲笑うように拾ったナイフを手放した。

ただし手首のスナップを最大限に利かせた最小動作で。

前方に投擲されたナイフは、斬撃戦を想定した男の不意を討つ。

しかし男もかなりのもので、至近距離から放たれたナイフの弾丸を咄嗟に腕で防御する。

額に直撃するはずだったナイフは男の図太い腕を貫いたところで遮られた。

だがそこで勝負はついた。

迫り来る死を辛うじて遮った腕は、同時に男の視界も一瞬遮ってし

まった。

刹那、竹の姿が見えなくなつて左の男は自分の悪手に気付くが、もう遅い。

男が視界を確保した時に見えたのは、側頭部めがけて遠慮なしに上段蹴りを放つ竹の姿。

足の甲に確かな衝撃と重量が重なる。

竹はそのまま右足を振りぬいた。

顎から側頭部へジャストミートで蹴り抜かれて、80キロ超はあるうかという男が吹き飛んだ。

男は二度、三度鈍い音を立てて、石畳の上をバウンドしていった。完全に意識を断ち切られた男は、そのまま無様に四肢を投げ出している。

竹は後退していた最初に攻撃を仕掛けてきた男から目を逸らさずに、力を失った男の手から新たなナイフを奪うと、後方に跳躍し深翠を庇うようにナイフを構える。

数秒に満ため攻防。

後ろで深翠が息を飲む音が聞こえるが、そちらをフォローしている余裕はない。

前方の男は慎重な体勢でじりじり距離を詰めている。

この男が一番の強敵であるのは間違いないかった。

石畳にだらしなく転がっている二人は、せいぜい二流と一流半程度の実力というところ。

それと比べて眼前の男は紛れもなく一流の実力者だと、その気配が、立ち姿が云っていた。

筋骨隆々といった感じの先の二人に比べれば痩せていて小柄だが、顔から手足首の先まで包まれた漆黒のボディースーツに浮かぶ無駄のない筋肉は、鍛え抜かれた高密度の鋼鉄を思わせる。

——この状況は事態が進展したということだろうか。

そう自問してみるが、答えは出ない。

どこるか男は竹に親切に思考をさせる暇は許してくれないらしい。

緩から急へ。飛ぶような速度で黒いボディースーツが急接近してくる。

ナイフの先端が、最短距離で喉笛を貫こうと迫ってきたのを、竹は手に持ったナイフで跳ね上げる。

この樹海に似つかわしくない、金属音が響く。

竹が奪ったナイフは刃渡りが二十センチ以上あり、ナイフというよりは殆ど短剣といった方がいい。

だがそれは相手も同じ。

この場合、残念ながら長尺の利点は得られない。

相手の短剣を払った竹は、そのまま上段から短剣を斜めに振り下ろす。

何かを切った感触はあったが決定打にはならず、男の顔を覆うボディースーツの頬部分を僅かに裂いただけだった。

これまで開いていたのは目線だけだったので判断に迷っていたが、どうやら東洋系の人種らしいことがそれでわかった。

直後に反撃があった。

この東洋系の男は、竹の攻撃を完全に見切った上で、最小限の回避動作しかしなかったのだ。

その見切りを上回って、竹は男の防護服を切り裂いたわけだが、無論、それでは男は止まらない。

竹が跳ね上げた短剣は頭上で弧を描き、凄まじいスピードで竹の肩先へ迫ってくる。

先ほどの竹と全く同じ攻撃動作。

竹は袈裟切りに振り下ろされる鋭利な刃から逃れよう身を翻す。

しかし、その刃全てをかわすことはできなかった。

左肩に鋭い痛みが走る。同時にじわりと生温かいものが、にじみ出てくる感覚があった。

短剣の切っ先はシャツの生地を裂き、肩口の肉を斜めに裂いていた。

左肩を小さく回してみる。

傷はさほど深くないようで、動かすのに支障はないようだった。

男は2メートル強の距離をとって慎重に竹の様子を伺っている。

男が何を考えているかわからないが、その様子からは油断や慢心は微塵も感じられない。

殺すか殺されるか。

この男は竹をそのステージへ立たせるほどの相手であった。

風のように死を運ぶ死神の如き暗殺者を前に、竹は血液が逆流するような高揚を覚えた。

翠の章 17（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

更新遅くてすみません。この辺りの進み具合でいつも筆の進みが遅くなるようです。

闇の中にせわしなく、二つの息遣いが木霊する。

刃と刃が激突する金属音が絶え間なく響き渡る。

僅かなミスが死に直結する攻防を、両者は繰り広げている。

刃先まで神経が通っているようなナイフ捌き。

右に左に宙を舞う刃は、まるで男の体の一部のようにだった。

重く、素早い攻撃と防御の応酬。

華麗にして苛烈なステップワークによる移動と回避。

それに引けを取らない竹も流石なものだったが、それでも戦況は思わしくない。

それは単純に技量、実力の話ではなく、竹が背負っているハンデイによるもの。

攻防の最中、一瞬の途切れもなく深翠を護り続けながら戦わなければいけない竹と、攻撃のみに集中していれば良い相手とでは、圧倒的に不利は竹にある。

もし意識を相手のみに集中すれば勝利することは難しくない。

だがその隙をこの男は逃しはしないだろう。

これほどのナイフ使いだ。

ナイフの投擲技術を修めていないわけがない。

竹が男のみに専念すればたちまち男は深翠へ向けて、刃の弾丸を放つだろう。

それ専門でない竹でも巨漢の腕を貫く重さを持った短剣だ。

頭部か胸か、狙うならどちらかだろうが、そのどちらであろうと正確に貫通させることはわけないだろう。

その後、男は竹によって命を落とすだろうが、例え自身の命と引き換えにしても目的を達成する。

そういうプロ精神が男に根付いているのは、刃を打ち合わせていればわかる。

ゆえに竹はハンディを背負い続けたまま戦い続けなければならぬ。

頭数で言えば2対1だが、その実は0、5対1。

絶対的に護らなければいけない戦いとは、そのくらいのやりにくさ、ハンディがある。

死を運ぶ一閃が大気を裂いて鼻先を掠めていく。

竹は顔を僅かに後ろに反らせて攻撃をかわした。額から飛び散った汗が刃に寸断される。

初めに肩を裂かれているが、竹の見切り、回避の技術は決して低いものではない。

むしろかなり高位のところにあるものだ。

それが体が温まって――否、心が冷えきったことで完全に発揮されていた。

ギリギリの、紙一重の回避。

今が、危険を冒して手に入れたチャンスだった。

脚に溜めていた力を爆発させて石畳を蹴り、ナイフを降りきった男の鳩尾に拳を叩き込んだ。

男は苦痛の呻きをもらし、体を二つ折りにして前のめりに倒れる。

竹は男の右手を渾身の力で蹴り飛ばす。

短剣が手を離れ、石畳に金属質の音をたてて転がっていく。

その行方を眼で追わず、男の上に押し掛かり両肩を即座に外す。

それだけでは不十分だと判断し、片手で男の頭を乱暴に押さえつけたまま背中の上でくると身体の向きを変え、両足のアキレス腱を短剣で深々と断ち切った。

新鮮な血液がどくどくと石畳を赤く染め始める。

足首を切り落としてしまっても良かったが、断ち切ってしまうよりもくつついていた方がこれからの事を考えると良いだろうと思っただからやめておいた。

なくなってしまうえば腹を括って行動しようとするかもしれないが、まだくつついていれば自の身体に未練を残し、行動を制限できるだ

ろっ。

とはいえそれもこの超一流といって差し支えない男には、あまり効果がないかもしれない。

そう思えるほどの強敵だった。

もしかするとここ1年程で最強の手練かもしれない。

竹は息を整えながら、一度深翠の方を向いた。

彼女は腰を抜かしたように、ぺたんと石畳の上に蹲っているが、特に外傷はなさそうだ。

三人のうち誰も銃器などの遠距離用の武器を持っていなかったのは、ラッキーだったとしかいえない。

それに安堵の息をつき、再び男の背の上でくるりと反転させ、短剣の刃を男の首筋に押し当てる。

残りの二人は相変わらず石畳の上で伸びたままだ。

「――殺せ」

男は一度大きく息を吸い込むと、それを吐き出すように静かに呟いた。

癖のない日本語だった。

はつきりとわからないが恐らく日本人だろう。

年齢もいまいち判別がつかないが、竹より年下ということはなさそうだった。

だがそんなことはどうでもいい。

両肩を外され、アキレス腱を断ち切られ、ボディブロー食らった腹はアバラの二、三本は折れているだろう。

そして今、首筋には冷えた刃を押し付けられている。

竹が力を込めれば男の頸動脈からは、致命的な量の血が流れ出るのは間違いない。

それを承知の上で、この冷静さ。

完璧に、骨の髄まで男はプロなのだ。

男は覆らない敗北を察している。抵抗する気配は微塵もない。

安直に自らで命を絶たないのは勝者への誉れと自らの誇りの為だ

ろう。

竹は久しくお目にかからなかった本物に息を飲む。

「お前は誰だ。目的は。誰に頼まれた。言え」

この男には無意味な問いかけだろうと承知しつつも、竹は簡潔に言った。

本当なら『喋らなければ殺す』という脅し文句が後に続くのだが、殺せといっている男に殺すと脅迫しても無駄だ。

だから竹は別の言葉を続けた。

「別にオレはお前がここで死のうが構わない。オレには尋問する相手があと二人残ってるしな。ただ、同じような作業を繰り返すのが面倒だから聞いているだけだ。もし答えるのなら両足の止血くらいはしてやる」

竹は首筋に押し当てた刃に僅かに力を込めた。

短剣はボディスーツの布を裂き、そのまま首の薄皮を軽く裂いた。ぷつりと赤い血が浮び出す。

竹の声色は、普段の日常会話をするような平坦さと落ち着きがあった。

尋問という状況でも一切の変化がない。

日常と非日常が表裏一体というほどに切り離されておらず、延長線上というほど遠くもない。

当たり前同居しているのだ。

男は竹の言葉に一瞬、迷ったように微かに身動きする。

断ち切られた両足の傷口からは絶えず赤い血が流れ続けている。このまま放っておけば、死に到るのは間違いないだろう。

もう既に男の頭の中は朦朧なはずだ。

だがその刹那の逡巡の末に出てきた言葉は、

「――殺せ」

先ほどと全く同じ静かな呟きだった。

竹はその呟きを聞き届け、無言で短剣の柄に力を込めた。

ずぶりと肉にめり込んだ刃は首の骨まで達したところで欠けたよ

うだったが、それを意に介さずに力任せに刀身を進める。

刃は刃こぼれを起こしながら襲撃者の首を刈り取った。

胴体から離れた首をそうつと地面に置く。

丁寧に扱ったのはこの男に対するせめてもの敬意の現れだった。

立ち上がり深翠の方に歩み寄る。

彼女は目の前で起きた一連の凶行に恐怖に顔を歪めていた。

耐え難い吐き気を抑えるためだろう。口元を手で押さえ、目尻には涙が滲んでいる。

それでも泣き出したり喚いたりしてはいないのは、たいしたものだった。

「家に戻って大人しくしてて」

彼女を落ち着けるように出来るだけ優しく声を掛けてやる。

深翠は微かに頷くとのそのそと立ち上がるうとするが、腰が抜けているらしく上手く立ち上がれない。

その姿に悪戯心が刺激され、よからぬ考えがふつふつと込み上げた。ここでトラウマの払拭をさせてもらっても罰は当たらないだろう。妙な気配を察した深翠が何事かと身構えるが、まだ身体は恐怖で硬直しているらしくどうにも身動きが出来ない。

竹はそんな深翠の姿に外からでは判別されない程度に口角を持ち上げた。

刃こぼれをしたナイフを捨て、返り血で汚れた手をズボンにこすり付けて拭きながら未だに立ち上がれない深翠の背後に回る。

この次に起こる反応の未知にわくわくしながら、それでは——と心の中で気合を込める。

「な——なにを——？」

されるのか、そんな不安を浮かべこちらを見やる深翠の表情を堪能しながら、竹は両の手を深翠の脇下に入れた。

「ひゃんっ?!」

想像を絶する可愛い声だった。

竹はその衝撃に妙な幸福を感じながら、そのまま両手で深翠の身

体を持ち上げた。

強引に持ち上げられ一瞬の浮遊感を味わった深翠は、慌てながら地面に両足をつける。

少し前まで恐怖に固まっていた彼女は、それをさっぱり忘れてしまったようにすっかりと地に足を付け、振り向きざまに困惑と抗議の声をあげた。

「い、いきなり何をするんですか!？」

「何って立てなさそうだったから手を貸しただけだけど？ 腰抜かしてみたいだし」

「……そ、それは……そうですね」

深翠もそこは否定のしようがなかったらしく、一度言葉に詰まる。しかし、やはり納得がいかないのかすぐに烈火のごとく抗議の言葉を重ねた。

「手を貸すにも他に方法はいくらでもあったでしょう?! ありましたよね?! ど、どど、どうしてわざわざあんなセクハラ紛いな起こし方をっ」

「セクハラ紛いって。それは言いがかりじゃない?」

そう言って、あくまでも親切での行動だったという構えをみせてやる。

まあ彼女がどんなリアクションをするのか見たくて、あえてあの起こし方をチョイスしたのだが、真実を伝える気は毛頭なかった。

怒りなのか恥じらいなのか、深翠は首筋まで紅潮させていた。

——大満足の反応。とても楽しかった。

だがここで雲行きが怪しくなる。

「……む」

俯いた深翠が何か呟いた。

「む?」

「……むむむ、胸に触られました!」

「——は?」

一瞬、時が凍った気がした。

気が遠くなる思い。電車で痴漢に間違われる気分はこんな感じだろうか。

そんな逃避からすぐに意識を戻し、潔白を叫ぶ。

頭の中の会場のお客様100名のうち、80名さまが『それは冤罪だ』と叫んでいた。

「いやいや、まさか……触ってません、よ?」

そんな幸福な感覚がなかったことを思い返して言った。しかし、いつの間にか両手はホールドアップしていた。なぜだ。

「嘘ですっ! 触られました!」

自称被害者は被害を訴える。

「一瞬、ここに指先が触れていました!」

深翠が示したのは僅かに胸よりの脇の下。

「いや、そこは胸じゃないだろ」

竹はすぐに深翠の詐称を訂正した。

だが彼女は聞く耳持たない。

「不意打ちだったので避ける事も出来ず……」

誰にアピールしているのか、深翠は片手で口元を覆いすすり泣きの素振りをみせる。

完全に被害者になりきっていた。

——この女……めんどくせえ! ……いや、面白いのか?

竹の中でその二つの感情が入り混じる。

その感情は苛酷と表現できる命のやり取りをした直後の高揚感を増幅させる。

「……そこは胸じゃねえ! 胸はこの辺りからだろ!」

上がり上がったテンションに任せて竹は、びしっと自分の考える胸のラインを指差した。

「あ」

「あ」

二人の声がハモる。初めての共同作業。

「——つつつ?!」

その記念品はスナップの利いた平手打ちだった。
ジャストミート。どちらの意味でも。

「いやあああああああああつー!!」

劈くような悲鳴を上げながら深翠は平屋の方向へ全速力で駆けていった。

それを呆然と見送りながら、頭の中の会場のお客様の100名さま全員が『あれは事故だった』と言い逃れをしていた。

竹はどうしたものかと思案しながらも、とりあえず深翠を家に帰すという当初の目的は達成できたので一先ず良しとした。

どう考えても良しとは思えない状況で、あとで後悔が襲ってくるのも目に見えていたが、今のところは開き直らなければ仕方ない。

竹は渋い面に僅かに諦めの笑みを浮かべ、思考を、意識を失い転がっている二人の男へと向けた。

翠の章 18（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

元々、前話とセットで一話だったのですが、少し長くなったので分割しました。

次話は血も涙もない拷問シーンになる予定です。出来るだけマイルドにしますが、これまでの作中で最も凄惨な話になりそうです。

巨木が立ち並ぶ周辺の木々の中では、細いと形容できる太さの木に二人の巨体が縛り付けられている。

細いといっても他の木と対比してのことなので、それなりに立派なものだ。

まだ意識のない男二人は一本の木にそれぞれ反対側に、爪先立ちになるように括りつけられていた。

南北になるのか東西になるのか、どんな方角かはわからないが、男たちはこれで互いの顔を確認できないという寸法である。

ロープの代用として使ったのは、男たちが着ていたボディスーツを脱がして作ったものだ。

暗い夜の森の中に丸裸同然の筋肉達磨が二人縛り付けられているというのは、自分でやっておいてなんだが見ていて楽しい光景ではない。

薬を使って肥大した筋肉達磨の片割れが苦しげなうめき声を洩らした。

そろそろ目が覚めるらしい。

——さて、それでは尋問を始めよう。

先に目覚めたのは中東系の男の方だった。先の戦闘で竹が二流と判断した方だ。

こちらが先に目覚めてくれるとは都合がよかった。

中東系の男は目覚めると竹の姿を確認するや短く悲鳴を洩らす。

まだそう歳を取っていない。二十代半ばくらいにみえる。

この男と同じく縛り付けた米英系の男は、どう見ても二十代はとうに過ぎている中年だ。

既に始末した男の顔は彼に敬意を表して見ないでおいだが、実力からいってもこの男が一番年下なのは間違いない。

男は悲鳴を洩らしたあと盛大に咳き込んだ。

竹の蹴りを受けた部分が傷んだのだろう。

男の実力を鑑みてそれなりに加減したつもりだったが、それでもこの短時間で回復できるようなものではない。

竹は男が咳き込むのを無表情で見届けた。

その竹の姿に軽く身震いし、男は意識を完全に覚醒させた。

竹はそれを確認すると、何も言わずに一振りの短剣を取り出す。

これは先に始末した男の得物だった短剣だ。

竹には同じにしか見えない三人の短剣だったが、どうやら男には違いがわかるらしい。

竹が取り出した短剣を見て眼を剥く。

その反応に内心で満足しながら、竹は無言のまま男の顔を短剣で切りつけた。

次の瞬間、ぽとりと男の左耳が根元から落ちた。

男が再び悲鳴を上げそうになったところで竹は短剣の切っ先を男の鼻先に突き当て、低い声で語りかけた。

「わかつている通り、この短剣を持っていた男は殺した。助けはない。まずそれを頭に叩き込め。その上でオレが知りたいことは二つ。お前たちの目的と誰に頼まれたかだ。喋るなら領け。それ以外の反応なら殺す」

自分たちの中で一番の手練を殺害したばかりか、いきなり片耳を斬り落としてくるような狂人。

年齢の上下は関係ない。

一連の流れによって男の中で竹はそういう人物として形成されているだろう。

竹の言葉に男は無我夢中で頷いた。

血走った眼は、醜い生への執着に溢れている。

この短剣の持ち主だった男の潔さとは雲泥の差だ。

そんな反応を見せた男に竹は断定的な口調で言う。

「嘘だな」

「う……ウソじゃ——」

初めて男が声を発した。

片言の日本語。

嘘じゃないと言いたかったのだろう。

だが竹はその言葉を最後まで言わせる前に、残っていた男の右耳をスライスした。

勿論、竹は男が本心から頷いたことはわかっていた。

だがこの小狡そうな男は、自分の生命が保証されればすぐさま真実を隠すだろう。

そういう半端なプロ根性と、卑しい狡賢さが男の瞳の奥でざらついていたのだ。

まだ屈服してないうちは、信用するに足りない。

だから竹は男の言葉を否定した。

片耳どころか両耳を失ったショックに男は自失した後、自身の身に起きている事態に恐怖し激しく暴れまわる。

しかし受けているダメージに加え、嚴重に縛り付けられているため、殆ど身動きはできない。

「生きたければ少し黙っている。さもなくば次は左眼とお別れだ」

竹は男の左眼球すれすれに刃を突きつけ短く冷酷に囁いた。

激しく暴れまわっていた男はそれで再び黙った。

理性を上回る恐怖に、目尻が裂けそうなほど両目が見開かれている。もう少しで眼球が飛び出すのではないか。

口の端には血の混じった涎がだらしなく漏れている。

竹は静かになった男の前から移動する。

半円を描いてもう一人の男の前へ。

「さて、狸寝入りはやめろ。そのまま続けるのなら後ろの奴と同じく耳なしになってもらう」

あれだけ騒ぎたてられて眠り続けるほど鈍感なわけがないだろう。

「——気付いていたか」

竹の言葉に西洋系の男は英語で応じた。

日本語を理解していながら英語を返すのは、男の心が屈していない

証拠である。

だがこの状況でその態度を取るのには、よっぽどの精神力の持ち主か、ただの馬鹿だろう。

恐らく後者。

竹は知性の欠片も見られない赤ら顔の男に対してそう判断した。

そしてそれは竹の考えていた通りのものだった。

ただの馬鹿の方がこの場合、好都合だ。

「お前が最初から起きてるのは気付いてたよ。じゃあ聞こう。お前たちの目的と誰に頼まれたか、それを教えてもらう」

竹は相手の態度に合わせるように英語で話しかけた。

久しぶりに使うものだけに正確に使えているかどうか、内心で不安はあったが、それは表には微塵も出さない。

「はっ、言うわけがないね。おれたちはプロだ。それよりもこの腕の治療をしてくれないか」

男はそう返した。先ほどのハイキックにより顎が砕けているのか、言葉が聞き取りにくい。

だがその状態でこれだけ虚勢を張れるのだから、確かにプロなのだろう。

一流半と判断したが、この男は一流だ。

——馬鹿の。

「なるほど」

竹は静かに相槌を打ち、男の頭上の木の幹に手を伸ばした。

何事かと男は頭上を見上げる。

竹の手には先ほどから持っていた短剣とは別の短剣が握られている。た。

襲撃者二人を縛るとき、この男の腕から抜き取っておいたものだ。竹の両手にはそれぞれ短剣が握られている。

竹は片方の、最初に使っていた方のナイフを柔らかい土の上に突き立てた。

そして、残った方の短剣で男の下着を切り裂いて剥ぎ取った。

「おいおい、そういう趣味なのか？ おれにはそんな趣味はないぜ」
男の揶揄する声を竹は無視する。

無論、竹にそんな趣味はない。

見知らぬ男の裸体など好き好んで見ようなどとは思わない。

竹は剥ぎ取った下着を無理やり、男の口に詰め込んだ。

そしてむき出しにされた男の睾丸に迷わず刃を突き立てた。

声にならない絶叫が男の口の中で響く。

その声に後ろの男が身を硬くする気配が窺えた。

竹は何をしたのか後ろの男に説明するようにわざと声を大きめに話す。

「何だ、だらしない。お前はプロなんだろ？ タマを片方切り離されたくらいで、そんな情けない声をあげるなよ」

激痛と睾丸を切り取られた衝撃に男の全身が激しく痙攣していた。耐え難い緊張の為、体中に瘤のように筋肉が浮き出し、額や首筋には血管が同様に浮き出している。

狂ったように頭部を振るい、何度となく木の幹に打ち付けられる。

元々顎が砕けている為、口に押し込んでいた下着がでろりと吐き出された。

「やつ、やめてくれっ——何でも喋るっ。何でも喋るから！」

嗚咽を交え、半ば白目を剥き、鼻腔が裂けるほどに大きく開いていた。

先ほどまでの強気な態度は、たったの三十秒足らず間に影も形もなく吹き飛んでいた。

「あー、悪い。オレ、英語わかんないんだ。それにお前、もごもご言ってなにを喋ってるかわかんないし。ちゃんと発音してみろよ」

竹は英語から日本語に切り替えて、そう嘯いた。

「何でも喋りますっ！ お、おお願いますっ！」

男は惨めにすすり泣きながら日本語で訂正する。

恐怖と興奮のため唇を噛み切ってしまったのか、唾液に混ざった血の泡が顎から胸に滴り落ちている。

竹は男の足元に落ちていた睾丸を短剣の先端で刺して持ち上げた。
「本当か？」

男は夢中でがくがくと首を動かした。どうやら頷いているつもりらしい。

真つ二つに裂かれた睾丸のあった部位からは、血液やら何やらが垂れていてかなりグロテスクだ。
アンモニアと鉄の臭いが鼻のつく。

自分でやっておいてなんだが、気分の良いものではない。

しかし、そんな心境を顔には表さず竹は男の回答に満足そうに頷き、

「でも残念。お前も起きていたから聞いていただろう。オレは一番初めに後ろの男に『喋るなら頷け。それ以外の反応なら殺す』と言った。だがお前はそれ以外の反応を起こした」

と表情を変えずに言い放った。

男は驚愕と絶望を顔に貼り付け、壊れている顎で汚く竹を罵った。

「そ、そんなつ——あれはおれに言われた言葉じゃない——」

「はあ？ オレはお前に『お前が最初から起きてるのは気付いてた』って言っただろ。そしてその言葉をお前は否定しなかった。てことはあの言葉はお前も聞いていたってことだ。だからあれは、お前にも有効な言葉だった」

「ふっふざけるな！ そんな馬鹿な話が——」

「ここにある」

竹は無感動な声で言った。

そして男が反論しようとして口を開いたタイミングに合わせて、刃先に睾丸が刺さったままの刀身を、男の口の中から脳髓を貫くまで押し込んだ。

男は口から血の泡を洩らしながら、びくん、と一度大きく痙攣して息絶えた。

「さてと」

スマートとはいいがたい、随分と乱暴な理論だったが、元よりこ

こちらの男は始末するつもりだったので問題ない。

重要なのはこちらがどれだけキレている人物が見せ付けること。

竹は突き刺した短剣から手を離し特に声色を変えず、一つ息をつく。

そして地面に突き立てていた短剣を引き抜いた。

今のやり取りでこの短剣を使わなかったのは、あんな男の血や小便でこちらの短剣を汚したくなかったためだ。

竹は短剣を持ったまま、再び半円を描いて両耳を失った男の正面に立った。

後ろで拷問の音声のみを聞かされ続けた男は、全身を途切れなく震わせ、飛び出そうなほど目を大きく開け、小便を垂れ流し、既に自我の崩壊一步手前だった。

まだ若い、未熟な暗殺者ではそれが限界だろう。

「それじゃあ質問に答えろ」

竹の言葉に発狂寸前の男は、夏場の犬のように小刻みな息をしながら何度も頷いた。

「よし」竹は無感動なまま言った。

もしも、この男とたった今命を絶った男の立場が逆であつたら、こうはいかなかっただろう。

蛮勇を最良と考えている人間と、狡賢さを認めている人間とでは、その結果は大きく違うものだ。

他者の身体を使った尋問。

竹の尋問予定は一部の乱れもなく進行していた。

——その時だった。

「あひや——」

そんな間の抜けた声と同時に、何かが引き裂かれた音がした。

一瞬、竹は何が起きたのか把握できなかった。

それだけの早業だったのだ。

すぐに竹の眼が二つの物を認識する。

一つは、尋問に屈服したばかりの男が頭部を噛み砕かれた死体とな

って、変わり果てた姿を晒している。

そしてもう一つ――

刹那のうちにそのグロテスクなオブジェを作ったのは、茂みから音もなく飛び出てきた暗緑色の体色をした狼だった。

それは緑色の炎が燃えているような瞳で竹を見やると、男の頭部だった物を挑発的に口の中で噛み潰し、一度低く唸ると再び森の茂みの中へ消えていく。

瞬間、竹は駆け出していた。

駆ける方角は狼が消えた方ではない。

竹は全速力で大神家へと疾走していった。

靴を脱ぐのもどかしく、家の中へ土足で上がりこむ。

しかし、竹が家屋に戻った時、既に事態は最悪の方向へ進行していた。

家中を探し回るまでもない。

そこに居るはずの、大神深翠の姿、気配が完全に消えていた。

自分一人しかない居間で、竹は自分の迂闊さを呪うように舌打ちをした。

翠の章 19（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

前話のラストから一転、グロい話になりました。

もし不快に思われた方がいたらすみません。

物語はいよいよ大詰めに向かっていきます。

相変わらずのんびりした更新ペースですがどうか最後までお付き合いください。

事態は逼迫していた。

夜通しで森中を捜し回ったが、深翠を見つけることは出来なかったのだ。

日付の数字は既に3から4へ。

あと1、2時間もすれば太陽は真上に来るだろう。

竹は一度、大神の家に戻ってきていた。

深翠が消えてから半日以上、休憩を入れずにぶっ続け走り回った為、体の節々に疲労感が漂う。

だが仲間内でいくら体力なしを公言している竹であっても、そこは人外の化物の巣窟出身者だ。まだまだ体力的には問題ない。ならば何故、竹は一度戻ってきたのか。

体を休める為ではなく状況を整理する為だ。

半日以上、捜し回って収獲ゼロ。

竹は人捜しや追跡調査が専門というわけではないから、ある意味では仕方ない結果かもしれない。

しかし、元より竹に専門分野、得意分野というものはない。

何も出来ない無能ゆえに何でも出来る万能。

竹はどんなジャンルであろうと得意、不得意のなくこなせる性質を持っている。

ただ諸々と歩き回ったわけではなく、感覚、知識、経験、技と業。

それらを駆使したにも関わらず、痕跡すら掴めていないという状況。結果論だが半日無駄にしたのだ。

焦っていないといえは嘘になる。

だがこういう状況だからこそ、冷静さを欠いてはいけないことを竹は知っている。

手掛かりが何もなく、進むべき先が見当たらない場合。

客観性を持って自体を俯瞰するのが重要なのだ。

そうやって昨晚の事態を、そしてそこから遡つての記憶を検分していく。

別視点での思考。

すると一つの疑問が浮かんだ。

いや、最初からその疑問はあった。

だから気に留めていなかったものに焦点があったという方が正しい。竹は昨晚のあの時、どういうわけか深翠が消えた気配すら感じられなかったのだ。

そうして思い返してみると、深翠が屋上で竹に依頼を持ちかけてきた時から、元々、深翠は気配が稀薄だった。

まるで陽炎のように掴みどころがなかったのだ。

存在、気配が稀薄な人間というのは確かにいる。

それには訓練されてのものであるのか、先天的なものであるのかという種別があり、そして深翠は後者なのだろうと竹は考えていた。だがしかし、全く無警戒だった屋上でいつの間にか距離を詰められていたことは別にしても、昨晚は戦闘によって意識が切り替わっていた。

その竹が全く気配を察知できなかったのは、やはりおかしい。

加えて、闇の中から唐突に現れ、暗殺者を死に追いやったあの狼。あれも同様に気配が稀薄だった。

しかもあの時、あの狼からは明確な意志を感じた。

それが使役しているものの意志なのか、それともあの生き物の意志なのかは不明だが、少なくとも竹の尋問を頓挫させようとしての行動だったことは間違いない。

つまりあの狼の主、もしくはあの狼自体が、あの暗殺者たちの口から情報が漏れるのを防ぐ必要があったのだ。

あの狼が——というのは考えにくいから、恐らくあれには使役している主がいるのだろう。

そしてそれは竹に対して快く思っていない者。

大神真上。

大神桂里。

十中八九、その二人だろう。

気配が稀薄なのが竹の見立て通り先天的なものであるのなら、その二人も深翠と同じように、気配が稀薄というのも頷ける話だ。

——いや、もし二人があゝの狼の使役者だとしたら、深翠以上に気配が稀薄、もしくは気配を消せる手立てを持っているのかもしれない。月読の血統。

いよいよ、真実っぽくなってきた。

とはいえこれはまだ全て仮説の段階。

ただこの仮説が一番収まりがいいというだけで、この考えがまるで間違いという可能性もある。

それなりに明晰な竹の頭の中には、これとは別の仮説も組み立てられている。

どれが正しいのか。

それを確かめる為に、竹は深翠の両親の部屋の扉を開けた。

引き戸を開けて、部屋の中を見渡した最初の印象は、何の変哲もない和室。

しかし、ここには何かあると勘が告げていた。

その勘に従って敷居を跨ぎ部屋に踏み込む——

「……っ?!」

とりあえず、箆笥から調べようと部屋の中心まで歩いた時だった。

これまで何の危険も感じていなかった本能が、頭の中でけたたましく警笛を鳴らす。

——ぴしゃり。

開けたままにしておいた、襖がひとりでに閉じる音。

即座に部屋を脱しようとするが足に力が入らない。

ただでなく全身から力が抜けていき、畳の上に膝をつく。

「……やば」

そう呟いて、なおも部屋から出ようと試みるが、無様にすっ転んでしまう。

視界がぐにやりと歪み、波打ったように一定しない。

全ての色彩が反転しながら明滅を繰り返している。

まるでクレヨンで描かれた下手糞な絵のような風景だ。

これを描いているのは、侵入者排除の為の時限式の結界。

それも発動まで全く気取られない超極上の。

何かの体内に呑み込まれたような感覚が全身を包み込み——竹はそのまま意識を失った。

翠の章 20（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

短くてすみません。バランスやら更新間隔やらを考えてのことです
ので、どうか許してください。

*21話との重複部分がありましたので、削除した部位がございます。
す。

*

——ここはどこだろうか。

意識を取り戻してすぐにそんな疑問が頭に浮かんだ。

だがその疑問に対する解答は返ってこない。

立ち上がって周囲を見渡してみるが、どちらが上か下かもわからぬ、自分の体すら見えない暗黒の空間が延々と広がっているだけだった。

「……夢、か？」

そう自問してみるも、どうにも違う気がする。

夢にしては体の感覚がリアルすぎるのだ。

ならば自分は死んでしまったのだろうか、とも考えたがそれもうやら違うようである。

死んだことはないから確証はないが、少なくとも自分はまだ生きているという確かな手応えがある。

だからここは深翠の両親の部屋で間抜けにも結界に取り込まれた結果、行き着いた場所。

恐らく結界の中なのだろう、と竹は結論付けた。

誰が創りあげた結界なのかは知らないが、とんでもない代物だということは間違いない。

とりあえず右も左もわからない空間で留まっただけでも仕方がない。

竹はどうやってここから脱出しようか思考を巡らしながら、一直線に歩き始める。

この空間で既定の距離というものが当てはまるのかは微妙だが、感覚では100メートルは歩いただろう。

その頃には、竹は五体満足で自分が確かに生きていることを確信し、少しだけ安堵する。

歩いた先で三途の川でも見つけたらどうしようかと多少の不安はあったのだ。

——まだ死ぬつもりはない。

あんなトラップが人生の最期だったら間抜けすぎて鬱になる。

とはいえ、自分が生きている確信はしても根拠はない。

その点では、まだ完全に安心は出来ない。

それから更に歩を進めていくと、暗闇の中に漸く変化が見られた。竹の視線の先に僅かな発光とともに一つの建造物が見えたのだ。

それは社だった。

鳥居も拝殿もない、本殿だけの社。

天岩戸の地下にあった社ほど絢爛豪華とは云わないが、それでも遠目からわかる程には煌びやかな佇まいをしている社だ。

広大といって差し支えないであろうこの空間で、竹は初めからそこを目指していたわけではない。

しかし、闇雲に歩いていたわけでもなかった。

引き寄せられたのか、引き付けたのか。

どちらにせよ自分の感覚を信じたのは間違いではなかった、という話。

社の正面に立ち、それを見上げる。

——と、唐突に既視感に囚われた。

社に上がる前に、それが何に由来するものなのか考える。

天岩戸の社だろうか、と考えてすぐに打ち消す。

あれはここよりも力強く、吐き気がするほどの神々しさを持っていた。

むしろこの空間の雰囲気は大神深翠の実家と、その周りの森の寂しげな静寂を思わせる。

が、それも微妙に違う。

ここは周囲に何も無いにも関わらず、あの土地よりも大分抹香臭い。

それを趣がある、と言い換えてもいい。

ならここは何に似ているのだろうか。

「……あ」

それに行き着いて竹は小さく頷いた。

——昨日の夢。

ここは一昨日昼寝をした時に、見た風景と同じだった。
今の今まで忘れていた。

否、思い出せなかった夢の一場面。

それと今の光景がぴたりと一致するのだ。

しかし何故、夢で見た風景と今とが一致するのか。

予知夢だろうかと考えた自分を鼻で笑う。

この作務的な状況を、予知夢などという現実逃避で片付けられるわけがない。

間違はなく、これは誰かが仕立て上げた舞台。

誰が。

何のために。

あらゆる疑問の答えは本殿の中に入ればわかるはずだ。

竹はもう一度、小さく頷いて壇上へと上がりこんだ。

本殿へと入った竹を迎えたのは一人の女だった。

迎えたといっても、女は祭壇に向かってなにやら祈りを捧げている
最中らしく、竹に背を向けている。

更に周囲を照らしているのは、祭壇に灯った蠟燭の僅かな明かりのみ。

それでも後姿や雰囲気で女だと瞬時に判断できた。

二歩、三歩近づいたところで足を止める。

声をかけるか、かけるまいか。

そんな数瞬の揺らぎ。

答えを得る為に来たのにも関わらず、その後姿は竹にそれを躊躇わせる何かを放っていた。

「——どうぞ、そこに座ってください」

背を向けたままの女の声が板張りの室内に静かに響く。

不思議なことに無感動な調子の女の声は遜っているようにも、高圧的にも聞こえる。

竹は少しだけ考えて、結局その声には応じずに立ったまま話すことにした。

「用心深いこと——」

そう言つて、女はくすりと笑った。

顔が見えないので本当のところはわからないが、だが竹は今の微かな笑いは、間抜けにも結界に引っかかってここに辿り着いた自分に対する皮肉なのだろうと判断した。

しかしその皮肉に付き合っている暇はない。

それでも竹は逸る気持ちを抑えて、順を追って会話を進めることにした。

この状況だ。

不明瞭な部分は一つでもなくしておきたかった。

「……オレをこの結界に引き込んだのはあなたですか？」

「私以外に誰かいると思いますか？」

「……いえ、ただの確認です」

いちいち癪に障る切り替えしをしてくる女に、竹は絶望的な相性の悪さを感じた。

別に仲良くなるために話しているのではない、というのが救いといえれば救いか。

竹は不快感を隠して会話を続ける。

「あなたは誰です？ 何のためにオレを？」

女は竹の問いかけにすぐに答えなかった。

代わりに無言で身体の向きを変える。

「——っ?!」

正面から女の顔を見て、竹は驚愕に息を飲む。

それは竹が大神深翠の事情を話された時から予感していた最悪が的中していることの証明。

——ガチリ。

齒車が噛み合うような音がどこかで聞こえた。それは止まっていた——止めていたはずの運命という名の物語が再び開始された鐘の音。

古代巫女の礼服を纏い、長い黒髪を結い上げ、額には黄金造りの天冠。

子供の拳ほどもありそうな翡翠の勾玉が連なった首飾り。

そしてその首飾りよりも濃い緑色の瞳。

白百合を思わせる日本的な美貌は、間違いなく最上級のものだと断言できる。

しかし、竹が驚いたのはその美しさではない。

驚いたのは、ぼんやりと蠟燭の明かりに照らされた女の顔。恐らく呪術的な意味合いがあるのだろう。

目元や口元に辰砂の顔料で化粧を施しているが、その顔は大神深翠に瓜二つだった。

——だがその顔立ちに幼さ、あどけなさはない。

顔は同じでも深翠よりも年齢はずっと上に感じるのだ。

それが化粧によるものだけではないことは明白だ。

眼が合った時より感じる圧倒的な神々しさ。

そして、その神々しさを塗り潰してしまいそうな、悲しみと絶望が女からは溢れていたのだ。

光源が乏しい為、女の顔には翳がかかりそれに一層拍車をかけている。

それが彼女の年齢を不詳にさせ、同時に大神深翠とはまるで別物なのだと主張していた。

「……あんた……何者だ」

なんとか搾り出した声。

それに女は一度、口元に薄い笑いを作ってから凜とした声で答える。

大神深翠と同じ顔で——

「——私の名は大神翠。この豊葦原結界の製作者にして、三貴神『月読』。今日という日の廻り合わせを、六百幾余年待ち続けた過去の亡霊です」

そう言つて女は表情を消す。

六百五十年に及ぶ物語の始まりの女の声を、竹はただ気が遠くなる思いで聞いていた。

翠の章 21（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

前話に続いて短くてすみません。ラストに向けて難しくなるのは毎度のことですが、ここまで苦戦するのは初かもしれません。それでも少しずつ前に進んでいきますのでもう暫しお付き合いください。

* 申し訳ありません。20話と重複部分があつたようです。

大神翠。

『月読』との邂逅にあらゆる疑問が竹の頭の中で飛び交う。混乱状態に陥った竹の脳みそは半ばフリーズしかけるが、すぐに持ち直した。

この結界に取り込まれた時から、その可能性もあるとは考えていた。

しかし、そうはいつでも考え付く限りで最小の真っ先に打ち消した可能性だ。

それが正解だったことに取り乱さないわけがない。

だがそれでも想定していた可能性の一つだっただけに、僅かな時間で気を取り直すことができたのだ。

大神翠はそんな竹の様子を一部始終見た後、満足そうに頷いた。

「及第点といったところですね。ええと——貴方の名は？」

「……天倉竹」

「天倉竹……ああ、そういう意味ですか。わかりました。それでは聞きたいこともあると思うので、質問を許可しましょう」

相変わらず遜っているようで高圧的な口調。

それに加えて、何かを試すような含みまで持たせている。

「……」

——大神の血筋とは相容れない。

そんな感想を持ちつつも、竹はまず最初の質問を何にするか頭の中を整理した。

「それじゃあ——豊葦原結界とは何です？」

「……そう。そこからきますか」

大神翠は竹の最初の質問がそれだったことが意外だったのか、問いかけに答える前に逆に竹に問い返す。

「まず私が本物の大神翠かどうかは確かめなくて良いのですか？」

大神翠という六百五十年も前の、既に死去しているはずの人物の名を名乗る人物眞贋は真つ先に確かめる必要があるだろう。

彼女が本物なのか、それとも全くの偽物なのかでこれからの話が大きく変わってくる。

しかし――

「オレが全く気付かないような高度な結界。そしてここ数日で知ってきた情報。その両方を合わせれば、もう信じるしかないでしょう。むしろここで大神家に全く無関係な人間が出てきたら、そっちの方が驚きですね。それともなんです？ あなたは偽物なんですか？」

「ふむ、成程。そういう考え方ですか。天岩戸の子なだけに多少の頭の固さは覚悟していましたが……貴方のような子が育つのですから組織も変わったのでしょね。彼女が知ったら卒倒しそうですがまあそうでなくては――」

月読はその先は続けず、話題を戻す。

「豊葦原結界を説明する前に一つ。豊葦原というのがどこの地の名称なのかは知っていますか？」

「正確な広さは知らないですけど、一応」

竹は頷く。

「そうですね。では話は早い。豊葦原結界というのはその名の通り、この大森林を含んだこの地を覆う結界。色々手を加えていますが、禁足の結界と捉えてもらって構いません」

「いや……」

様式は兎も角、そんなことは名前を聞いただけで想像できる。

だがしかし――

「貴方の言いたいことはわかります。この地に結界の存在を感じ取れなかった――と言いたいのでしょうか？」

そうなのだ。

それほど大規模な結界が敷かれていたのなら、気付かないわけがない。

大神夫妻の部屋で結界の存在に気付かなかったのだから、こちら

も気付かないなんてレベルの話ではない。

結界は大掛かりになればなるほど、精度、維持、隠匿性が難しくなるのだ。

この大森林を覆うほどの大規模結界を六百年以上もの間、その存在を劣化されることなく維持し、隠匿していたというのは俄かに信じ難い。

事実、天岩戸の隠れ里はその土地に敷かれた結界を維持する為に、定期的に修繕を繰り返していた。

恐らく現時点で世界最高の結界師である、十三夜の遠藤涼也でさえ、何のメンテナンスもなしにこれだけの規模の結界を敷いた当初と同じ精度で、六百年以上維持するのは不可能だ。

それとも何だろうか。

大神翠は六百年以上生存し続けて、その結界の維持に勤めていたというのだろうか。

それこそ不可能な話だ。

寿命を延ばす為の特性を持っている吸血鬼の類ならまだしも、何百年も姿を変えることなく生き続けるなんて事例は聞いたことがない。それは例え神の血統だとしても、だ。

それにその定説を証明するように、少なくともこの女から生氣は感じられない。

そう。今、竹と会話をしている緑色の眼をした女。

『月読』。

彼女は彼女の言葉通り、生者ではない。

この暗黒の結界内の社の中にだけ、その存在を残している亡霊だということ。竹は感じ取っていた。

「確かに貴方の考えている通り。例え神域の結界師であろうと、なんの修繕もなく六百年以上もこれだけの結界を維持し続けるのは不可能。まあ今私たちがいるこちらの結界のように、結界そのものに製作者の存在を組み込んで、いくつかの条件を整えてあげればできないこともないですが――」

「いや、ちょっと——」

さらっと言ってくれたが、かなり重要なことを言ったのではあるまいか。

「何でしょう？」

「結界に自身の存在を組み込んだ……？」

話は脱線してしまうが、聞かずにはいられなかった。

「そうです。存在——魂と言い換えても良いですが……私はこの結界と同化することで、自身と結界両方の維持を可能にできたのです。無論、私が真なる神の血を引く『月読』という貴い存在だったからこそ可能な手法でありますが」

大神翠は結界であり、結界は大神翠である、ということだろう。

つまりこの空間は大神翠の魂の牢獄——いや、牢獄の魂か。

理屈はわかる。

しかし——自分自身を人身御供としてまで大神翠は何故、この結界を創りあげたのだろうか。

「それは豊葦原結界とやらを維持する為にですか？」

竹の問いかけに、大神翠は微かに眉を動かした。

まるで出来の悪い生徒に呆れる教師のようだ。

「違いますよ。始めに言いましたでしょうに……まあ良いでしょう。もう一度、伝えておきます。」

私は——貴方と会う為にここに存在し続けたのですよ」

「——？」

愛の告白の言葉としては上々だが、少なくとも竹は大神翠にそこまで言われる所以がない。

それはそうだろう。

当然、竹は大神翠とは初対面なのだ。

ならば何が、六百五十年前の人物にそこまで断言させるのだろうか。

「順を追って説明しましょうか。その方が効率が良さそうですし」
そうしてもらえらるなら、その方が良い。

竹は大神翠の言葉に賛同するように無言で先を促した。

「六百五十年前のことです。天岩戸に居た私は真実を知りました」
「真実？」

「遠い過去の物語。」

岩戸という神の世界との繋がりが蓄積した過去の記録。

つまりは唯一たる正史。

それを知った私は、その歴史に従い天岩戸から抜けるとともに、この地方へ身を隠しました」

大神翠は静かに言った。

それとは対照的に竹は言葉の端々を荒げて言う。

「ちよつと待つてください。歴史を知った？ 岩戸が蓄積した過去の記録？ どういう意味です？ 六百五十年前には、あなたの行動をそう促すような文書が天岩戸にあったって言うんですか？」

「真逆。歴史を記述した文書はこの世に一つしかないのはご存知でしょうに。そしてそれは当時はまだ、魔法使いたちの経典になる前の眠りにについている」

「だったら——」

だったらどうやって、彼女はソレを知ったのだろう。

竹の問いかけに大神翠、月読は一層静かな声で答える。

「過去、現在、未来。天岩戸に座する三貴神。そのうち過去に対応するのが月読たる私の異能、とだけ教えておきましようか」

「……抽象的ですな」

「具体的に教えることはできません」

「それが道筋だから？」

「その通りです。ですが貴方は、手法はどうあれ私が何を知ったのかは理解できましたでしょう？」

竹は眉間に皺を立てて頷いた。

露骨に嫌悪感を示している。

女はそれに対して特に感想を持っていないようで話を先に進める。
「天岩戸を抜けた私は、それ以降、その存在を知られてはならな

つたのです。

それは当時の天照との約束でもあり、歴史の導きでもあった。その為に、まず私はこの地に私とその後続く血脈を隠す結界を敷きました。

それが豊葦原結界。

この結界は貴方が生まれた地、天岩戸の隠れ里、高天原の結界よりも禁足の力は弱いですが、維持が容易なものです」

「……これだけの大規模結界をたった一人で組上げた？」

「はい。それだけの力と業が私にはありました……いえ、そうなるようになつていたのでしょう。現に私以降の血筋に、これだけの結界を構築する才ある者は現れませんでしたから。だからこそ結界の強制力を犠牲にしても、何の修繕もせずとも長年の維持が可能なものにする必要があつたのです」

「六百年以上も劣化させずに存続できる結界……そんなことが可能なんですか？」

「……いや……」

六百五十年もの間、天岩戸は月読の存在を感知できなかったのだ。俄かに信じられない話だが、結果が出ている以上信じざるを得ない。大神翠は、恐らく初めて何かを思案するような、何か躊躇うような表情の動きをみせた。

それはほんの一瞬のこと。

女はそれらを振り切り切るように口を開く。

「……説明が逆になりましたが、私がこの地を選んだのには——いえ、歴史により選ばされたのには二つの理由がありました。

それはこの地の霊的な格が高かったこと。これは結界を敷く為には好条件でした。

そして私が来るより遙か以前から、大神という名の一族がこの地に住まっていたことです」

「……大神」

「狼を崇めていた百名ほどの貴い血を持つ山の民。その一族と血を

結ぶことが、私が歴史に課せられた役目の一つだったのです」

「じゃあ大神という姓は元々——」

「この地に住んでいた山の民のものです。月黄泉文書を読みましたか？ あれには私の夫の名が書かれていたと思いますが」

「大神深夜」

正確には読んだわけではないのだが、無駄に話の流れを遮るのも良くないだろうと思ったので、竹は簡潔に返答した。

「そう。彼は大神の一族の中で最も強く、最も気高く、私との相性が最も良かった戦士。彼と交わるにより、私の血統は大神の姓を得たのです」

「……その大神の一族は、あなたがこの地へ逃げ延びてきた時に反発はなかったんですか？」

彼女の時代に居を移すというのは、現代のそれとはわけが違う。

それが山の民、しかもその地に古代より根を下ろしていた者たちともなれば、外から来た者への反発は並大抵ではないはずだ。

「確かに多少なりともその心配はありました。が、結果的にはそれは杞憂でした。この地を実質治めていた彼らでしたが、驚くほどあっさりと私を受け入れ、そして私の行ったことに対して協力的でした」

「あなたがやったこと？」

「そうです。それがこの豊葦原結界。この結界は彼らの存在なくしては完成しえなかった」

「それはどういう？」

「……この結界に維持する為の修復が必要なのは、何故だかわかりますか？」

「え……それは——月読という神の血筋の成せる業、ということでは？」

実際、先ほどまで大神翠は結界を自分で構築したと言っていたのだから、竹は単純にそう考えていた。

だが、大神翠は自身の言葉に更に上乘せするように言う。

「いいえ、違います。私にはこの結界を構築する力はあっても、維持する力はなかった」

「だったら——」

だったらどうやって、この結界を維持してきたのだろうか。

「簡単なこと。というよりも貴方はすでに答えを得ているでしょうに。今私たちがいるこの結界世界。こちらを維持するのに私はどういう手法を取ったと言いましたか？ それを考えれば自ずと答えは出ますでしょう」

あ、と竹が声を出すよりも早く、女は言葉を続ける。

「神たる私には及ばずとも、貴き血を持った大神の一族。

私は彼らの魂——生命を、彼らを育み、彼らが根差したこの霊格高き自然に同化させることで、修繕なしに六百幾夜年という歳月を超えることができる結界を創りあげたのです」

「……そんなことが……」

不可能だとは言わない。

現にそうやって、結界と魂とを同化させることで存在しているという者もいるのだ。

だがしかし、それはあくまでも本人の意志でそうなっているだけ。技術として可能だとしても、現実問題可能だとは到底思えなかった。

天岩戸や黒の教団など、狂信的な者たちが多く在籍している組織ならまだわからなくもない話だが、大神の一族はそんなものとは無縁の、別のところに信ずるものを持っていた山の民なのだ。

他人の、しかも外から訪れた者を迎え入れるだけでなく、命を差し出すほどにまで協力ができるというのは、少しばかり信じがたい話だった。

……しかし、信じざるを得ない。

頭で否定していても、心がすでに納得してしまっている竹がそこにはいた。

何故なら——

「それが神の威光というものと、片付けてしまるのが一番良いのですが、そうではありません」

大神翠はそう言って首を振った。

その仕草はどことなく空虚さを感じさせるものだった。

そしてその空虚さは竹にも伝染していた。

そうなのだ。

大神という一族に命を捧げさせたのが、月読という神だからこそ可能なものだった、と考えられたらどれだけ良いことか。

だがそうではない。そうではないのだ。

竹は視線を下ろす。

床に座る女の顔は、一層空虚さを増していて、もはや憐れにさえ見える。

大神翠はそんな自分に対してだろうか、自嘲気味にその言葉を発した。

「――運命。全て決まっていたことなのです。

私がこの地に辿り着いたのが歴史の導きだというのなら、彼らが遙か昔からこの地に根付いていたことも、私との婚礼をしたことも、その血肉を惜しげもなく豊葦原結界に差し出したことも、全てが歴史の導きだったのです」

女は独白を続ける。

段々とその声は絶望の色を濃くしていく。

「そして私は、それを岩戸の記録を知った時から、そうするように、そうなるように解っていながら、ただ決められた筋書きをその通りに進んだのです。

抗うことなど無意味だと知っていたから。

あれほど決定付けられている歴史というものを恐怖した時はありません。

あれほど自身の存在を憎悪した時はありません。

あれほど世界というものを虚しく感じたこともありません。

私は、運命に負けたのです」

「……」

女の感じている絶望は、竹の良く知るものだった。

そしてだからこそ、竹は大神翠に言える言葉があった。

「——でもあんたは、負けっぱなしでいる気がなかったんだろう？」

敗北者の歴史は、いつだって語られない。

闇から闇に葬られるだけ。

それが世の常。

世界の理。

だが月読、運命の敗北者は、その歴史を、過去を、自分が辿った運命を竹に語った。

死したはずのものは、黄泉返ったのだ。

古来、月は死と再生に関連付けられることが多かった。

月の満ち欠けする様と、生と死の反復を重ねて見ていたのであろう。

これが古代から人々が月に対して持ち続けていた月の神秘のイメージであり、それが月読という名を持つ神に与えられた幻想。

それこそが大神翠という女が取れた、たった一つの手段。

語られるはずのない、葬られるはずの歴史。

それを伝える為に女はここにいる。

だが——、だがまだ先がある。

歴史が黄泉から帰っただけではまだ半分。

まだ勝ちには程遠い。

「ええ——その通り」

大神翠は、竹の顔を見て不敵に笑う。

「天倉竹。運命に反逆し、ここに辿り着くことが出来た最も新しき偽りの神よ。貴方に頼みがあるので」

竹は女と同じ種類の笑みを作って微笑み返す。

「何でしょう？」

「月読、そして大神の運命に——打ち勝ってください」

翠の章 22（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

20、21話の重複投稿まことに申し訳ございませんでした。何であんなことが起きたのか、ありえないミスに反省するばかりです。

翠の章 23

「それは出来ません」

六百年以上もの時をかけ、女の心——いや、魂を込めた願い。それを竹は即座に拒絶した。

「……………何故です？」

まさかここで断られるとは思っていなかったのだらう。

大神翠の声は予想を裏切られた驚きと、不快により微かに震えていた。

竹は憤怒に染まった女の瞳と視線を合わせると、肩をすくめる。

そして竹が口にした言葉は、意外なものだった。

「だって別に、あなたはオレを待っていたわけじゃないでしょうよ？　どんな真実を知ったのかは知らないですけど、あなたはここに辿り着ける人物だったら誰でもよかった。その証拠にオレを待っていたと言いながら、名前を聞いてきましたね。——というわけで、すみませんけど、そんな人の依頼なんて受けることはできません」

何の迷いもない竹の言葉。

それは女がこの用意したこの舞台の前提を覆す言葉に他ならない。何の根拠があつて、竹はそれを指摘したのか。

しかし、少なくとも大神翠には竹の発言の中に根差しているものが正しく伝わったようだった。

女は一度迷ったように、言葉に詰まったが結局認めた。

「……………その通りです。私は貴方だから待っていたわけではない。ここに辿り着けるたった一人の人物を待っていた。それが偶々、天倉竹——貴方だっただけの話。ですが、それではいけないのですか？　結局のところは同じことでしょう」

「いいえ、全く違いますね。それにオレには、あなたの依頼を受けられない理由がまだ二つある」

「何でしょう？」

「一つはただの天倉竹は依頼を請けないということ。仕事をするのは神様になり損ねたオレじゃなくて、解決士のオレです。公私は分ける主義ですから。それともう一つはオレは今、別の依頼を請けてしまっていて、他の仕事は請けるつもりがないんですよ。経験上、ダブルブッキングすると碌なことにならないんで」

本当はまだもう一つ理由がある。

むしろそれが最も重要な理由だ。

だが竹はまだそれを教えない。

飄々とした竹の物言いに、大神翠は声を押し殺して言う。

「……私の六百五十年は無駄だった、というわけですか。所詮、敗北者は敗北者。運命には抗えないのですね……」

しかし、肩を落とす女に竹は意外な声をかける。

「そうでもないですよ？」

「……どういことですか？」

「あなたのお陰で、今まで見えなかったものが見えた」

「見えなかったもの？」

「解決すべきものの正体。とはいえまだ腹が決まったわけじゃないし、輪郭がはつきりしないんで、もう少し詳しく話してくれますか？ まだ話は途中だったでしょう」

「それ次第で考え直すと？」

「さあ、どうでしょうかね」

「随分と不遜なですね。現在いまの子は皆そうなのですか？」

「現代っ子って奴です」

女の小さな疑問に竹はそう答えた。

かなり適当な答えだったが、そんなどうでもいいことをいちいち訂正する気にもならなかったのである。

竹の適当さ加減がわかったのか、大神翠は苦笑する。

「この結界を創り上げた私は一冊の書を記しました」

月黄泉文書。

大神翠と大神深夜から続き、血族の終わりまでを記した家系予定図。

「何故、私があの手を記したのか、という話はもう説明せずともいいでしょう」

「そうですね」

全ては運命のいう通り。

もはや説明するまでもないことだ。

だから重要なのは理由ではなく、その目的。

何故、あのような予定書を残してまで、血縁を操作する必要があるのかである。

——とはいえ、その答えなど聞かずとも大よその予想はついている。

「その顔は解っている顔ですね。ええ、恐らく貴方の創造している通りでしょう。私があれを遺したのは、この時代に大神深翠を産み落とす為。

月読、そして大神の血を引く対なる双子。

一子全女のはずの血筋において唯一の例外。

御子、桂里。

忌子、真上。

二人の大神の血を混ぜ、より深く、より濃く、始祖たる神の緑翠を創り上げる。

それが私——いえ、それ以前から繋がる血の物語の終着点というわけです」

やはり、という思いが竹の中に駆ける。が同時に疑問、とんでもない大問題が発生していた。

だが、竹はそれより前にまず小さな疑問を氷解させることにする。

それこそ全ての根底を揺るがすような、大問題を先に聞く準備がまだ出来ていなかったのだ。

「いくつか質問が。月黄泉文書に書かれた豊葦原の統治者と巫女の意味は？」

「どちらも言葉の通りですが、統治者はこの地をかつて支配していた大神の名残とでも言いましょうか。私以降は特に何をしたいという

わけでもないでしょうから。……ただ、そうですね。この緑豊かな地を穢れさせない為には、名目だけでも統治者を名乗らせる必要があった」

「意識の問題と？」

「そう捉えてもらって構いません。次に御子についてですが、こちらと同じです。その文字通り、神の子という意味です。こちらは月読の血筋——」

「いや、ちよつといいですか？」

「何か？」

「御子ってそっちの御子ですか？ オレが聞いたのは巫女って……あれ？」

竹はここで決定的なことを思い出した。

それは今まで忘れていられた方が奇跡としか言いようがない食い違い。

大神翠。彼女は先ほど月読は過去に対応する神であり、その能力もそれに準拠するようなものだと言った。

だが大神深翠は——

「月読の力が予知？ だからその血筋の子は巫女？」

「はい。それと彼女は自分には神としての力は受け継がれていないとも」

竹の言葉を受けて混乱気味な女に対し、竹は更に先ほど後回しにした大問題を付け加えて言った。

「——何を馬鹿な」

わけがわからないと絶句しながらも、辛うじて搾り出した言葉。だが女以上に竹も、わけがわからなかった。

二人の大神の言っている言葉がまるで矛盾している。

六百五十年前の月読は自らの力を過去と言い。

その血の結晶たる現代の少女は、体に流れるのは未来を知る力で、しかも自分にはその力はないという。

何が本当に、何が嘘なのか。

眞贋を見極める為の材料が少なすぎる。

これは参った、と竹は眉を寄せる。

見てみると、正面の大神翠も同じような顔をしていた。

彼女からしてみても、この状況は全く想定外だったのだろう。

——想定外。

はっ、と竹は思いついた。

「OK。何がなんだかわからないですけど、とりあえず今のところは、オレはあなたを信じることにします」

混乱している大神翠の表情に嘘はなかった。

だから少なくとも、大神翠はこの状況を予め知らなかったということになるのではないか。

自分でもどうかと思う論理だったが、それでもこの場は状況を転がす為の措置を取らなければ仕方がない。

何を信じるか指針のないままでは、前にも後ろにも進めない。

緊急措置という奴だ。

それに嘘を吐く為に、魂を使ってこんな結界に留まるようなことはしないだろうと思うのが人情つてものだ。

神様相手に人情を説くのも妙な話だったが、元より竹は現状では大神翠の方を信じるしか道はない。

何故なら、今の竹はある意味においてこの結界に囚われた状態だからだ。

今の力関係は完全に竹よりも大神翠の方が上なのである。

これまで態度には表さなかったが、不遜な言動を取るたびに実は内心冷や冷やものだったのだ。

「そうして下さい。しかし、私の末裔は何を考えているんでしょうか。誤った情報を与えるなど……まあ良いです。私に私の思惑があるように、子孫にも子孫の思惑があるということでしょう。むしろそれは喜ばしいことかもしれません」

「どういうことです？」

「状況が私の知っているものと変わっているということです。もし

かすると彼女は彼女なりに運命に抗っているのかもしれませんが」

「……あなたが乱そうとしている運命を修正されている、と考えることも出来ますけど？」

「確かに。ですがそれを貴方が理解できただけでも僥倖と取るべきでしょう」

「前向きですね」

「後ろには進めませんから」

大神翠はフツと微笑し、そして無表情に戻る。

「大神深翠には神としての力がない。本人はそう言ったそうですが、貴方から見てどうでしたか？」

「言われた時は信じました。実際、彼女から神性は感じられなかったんで」

「そうですか……失敗した？ いや、真逆……」

竹が答えると、大神翠はぶつぶつと一人考え込む。

「あーっと、考えているところ悪いんですけど、話の続きをお願いできますか？」

「ああ、すみません。それでは続きを。とはいえ、もう殆ど話すことはありませんが」

大神翠は気を取り直したようにして続ける。

「文書の最後に私が記したのは、大神の家系の終わらせ方」

「大神深翠を両親に殺させる、って奴ですか」

「は？」

「え？」

またもや何か再び食い違いがあったようだった。

竹の言葉に驚きを見せる女は言う。

「大神深翠を両親に殺させる？ 貴方は何を言っているのです？」「何をつて……」

竹としては大神深翠に教えられたことを言っただけなのだが、彼女のリアクションをみるにどうやらそれは違うらしい。

「貴方は一体、大神深翠から何を聞いて——どういう関わりを持つ

「ここにいますか？」

「えっと……」

かなり話が錯綜してきたが、とりあえず竹は深翠から聞いた話を余すことなく大神翠に伝えた。

全てを聞き終えた大神翠の表情は、これまでにないほどの困惑を示していた。

「……私の子孫は、私を困惑させるのが趣味なのですか？」

「……」

女の問いかけに、自分にそんなことを聞かれてもわからない、と竹は無言で返答する。

「こんなに表情を転々と変えたのは生涯初です」

「……そうですか」

そもそも大神翠は、死亡してこの結界に組み込まれているという話だから、生涯も糞もないと思ったのだが、空気を読んで突っ込むのは控えておいた。

「それで、あなたは古文書に何て記したんですか？ その大神の終わらせ方っていうやつを」

「——その、問い方で良いのですか？」

ピクリと竹の眉が上がる。

「どういう意味です？」

「……」

返答は静寂だった。

緑色の両眼が、竹を射抜くように見やる。

竹は無表情でその視線を正面から受け止めた。

——見抜かれている。

竹は内心で感嘆の息をつく。

舐めていたわけではなかったが流石は月読。

竹が先ほど語らなかつた依頼を断った三番目の理由など、先刻承知だったらしい。

選択に逃げ道を残す為にさらっと聞いてしまおうと思ったが、そ

れは許されないということか。

浅ましい考えを見抜かれて少しでもバツが悪くなった竹は、視線を下げて頭を掻く。

そして、表情を引き締めて顔を上げる。

「すみません。聞き方を変えます」

「心は決まりましたか？」

「それなりには」

なら良い、と月読は頷く。

さて、ここからが本題。

先ほどは断った女の願いの是非を問う分岐点。

『月読』と『神の複製品』の瞳が交差する。

「――あなたが記した大神の終わらせ方」

回り道をしたのは、核心に迫る前にアウトラインを知っておきたかったから。

だがそれも終わり。

「あなたが打倒したい運命の正体」

これこそが真に知るべき本質。

それがわからなければ――

「それを教えてください」

解決することなど出来やしない。

「よいしい。では心して聞きなさい」

大神翠の声が冷えた空気を震わせる。

「私が記した大神の終わらせ方。」

それは5月1日の日没から、5月5日の日出までに天岩戸を崩壊させた者の手によって――月読の御子を殺害させること。

つまり貴方の手によって、大神深翠は殺されるというわけです。

それが私が打倒したい運命の正体。

どうです？ 貴方はこの運命に打ち勝てますか？」

数分前は断ることができた願い。

それはその内容を知らなかったから。

だが今は――

「……」

可能なのか、不可能なのか。

それを問われた竹の答えは沈黙だった。

大神深翠が自分によって殺される。

動機もなければ、考えたこともないそんな馬鹿みたいな内容を竹は否定出来なかった。

しかし、大神翠は竹のその反応は予想通りのものだと対応する。

「でしょうね。その反応が正しい。

出来るか、出来ないか。

やりたいか、やりたくないか。

そんな判断が利くような話ではないのですから」

月読は陰のある微笑を見せる。

「人の行く道は生まれたときから決まっています。

その道をもし踏み外すことが出来たとしても、その先に待っているのは破滅という名の崖。

そこには落ちてみるまで気が付くことも出来ない。

何故なら、道を踏み外した時点で迷いの霧の中にいるのですから」

そう。そしてそれを予め知っているのなら、わざわざ自分から道を踏み外そうなどとは思わない。

「だからこそ、先の問いでは核心をはぐらかして、形だけでも了承を取ろうと思ったのですが……」

そんな安心すら与えてくれない運命。

それを当然と考える。

それを当たり前と知っている。

「でも――それでも私は――」

大神翠は、言いかけたその先の言葉は言わなかった。

もう自分にはその先の言葉は相応しくない。

そんな風な諦めが、女の顔には刻まれていた。

竹はそんな女の顔をただ見つめるだけ。

今の竹が女に何を言おうとも、全てが中途半端になってしまう。

それがわかつているから、竹は何も言えなかった。

「これで本当に話は終わり。やはり私は失敗した。なればもう語るべきことはありません。貴方に教えることもない」

女は音も無く立ち上がる。

「私は貴方を責めません。元から低かった可能性ですから。でもこのままこの結界に貴方を捉え続けられば或いは――」

月読はすうつと片手を持ち上げ、竹の頬にその白い手をあてる。

竹は微動だにせず、それを受け入れる。

「などと考えもしましたが、どうやらそれも無理そうですね」

緑色の瞳の女は嘆息する。

女を基点に周囲の空間が、ガラスが割れるように剥がれ落ち始めていた。

剥がれ、穴が出来た部分には大神夫妻の部屋が見える。

結界が崩壊し始めているのだ。

それは同時に女の魂の限界であった。

「たった一人、土地の恩恵もなく六百年以上、結界を維持できたことが奇跡といえる領域。加えて貴方という存在を招き入れた事で、運命の眼を盗み続ける事も出来なくなった。物語の異分子たる死者は直ちに黄泉へと退場せよ、ということでしょう」

そう語る間にも結界の崩壊は進み、残すところは竹と女の立っている場所だけとなる。

「……少しだけ、あの人に似ていますか」

「……あの人？」

「大神深夜」

懐かしむような呟き。

それはこれまで聞いた中で、群をぬいて優しい声だった。

「でもまるで違う。あの方は運命の犠牲になった。

それはそうするしかなかったから。

それしか道がなかったから。

でも、貴方には――」

ざあ――と大神翠の体が砂のように崩れ落ちた。
取り残された竹の周りは暗黒の空間も、神殿も、祭壇もない何の変哲もない和室。

たった今崩壊した女の残骸すらない。

「……選べるだけの道がある」

唐突に現れ、唐突に消えていった女。

その最後の台詞を継いで竹は呟く。

「――勝手なこと言ってんじゃねえ。……ふざけんな」

どれだけ言葉を重ね、どれだけの人を嘆きを語っても、全ては虚飾。

結局、大神翠の言いたかったことは最後の言葉だけ。

「あんたは、旦那の敵討ちがしたかっただけじゃねえか」

それが女の真実。

竹にはなんら関係のない、個人的な事情。

だけど――

「最高の怨み言だ」

竹は苦い顔で舌打ちする。

道を選ぶ権利。

それは確かにある。

だが義務を押し退けて、権利を行使した悲惨さを竹は身をもって知っているのだ。

だから例え権利を行使しなかったからと言って、何かを言われる道理は無い。

しかし、それがわかっていて竹は悩む。

神の血を引き、月読と呼ばれ、その運命の存在にさえ気付いた偉大な女。

その女が六百年以上もの時を掛けてまで伝えた怨み言。

これは――重い。

生半可な呪いよりも、呪い染みている。

「……どうしたもんかね」

竹はがしがしと頭を掻き――

とりあえず、一晚駆け回った汗を流す為に風呂に入ることにした。

大神深翠。

月読、大神翠の言葉を信じるのなら、彼女の発言は嘘ばかり。
全て仕切り直した。

翠の章 23（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

更新遅れて申し訳ありません。体調崩したりでてんてこまいでした。一応、終わりの目処がついて残り3話、5話くらいになると思います。どうかこれからもよろしくお願いいたします。

——さて、どうしてこうなったのか。

どこで見誤ったのか。

どこで間違えたのか。

どこで失敗したのか。

後ろを振り返っても、思い当たる部分がない。

いや、思い当たる部分が多すぎるのかもしれない。

だからどこが決定的だったのか断定出来ない。

境界がないのだ。

嘘と虚飾で塗り固められた物語。

その終わりを夢想する度、目眩がする。

*

啞えタバコが煙と引き換えに灰になって天に昇っていく。

頭上には太陽の代わりに月が座している。

深夜零時、大階段下。

それが竹が見上げる先にいる女の指定した時間と場所だった。

単衣の銘仙。緑色の羽織。

大神深翠は首だけで見返り、まるで来迎を仰ぐかのように眼を細めて、階段の中腹に佇んでいる。

その表情は放心しているようにも、愉悦の表情にも取れる。纏めていない黒髪が風に靡いている。

化粧気のない顔が月光に照らされて一層冷白に映る。

一日ぶりに見る彼女の顔がとある女と重なる。

しかし、彼女の瞳はその名の通り、より深い翠色。

不意に月明かりが雲に隠れた。

月光の残滓がにんまりと笑った口元だけを映す。

それは幾分神秘的で、過分に魔的な笑みだった。

深翠が体を竹の方へ向ける。

「全てを知ってもここに来ましたか。それがあなたの答えですか？」

夜に馴染む声が頭上から降ってきた。

啞えていたタバコを手に持ち替えて、竹は言う。

「まあ、そういうことだね。まさかあんな形でネタばらしされるとは思わなかったけど」

「現実なんてそんなものですよ。劇的なものにはなりません」

「そうかもな」

劇的な、ドラマチックな現実とは造り物の現実ということだ。

つまりは張りぼての贗物。

例え面白味に欠けたとしても、そんな贗物よりは嘘のない現実を選びたい。

そう思ったから竹はここに来たのだ。

「でもまあ着替え取りに部屋に戻ったら、狼が手紙くわえて待ってたってのは多少劇的だったか」

「かもしれないね」

「大神さんからのラブレターは二通目だ」

「それは一通も出した覚えはありませんが？」

1日前ならば笑みの一つでも交わしたであろう軽口の応酬に、二人は表情を動かさなかった。

「……あの謎生物は大神さんのだったわけだ」

「はい。知らないというのは嘘でした。そして正しくは緑影の狼といます——出てきなさい」

深翠が翠の瞳で自身の影に命じると、足元に出来ていた影が千切れ、狼の形をしたものが数頭現れる。

その暗緑色の不思議な体色は彼女の髪の色と良く似ている。

「この子たちは大神家に伝わる、忠実なる影生物」

「月読の、大神翠の血を取り入れたことで発現した大神の異能——だっけか」

「そうです。この力を発現させることが、代々この地に根付いていた大神が月読に従った本当の目的でした」

「発現……ねえ」

最後のタバコを足で踏み消し、竹はポケットから一通の手紙を取り出す。

それは緑影の狼が運んできた、大神深翠から竹に宛てられた手紙。その手紙には大神翠が語ったものとは別の大神の歴史が記されていた。

それは六百五十年なんて長い歴史ではない。

たった一組の親子が選んだ背信の物語。

それがこのわけのわからない話の最後のピースにして解答編であった。

古文書の通りに生まれた双子。

大神桂里と大神真上。

大神深翠という神に最も近き者を生み出す為の最後の装置。

ただそれだけだった存在にはしかし、どんな偶然でも起こりえない事が起きていた。

古文書に記された通り六百五十年掛けて生まれるはずの、月読の始祖に最も近き者。

それは双子であり夫婦だった彼らの代で——完成してしまっていたという。

「月読の力は過去を知る力か……予知つてのはどこにいったんだ？」

「あれも嘘です」

ぬけぬけと嘘を嘘と肯定した深翠は表情を変えずに続ける。

「私の両親は大神翠にも匹敵し得る力を持っていました。そしてその力によってこの地に刻まれた大神の歴史、更に月黄泉文書に蓄積した歴史を知ってしまいましたんです」

自らの存在が、いや、この地に生きていた者たちの存在が全ては

たった一人の結果を生み出す為の過程にすぎなかったことを。

幾人もの人間が自らの血の下に犠牲になっていったことを。

本来なら知ることが出来なかったはずの真実。

知らなかったからこそ、真上、桂里、以前の者たちは何の疑いもなく古文書に従うことが出来ていたのだろう。

片方の血は月読という神が残した使命を全うする為に。

もう片方の血は狼を祀る一族としての目的を達成する為に。

それは、そうなるべき運命の道筋が敷かれていることに気付かなかったからこそ、信じ、選ぶことが出来た道だった。

しかし、夫婦はその事実、そしてその先にある運命に気付いてしまった。

だが気付いたところで、どうしようもなかった。

自分たちが子を作らなければ、運命に抗えるのはまず間違いがないのだがしかし、それは例え真実を知らなくとも自分たちに命を繋げる為に死していった者たちへの冒涇であり、何より――彼らはまだ死ぬ自分たちの子の存在をなかった事になど出来なかったのだ。だから彼らは大神深翠を生んだ。

「優しすぎたんです。父と母は。自分たちの事だけ考えていれば良かったのに、見ず知らずの人たちの事まで考えて」

「それは自分も含めて？」

「当然です」

深翠は即答する。

それは自分は自分の事しか考えていない、という宣言にも取れた。しかし――それは違う。

本人は気付いていないかもしれないが、少なくとも大神深翠は自分の事だけを考えて行動しているわけではない。

竹は階段上の少女の誤りを訂正する。

「それは無理な選択だ。会ったことはないけど、断言できる」
ピクリと深翠の眉が不快気に動く。

「断言できる？ 天倉君。あなたに何がわかるんですか？ 父と母

に会ったこともないのに――」

「ああ、そうだな。でもわかる。大神の一族つてのは本質的に優しいみたいだ。だからそんな選択が出来るわけがない。大神さんさ、あの時、オレが暗殺者の一人を殺した時、泣いてただろ？」

あの襲撃者の依頼者は大神深翠だ。

自分の依頼により人が死んだ事に、彼女は間違いなく悲しんでいた。

「何を馬鹿な――私は泣いても悲しんでもいません」

「嘘だな。だったらどうして自分があの三人の依頼者だったことを手紙に書いた。あれはせめてもの懺悔だったんだろ？」

「……」

竹はその沈黙を肯定と取った。

「知ってると思うけど、オレは大神翠に会った。彼女は運命に殉じた夫の為に、運命に抗うことを決めて、その魂を牢獄に縛り続けた」

「……………」

「最後に君の両親、大神真上、桂里。彼らは自分たちに命を繋げてきた人の為に、生まれてくる娘の為に一時的に運命に乗ることを善しとしながらも、その運命の終わりに抗う為に色々と策を打ち――そしてその姿になった」

竹はゆっくりと片手を持ち上げ、深翠の足元の影たちを指差した。

「どれが君の両親だ？」

「――っ?!」

深翠の顔に動揺が走った。

彼女を護るように竹と対峙していた暗緑色の狼は、その動揺を宥めようとしたのか一声喉を鳴らし、そして竹に向かって獯猛に唸った。

それにより平静を取り戻した深翠は竹に問う。

「……どうしてわかったんですか？ この子たちの正体が。その手紙にはそんなこと書かなかったはずですが」

「あほか。書かれていた事を丸々鵜呑みにするわけないだろ。これまで嘘を吐かれ続けたんだから真相の究明くらいはする。時間もかなりあったしな」

緑影の狼は月読の血を取り入れたことで発現した大神の異能。確かに事実だが、真実ではない。

緑影の狼——それは月読の血を取り入れた後の大神の死した後の姿。

巫女——いや、大神翠の表現では御子たちの魂の残滓。

それがかの狼たちの真実だった。

竹はそれを知識と経験、そして勘により導き出していた。

「そいつ等と会う度に僅かに意思みたいなのを感じていたんだ。手紙を読む前は、いや、手紙を読んだ時もそれは使役者の意思なんだろうって納得した。

でもどこか違和感があった。手紙の通りなら使役者は大神さんだ。だけどそいつ等から感じた意思是、微妙にそれとは違う気がしたかな。

だから仮説を立てた。あの狼には使役者とは別の意思があるんじゃないかって。

なら誰の意思なのか……そんなもん、答えは一つしかないだろ」

その異能は月読の血と交わることにより発現したものというのなら、選択肢は一つ。

大神深翠以外の月読の血を引いた大神家の者である。

「確かにこの子たちの正体は、これまでの大神家の人々の成れの果て。ですが、少しだけ訂正があります」

「何？」

「この子たちには本来、個別の意思というのはありません。いくら月読と大神の混血たちとはいえ、死してなお意思を残すことなど不可能でした。ですが——」

死すれば次の者の影の中に溶け、個ではなく全として、ただ従うだけの影となるのが緑影の狼という異能。

魂を意思のあるものとして存在させることなど、大神翠のレベルで漸く可能な技術——

「そついうことか……」

竹は深翠の言わんとすることがわかった。

真上と桂里。

歴史に先だって完成してしまった夫婦。

彼らは大神翠に匹敵する才を以って——意思のある魂を娘の影に留めたのだ。

「そうです。父と母がこの姿になったのが1年前。天倉君には両親が失踪したといった日のことです。その結果は見ての通りです」

「成功と失敗が半々つてところか……」

暗緑色の狼を見ながら竹は言った。

「はい。父と母の魂は、少しの意思を残して、その殆どが影の中に呑み込まれてしまいました」

大神翠は成功した魂の存続。

それは月読として天岩戸に座した大神翠と、そういった世界とは関わらずに生きていた真上、桂里の力量の差であり、無機質なものを媒介に自身の魂を組み込んだ大神翠と、他者の魂の集合体であり、本来、意思を残せぬ異能に意思を残そうとしたことの差。

更に付け加えれば、それが月読寄りの力ではなく、大神寄りの力だったことも災いしたのかもしれない。

だがそれでも、失敗でないことが救いだった。

少しでも二人の意思を、魂を残せたのなら成功と同義なのだ。

何故なら——

「手紙にも書きましたが、その日より半年ほど前に父と母は私に全てを語ってくれました。そして私の命運が何時尽きるのかを教え、そうさせない為の手を講じました。その一つが、私を殺すはずの人物に私を護らせること。私が天倉君と同じ高校に通ったのも、その為でした」

彼らは運命を矛盾させれば違った結果になるのではないか、そう考えたのだ。

下手に竹を遠ざけなかったのは、違った歴史には必ず修正、調整する者が現れることに気付いていたということだろう。

事実、竹の考えた通り、深翠の両親はそれに気付いていたようだった。

「私を殺すはずの役が消えてしまった事で、別の人がその役に当てられる可能性は十二分にありました。だから父と母は、私を狙っているという役に、自分たちを当て嵌めてみることにしたんです」

大神真上と桂里は恐らくこう考えたのだろう。

肉体を失っても、その魂が僅かでも残っていれば歴史の登場人物としての資格はあるのではないか。

それが成功すれば、運命を騙すことも可能ではないか、と。

一度役を当て嵌めてしまえば、新たな役者は前の役者が退場するまでは現れない。

だが既に二人は魂だけの存在として、殺すべき大神深翠の支配下にいる。

いくつもの矛盾を孕ませる事で夫妻は運命を騙し、抗おうとしたのだ。

全ては一人娘、大神深翠の為に。

大神翠と深翠の両親と運命と。

三様の思惑が物語を混乱させていた。

それがこの話の真相だった。

翠の章 24（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

最近週1更新もおぼつかなくてすみません。

今話は月曜に載せるつもりだったんですが、修正しているうちに延び延びに……申し訳ございません。

翠の章 25

「でもその試みも結果的には失敗でした」

「どうして？」

「天倉君がそれを言いますか。あなたは自分の為すべき事をする為にここに来たんですよ？ 全てを知った上で」

彼らとて運命の強固さを甘く見ていたわけではない。

ただ見誤っていただけ。

一切の希望など、その前で抱くことすら愚かなことなのだ。

そう。竹は今、自分の役目を果たす為にここにいる。

それは大神深翠を殺害するという役目。

竹は運命の奴隷となる事にしたのである。

そうするのが楽だから。

これを自己保身と揶揄するのは事情を知らぬ者だけだろう。

それだけ決定されている運命に逆らうというのは、とんでもない痛みと代償を必要とする。

重い選択なのだ。

しかし――

「いや、まあそのつもりだったんだけどね……」

竹はこの期に及んで悩んでいた。

それは大神深翠と対面したからこそその悩み。

人殺しをなんとも思わないような、あるいはそれを当然と考えられるような人物ならば竹は躊躇しなかっただろう。

だが深翠は運命という存在を知り、緑影の狼という異能を持っていたても、人の死に、自らが関わって命を落とした者の為に涙を流せる一般人なのだ。

相対したことではつきりと感じた優しさ。

何度見ても神性を宿していない存在。

それが竹の選択を惑わす。

だが深翠はその竹の迷いを鼻で笑った。

「——ははっ。その悩みはお門違いですよ。天倉君。私が優しい一般人？」

神性がない？」

あなたは大きく見誤っています」

「何？」

「私があの人を雇って私自身を襲撃させたのは、確かに私の独断です。」

それは天倉君の実力を確かめる為でもあり、私を殺す役目を自分たちに当て嵌めるといふ父と母の思惑が失敗していた場合の保険でもあり、そして何より私が確かに狙われていると、天倉君に思わせる為でした。

——だって信じてもらえないと騙せないのでから。その結果、三人ともが死んだわけですけど、天倉君、わかってますか？ あの人うちの一人は、私が殺したんですよ？」

あの男はある事か口を割ろうとしました。だから殺したんです。

あの時はまだ私が首謀者としてバレルわけにはいかなかったですから」

淡々とした口調で深翠は言った。

あの男に関してはどうも、始末しようとは思っていたが、確かにあの時、口を割ろうとした男の頭部を噛み砕き、絶命に追い込んだのは緑影の狼だった。

だが——

「緑影の狼には僅かでも君の両親の意思が残ってるんだろ？ だって……」

実行したのは深翠の意思ではなく、そちらの意思ではないのか。「違いますよ。何を言っているんです。話を聞いていましたか？ この子達は、忠実なる影生物だと。あの時、この子たちに命じたのは私です。口を割るようなら——殺してしまえって」

深翠はそう言って、冷たく笑う。

しかし、その言葉に竹は納得がいかない。

深翠の言葉通りなら、彼女はあの狼たちを完全にコントロールしていることになる。

だがそれは竹の中にある常識で考えると不可能なのだ。

緑影の狼という異能。

大神の御子の末路たるそれは、神性を感じさせない一般人の少女には到底御し得ない異形の力なのだ。

彼女の両親がその影の内に自らの意思を残そうとしたのは、物語の演者として魂の存在を残す為だけではなく、深翠がこの力をコントロール出来なくとも自分たちの意思での行動を可能にする為だと竹は考えていたのだが――

「それが間違いだと言っているんです。父と母がこの影の中に身を堕とすのに、1年前を選んだのには理由があるんですよ」

深翠はそう言って着物の胸元に両手を添えた。

何をするのか、と竹は深翠の事を凝視した。

すると目の前にいる少女はただの一般人。

そう認識していたはずの竹の体の芯に、何か冷たいものが走った。自身の愛刀の入った長袋を持った左手に無意識に力が入る。

「そもそもおかしいと思わなかったんですか？」

大神真上、大神桂里。

月読、大神翠が読み取った歴史の中での完成品としての力を前倒しで得てしまった双子。

その近親姦によつて生まれたこの私が何の神性も持っていない。

それに疑問はなかったんですか？」

「――え……あ？」

確かに深翠の両親がその言葉通りに、大神翠に匹敵するほどの力を持っていたのなら、その娘である彼女にもその力が受け継がれていると考えた方が自然だろう。

だがこれまで深翠を見た限りでは、彼女には神性を全く感じていなかったのも事実。

「——天倉君。あなたは本当に何も見えていませんでした」

深翠はそう言うと、添えた両手でもって着物の襟を掴み――

「これが私の本当です」

胸元の肌を竹に見せ付けるように両側へと引っ張った。

途端、竹の視線が一点に集中した。

大神深翠。

彼女の白磁のような綺麗な肌が露出する。

朧月に照らされることで、一層淡白く見えるそのはだけた少女の胸元。

穢れを知らない少女の肉に禍々しい翡翠色を放つ宝玉が食い込んでいた。

「わかりますか？ わかりますよね？ この宝玉がどんなものであるのか」

深翠の胸元に埋め込まれた親指ほどの宝玉。

それは――

「……それで神性が感じられなかったのか……いや、まさかそんな物が出てくるとは思わなかった」

神性を抑え、隠匿する効果を持つ封印具。

それが彼女の胸に食い込んだ宝玉の正体である。

封印具は多々あるが、深翠の使っているものは一目見ただけで最上級のそれとわかる一品だ。

どこぞの蒐集家が見れば喉から手が出るほど欲しがるだろう。

「君の両親が1年前を選んだ理由がそれか」

「そうです。影に意思を残す為の技術はまだ完璧とはいえない段階でしたが、神性を宿さない身で私が緑影の狼たちを継承し、コントロールできるようにする為には1年近くは必要だったんです。だから不完全な段階でも強行する必要があった。緑影の狼を完全に使用できる形でないと、神性も何もない私が暗躍するのには無理がありましたから」

それはこの数日間のことだけを言っているのではない。

例えば暗殺者たちへの依頼もそうだ。

この1年間、彼女は今日の為に陰で活動していたということだろう。

竹が納得した直後——深翠から表情が消えた。

「——それでは幼い頃、打ち込まれたこの封印具。今その封印を解きましょう。

……天倉君。

あなたの選択、失敗ですよ」

深翠はそういうと胸の肉に爪を食い込ませ——埋め込まれていた宝石を周りの肉ごと力任せに引き千切った。

鮮血が飛び散り、着物の襟を濡らしたのは一瞬だけだった。

宝石が今まで埋め込まれていた部分と、自身の手によって千切られた部位が、何もなかったかのように修復されていたのだ。

だが、そんな回復力など今は見るべきところではない。

真に見るべきところは——呼吸することさえ憚れるようなその威容。

月読、大神翠の神々しさと比べても引けを取らぬどころか、一目で凌駕しているとわかるその神性。

何もかもが圧倒的だった。

一切の拘束のなくなった本物の手から、役目を終えた宝石が陽炎のように消えていく。

深翠は乱れた襟を直すと、静かに、祝詞でも読み上げるように言った。

「我が名は大神深翠。

狼を祀る大神の一族にして、月読の最後の御子である」

夜風に流れる声は、悠久の大森林さえ震わすかのような威圧感。

長年抑えつけられ、塞き止められていた力が止め処なく彼女の内から溢れ出、長い緑黒の髪がその奔流に舞い踊る。

まぎれもなく古き神の再臨であった。

「古代より現代に転生を遂げた三貴神の石柱として、この場に神意

を託そう」

指先がまだ赤い片手で、深翠は階段下で自身を見上げる竹を指差す。それは神託を与える古代の巫女のような立ち振る舞い。

——否、今この時、大神深翠は神であり、同時にその言葉を伝える巫女なのだ。

「天倉竹。

私はここで果てるつもりはありません。

ここで果てるのは——あなたです」

緑翠に燦然と輝く両の瞳。

新たな神の石柱、月読の巫女の顕現であった。

翠の章 25（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

二話連続投稿ですが、前話の後半部分的な今話ですのであんまりそんな気がしないかもしれません。

やっとここまで来ました。……長かった。翠の章を書くにあたって一番最初に頭にあったシーンだったので、妙な達成感があります。まあ自分が遅筆なだけですし、達成感は全部終わってから感じろって話ですね。すみません。

例によって話中でおかしな部分がありましたらご報告ください。それでは更新遅いですが、これからもお付き合いしていただければ幸いです。

*

「もし最初から君がその力を誇示していたら、オレは依頼なんか受けなかっただろうな」

これだけの神性を持つ相手に護衛を頼まれたところで説得力に欠けるし、怪しすぎていくら竹でも拒否しただろう。

「でしようね。それを見越して時間をかけて神性を隠したんですから。……それにしても随分と、余裕があるんですね」

「そうか？」竹は小さく肩をすくめる。

何の枷もなくなった自身を前にしての竹の態度に、深翠は疑問を持った。

解放されたばかりで研磨こそされていないが、それでも強大すぎる純粹な力の塊。

普通であれば身を竦ませ、跪くか逃亡するかの一択に限定されるだろう猛々しさ。

だがそれを前に竹はあくまでもいつも通りだった。

それは向こう見ずの蛮勇でも、勇敢な心を持っているからでも、ましてや痩せ我慢でもない。

こういう状況に、こういう相手に、慣れている。

そして——これ以上の相手に出会ったことがある。

ただそれだけだった。

「でもまあ、少しは驚いてるよ。そんな隠し玉を持ってたとは思わなかった。いや、まぢに」

そうは言ったが、この言葉は半分本当で半分嘘だった。

確かに竹はこの状況には少なからず驚いている。

だが、この状況を予想していなかったといえは嘘である。

そもそも、わざわざ時刻と場所を指定してくるような相手に何の

警戒もせず、のこのこそれに従ってやってくるわけがない。

リミットぎりぎりまで、自分で考え付く限りの可能性は用意してきたのだ。

片手に持った、愛刀がその証拠だろう。

だがしかし、仲間内でも思考役に回ることがある竹ではあるが、それでも彼はそれが本職ではない。

だからいくら竹があらゆる可能性を用意したところで、予想の上をいかれることは出てくる。

更に言えばその予想外の事態とは、得てしてこういう場面ほど多くなる。

「隠し玉ですか。面白いことを言いますね」

深翠はそう言って、竹から背を向けた。

そして一段、二段、と階段を上っていく。狼たちもそれに続く。

竹はそれを無言で見送りながら、長袋の中から一振りの刀を取り出す。

不要になった袋を捨て、白塗りの鞘を持つ手に力が籠もる。

背を向け、無防備な相手にそのまま斬りかかるのは造作もないことだったが、竹は未だに深翠をその『相手』として認識するか判断に迷っていた。

だが判断に迷っているのなら、どうして竹は刀を取り出したのか。答えどころか、そんな疑問を持つことのない無意識の行動。

その行動の答えは、深翠が階段を上りきったところで判明する。

「月読の存命中、この先には社がありました。その社は彼女が死亡すると同時になくなった。それは彼女が自身の魂を閉じ込めた結果内に、社を持ち込んでいった為です。ですが、ただの建造物がそのような空間に持ち込めると思えますか？」

深翠は先日は知らぬと首を振った過去の出来事を語る。

それはその身に宿した力が解放された恩恵だろうか。

それとも元から知っていただろうか。

恐らく後者だろうと理解しながら、竹は深翠の問いに答える。

「思わない。てか無理だ」

存在しないものとなることで維持されてきたあの場所に、形あるものが持ち込めるわけがない。

「そうです。それは不可能なこと。ですが、あの社がただの建造物ではなく、月読の力の一端によって建てられていたものだとしたらどうですか？」

「……それなら可能だ」

竹はそう答えながら、深翠の問いかけの意味を察した。

その竹の表情に、深翠は薄く微笑みかけ――

「神殿建立――開門」

無感動な、けれど力の込もった声で呟いた。

少女の瞳が一段と緑翠に輝きを増す。

途端、比喻ではなく大森林が咆哮をあげるように振動を始めた。

何か洒落では済まされない事が起きようとしている。

緊張感と危機感、そしてこうなることを防がなかった後悔が押し寄せる竹を見下ろしながら、月明かりをスポットライトに月読の巫女は言う。

「隠し玉というのは、こういうことを言うんですよ。天倉君」

大神深翠の目の前に何かが陽炎のように揺らめき聳え立つ。

それは三つの鳥居を組み合わせた翡翠色の三ツ鳥居。

竹のいる場所からは見えないが、彼女が呟いた言葉から察するに敷地の奥には社が建っているのだと思われる。

見えずとも、確かにそこにあるというプレッシャーが醸されているのだ。

その得体の知れない緊張感からか、乾いた喉を潤すのに竹は唾を飲み込んだ。

「それが……大神翠があ空間に社を持ち込んだ力ってことか」

「その通りです。概ねは」

「概ねは？」

一体どういうことだ、と竹がその言葉の意味を問うた。

だが深翠はそれに答えなかった。

彼女は身を翻し、首だけで見返ると、

「運命の通りにしたいのならば上がってきてください。
ただし一つだけ忠告をしておきます。

この鳥居をくぐった時、あなたは命を落とすでしょう」
と言いつ残して敷地の奥に引っ込んでいった。

「……」

竹は深翠が去っていくのを見送った後少しだけ、このまま帰ろう
かと考え――

「あほか……」

そんな風に考えた自分に対して、ため息をついた。

去り際の深翠の台詞。

それは月読の巫女としての神託ではなく、大神深翠としての忠告だ
った。

少なくとも竹にはそう聞こえた。

彼女が自分の事をどんな風に形容しようとも、どれだけの神性を持
った異能者であろうとも、やはり彼女は――優しいのだ。

それがどんな状況であろうとも、変わらない彼女の本质。

そんな美少女を前にして自分が、何もかも放り出して、未解決のま
ま帰るわけにはいかないだろう。

解決士はゆっくりと、神殿への階段を上り始めた。

後悔と危機感を飲み込んで。

階段を上り切ると、そこには彼女の言葉通り、つい数時間前には
なかった神殿がああ空の地に建立していた。

その外観は多少の違いはあるものの、大神翠との謁見場となった社
と酷似している。

社の入口前にいる深翠は、竹が上ってきたのを見ても表情一つ変え
ない。

ただ翠色の瞳が竹を捉えていた。

本能が引き返せと警笛を鳴らしているのを無視して、翡翠色の鳥居

をくぐる。

それを確認した深翠は俯き加減に小さく呟いた。

「……本当に、あなたは――」

その先は聞き取れなかったというよりも、声になっていなかった。竹も深翠がなんと言ったのかは問わない。

三ツ鳥居の下をくぐってから、得体の知れぬ不安が全身を包んでおり、そんな問答をしている余裕は奪われていた。

深翠はそんな竹に語りかける。

「月読の力は万物の過去の記憶を記録として知る力。その力は『月夜見』。」

でも月読の巫女たる私はそれだけじゃない。

神域に足を踏み入れるのが限界だった大神翠は、この社を建てるだけが留まった。

大神翠と同等の神性を持つ両親も同じ。

でも私は、この異能の力を正しく機能させることが出来る。

あなたは私がこの時と場所を指定したのに、理由があるのは見抜いていましたね。

でもその答えが何なのかまではわからなかったはず。

その答えが、これです。

月が頭上に昇る時刻。統治者としての契約をした地の恩恵を得ることで、逆らう輩を始末させる神の社を健在させる神域の業。私だけが持つ異能」

『神殿建立』。深翠が先ほどそう呟いた時、確かに大森林が呼応したのを感じた。

恐らく、大神の当主が何らかの力を振るう時に、力を貸すという契約が過去よりされていたのだろう。

大神の当主がこの地の統治者と名乗っていたのは、大神の名残、意識の問題だと大神翠は言っていたのは大嘘だったということだ。

竹は内心で消失した女に毒吐き、そこまで回復した精神を更に落착けるように努めながら、なお続く深翠の話を聞く。

「この『神殿』へ到る『門』をくぐった者は、過去の記憶の記録を読まれ、その者にとって最も困難な力を持ったモノを顕在させられます。

さて、これで説明は終わりです。同時にこの力を使う為の定められた手順は踏んだ。

月の出る夜に見て、月の出ぬ黄泉へ誘う力を持った現人神。それが私。

それが月読の巫女。

行きはよいよい、帰りは怖い。

——天倉君。あなたを打倒するのは、どんなモノなんでしょう」
深翠の話が終わった瞬間、竹は驚愕の声をあげる。

「んなつ!？」

ソレを視界に納めた瞬間、全身が恐怖に竦んだ。どっと汗が吹き出る。

硬直した体で唯一動いていたのは、情けなく震える足だけだった。閉ざされていた神殿の扉。

その扉を開いて——真正正銘の最悪が現れたのだ。

だが深翠は自分がその力で以って創りだしてしまったモノの正体が判らない。

あまつさえ現れたモノの外観を見て、

「何ですか、これは？　これが天倉君を打倒するモノ？」

と期待外れな口ぶりを見せている。

それもそうだろう。

二人の視線が集中するそれは、明らかに奇怪な存在だった。

辛うじて人型ではあるものの、顔もなければ服も着ていない。

人形の素体とでもいうのだろうか。

それが誰であるのか特定する為に、必要なモノが構築されていない。

ただ一つそれが誰であるのか知らしめるものは、地面に付きそうなほど長い髪の毛と、深翠よりも更に頭一つ背の低い小柄な少女の

姿。

不完全で未完成。

——当然だ。

例え月読の巫女という神の頂にいる者であろうとも、ソレを完全に顕在させることなど不可能なのだ。

だがそれでも——この場で竹を圧倒させるのには十分だろう。

深翠が呼び出したモノは間違いなく、竹の記憶にある中で最も困難な相手だ。

その事実には、竹と深翠の足元にいる狼たちは気付いていた。

影の狼は現れた存在に恐怖しながらも主を護る為に低く呻り声を上げ、天倉竹は——

石畳を全力で駆け抜け、大神深翠を狙ったソレの一撃を受け止めた。

攻撃を受け止められた衝撃に舞った長い髪の毛。

その色は、目も眩むほど鮮やかな虹色。

『唯一の——』
オリジナルワン

かつて竹を含めた十三夜が束になっても、勝負にすらならなかった全知全能の存在。

岩戸の向こう側に居た、虹と黄金の少女。その贗物。

それが深翠が呼び出してしまったモノの正体だった。

「まったく、本当に……」

「——え？」

起きた事態に深翠が呆然と声を漏らす。

だが今はそれに付き合っている暇は無い。

それに構わず、竹は深翠の横腹を蹴りつける。

深翠の身体が横っ飛びにすっ飛んでいく。

手加減をしている余裕はなかったが、仮にも神の一柱だ。死にはしないだろう。

影の狼たちが獯猛に抗議の声を上げている気がするが、気にしない。

そもそもこの深翠への攻撃に対して反応できていなかった獣風情に、非難を受けるいわれはない。

それにしても自分は何をやっているのだろうか。

何故、深翠を護るような行動を取ったのか。

考えて身体が動いたわけではない。

気が付いたらそうしていたというだけだ。

だがしかし、もしも考える余裕があったところで取った行動は同じだっただろう。

現れたモノが創り出されただけの贗物でも、ソレが目の前で起こす行動だけは認められない。

それが例え、運命に抗うことだとしても。

それだけは認められない。

何故なら——竹は自分たちを恐怖に屈服させた、この全知全能の少女が大嫌いだから。

もう二度と屈服するわけにはいかないのだ。

それは男の子としての、単純なプライドだった。

とはいえ——攻撃を受け止めていた左腕が鈍い音を発する。

折れたか良くて痺が入った音だ。

「っ……本当になんてもんを呼び出してくれんだか」

これは死ぬかも、という諦めに似た思いで竹の胸中はいっぱいになっている。

そんな中で、竹は痛みを殺しながら呟く。

「でもまあ——これでわかりやすくなったかな。何をどうすればいいのか」

大神深翠に引導を渡す役。

それは天倉竹でも、彼女の両親でもなくなっていた。

それは彼女の両親が、いくつもの手を講じた末、作り出された道筋。

天倉竹の記憶の記録と、大神深翠の異能が交わる事で生まれた新たな歴史。

運命の筆記者が直々に終わらせる役目に就いたのだ。

ならば残された竹の役目は一つだけ。いや、元から竹の役目はそれだけだった。

大神深翠を護る。

それが今の竹のやるべきことだ。

「ってことで、大神さん。死にたくなけりゃ、オレに護られとけ！」
そう大声で叫んだ竹は、やけくそな笑みを口元に浮かべながら、全能の出来損ないに向かって刀を振るった。

翠の章 26（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

また更新が空いてしまったので、かなり急ぎ足で書きました。その為、見直しをほとんどしていなかったりします。なのでおかしい部分があればご連絡ください。

残りシーンはあと3つなので、きっちりまとめることが出来ればあと2、3話で終了予定です。とか言いながら、話数が増え続けているが現状ですが、一応そのつもりで書きますのでラストまであと少しお付き合いください。

不利な体勢からの攻撃ではあったが、竹の全速での一撃は難なく避けられてしまう。

それが竹と『唯一の一』オリジナルワンとの力の差。

これはもう力の差というよりも、ステージの差といっても良い。リトルリーグとメジャーリーグ以上の違いのある相手。

だがそんなことは先刻承知の事実。

打たれてしまうなら、打たれることを見越して守備位置に付けば良い。

攻撃が避けられてしまうのなら、避けることを前提に戦えば良い。ただそれだけの話。

だが、もしもこれが本物の『唯一の一』オリジナルワン相手ならそんな理屈は通用しない。

守りに付いたところで、スタンドにホームランを打たれるのではどうしようもないのと同じ。

しかし、大神深翠の異能によって創り出された人型の異形は、間違いさえ犯さなければ打ち取れる。

そんな確信が竹にはあった。

「……げほっ、これは、一体……どういう……？」

蹴り飛ばされた深翠が咳き込みながら立ち上がる。

どうやら大事には至らなかったらしい。

中々——というかなんか丈夫のようだ。

深窓の令嬢という設定はどこにいったのか。

ともあれ彼女はこの予期せぬ状況に混乱しているようだった。

それも仕方のないことだろう。

満を持して使うに到った月読の力の結晶とも呼べる異能。

最強の一つに数えられるであろう神の御業。

その結果が、創り出した存在に自らの命を狙われるなどとは思っても

しなかっただろう。

だがこれは当然といえば当然の結果。

過去の記憶からそれを打倒し得る者を創り出し、使役せしめる力。それは言い換えれば、最も相性の悪い者を呼び出すという力。

『デットコピー神の複製品』。

全能の偽物である竹にとってその相手とは、オリジナル本物以外にないだろう。

そしてそのオリジナルこそ、ありとあらゆるものの上位に座する絶対的存在。

そんなもの例え神の一柱であろうと、制御できるわけがないのだ。だから別に深翠が悪いのではない。

この力を向けた相手が悪かっただけの話だ。

竹はその場から飛び退き、深翠の脇に立つ。

また蹴られるとも思っただろうか、びっくりと深翠が身を硬くする。

先ほどの宣言を聞いていなかったのだろうか。少しだけ心外だったが今はあれこれと話している余裕はない。

「あれは君の命を狙ってる。蹴り飛ばす前にオレが言った事、信用出来る？ 出来るなら、大人しくしてくれ」

竹は早口に伝えるべきことだけを伝えた。

一瞬だけ、深翠に顔を向ける。

深翠は緑翠に輝き続ける瞳で、竹の表情に嘘がないか探すようにねめつけた。

その時、彼女の視界にだらりと力なく垂れ下がった竹の左腕が入った。

「……あ」

それを見て深翠は小さく声を漏らし、疑いの視線を引っ込めた。

「わかりました。何がなんだかわかりませんが、今だけは信用します。ですが——」

「何？」

「大人しく護られているつもりはありません。その左腕の借りくら

いは返します」

ただでさえ彼女は今の今まで竹の事を殺すつもりだったのだ。その上で護られるという状況が耐えられないのだろう。

それは深翠の意地、そして――

「ほら、やっぱり優しい」

竹はわざと揶揄するような口調で言つて、肩をすくめる。

「なっ!?! ち、違います! ただ私は自分が蒔いた種を刈るのは当然のことだと……!!」

「あらそう。そりゃ真面目なこと……」

竹はそう言つて、彼女の体に先ほどまでの強張りがなくなったのを確認すると、静かに刀の柄を手の平の中で反転させる。

「――っと、そろそろお喋りはお仕舞いみたいだ。それじゃあ大神さん――ちよつと邪魔だから眠つてて」

言い終わりざまに竹は素早くその場で体を反転させる。

「は――?」

戸惑つた声が途中で途切れ、同時に深翠の体はどさりと石畳の上に力なく崩れ落ちた。

竹が深翠の首筋に刀を叩き込んだのだ。

別に殺してはいない。峰打ちである。

まあそうはいつでも意識を瞬断させる鋼の一撃に、打ち込まれた部位が赤黒く変色してきているが、彼女の体が頑丈なのは実証済みだ。大事には至るまい。

「これでよし。次はお前らか」

竹の視線が影の狼へ向けられる。

深翠の意識が消えるのと一緒にいなくなってくれば面倒はなかったのだが、まあいたraitで使い道はある。

ただ問題があるとすれば、たつた今の竹の行動に対して敵意満々なところなのだが、すぐに襲い掛かってこなかったところを鑑みるに、こちら竹の行動の意図を探ろうとしているのだろう。

確かな知性。ならば交渉の余地はある。

「あー、悪かった。でも、これはお前らのご主人様を守る為の措置だ。不意打ちだろうと、あれくらい避けられないなら間違いない足手になるからな。お前らは彼女を連れて避難しててくれ」

喋れもしない謎生物に語りかけるといのはシニカルなことこの上ないのだが、そう文句は言っていられない。

竹の言葉に嘘はなく、それゆえに緑影の狼等は判断に迷ったようだった、

「早く行け」

有無を言わさぬ口調で告げると、渋々といったように動き出す。数頭がかりで器用に深翠を、その背に乗せると風のように去っていく。

竹はそれを見送ってから、漸く肩の力を抜いて一つため息をついた。

人払いは済ませた。

あとは――決着を付けるだけだ。

「さて、と……これで良かったか？」

「――ええ、上出来ね」

竹が話しかけると、人型の異形は満足気に返答した。
だが相変わらずその顔には目も口も鼻もない。

それでもその贗物は声を発したのだ。

「上出来、か。ならこっちが本来の歴史だったと？」

「その質問に意味はないわ。あなたはこうして私の前に立っているのだから。月読の巫女を背にしてね」

くすくすという天上の笑い声。

まるで世界が語りかけてくるかのように、空気が振動する。

3年前と全く変わらぬ口調、声、そしてその威圧感。

不完全な成り形とはいえ、竹は改めて眼前にいるものがあの少女なのだと認識した。

「逃げ出したいでしょうがないんだけどな」

「なら逃げればいいわ。それはあなたが選択することだもの」

「オレが逃げたらどうなる？」

「月読の巫女が死んで終わるだけ」

「逃げなければ？」

「それを確かめる為に、こうして対峙する道を選んだのじゃない」

「確かにそうだな。なら——」

「そこまでよ。これ以上の時間稼ぎはやめてもらえる？」

少女の贖物は言った。

「時間制限付きの身体というのは不便なものだね。もう端から崩壊していくのがわかるわ。月読の巫女なんていったところで、この不完全な私すら維持し続けることが出来ないなんてね……ふふ、窮屈なんて感覚を味わうというのは面白い体験だわ。まあ——本当の私には還元されない感覚だろうから、無意味なのだけれど」

能力の許容量を超えて現れた少女の贖物はその言葉通り、一秒毎にその存在が崩壊しつつあった。

そうなのだ。

今日の前にいるのは、あくまでも竹の記憶から創り出されたものであり、本当の少女とは全くの別物だ。

竹は少女の初撃受け止めた時に、その確信を持っていた。

刀で受け止められたものを敢えてあのような受け方にしたのだが、あれがもし本物の黄金ならば、片腕など容易く持っていかれたであろう。

つまり対峙する異形は、あくまでも本物の贖物。

ならば勝機は十分にある。

何故なら——それは『神の複製品^{デッドコピー}』と呼ばれる、自分と同じようなものなのだから。

「どうやっても勝てないと諦めた相手が、不完全な上に着々と弱体化しているような好機を逃す手はない。そんな顔ね、『神の複製品^{デッドコピー}』」

虹色の髪の毛が、ちりちりと粉になっていく。

竹は全てを見通しているような少女の物言いに首を振る。

「いや、少し違うな」

刀の柄を手の平で転がす。

今度は、峰打ちにする必要はない。

「？」

「オレは『解決士』として、依頼された仕事を全うすることにした。ただそれだけだ」

竹の瞳が銀色の輝きを帯びていく。

「いいでしょう、『解決士』。本物をその瞳に映した偽物。あなたが選んだ物語の結末。とくと見せてもらいましょう」

顔のないはずの少女の贋物の口元に、笑みが浮かんだ気がした。

翠の章 27（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

今話に予定していたシーンが長くなったので、切りのいいところで区切って載せることにしました。
半端になってすみません。

*

息せき切って深翠がその場に舞い戻って来た頃には、すでに全てが終わっていた。

彼女が気を失う以前は真上を過ぎた辺りであった月の姿は、着々と西の彼方へ落ちようとしている。

一体、どれほど凄まじい戦いが繰り広げられたのか。

地面は抉れ、そして裂け、大神の家は全壊といつていい。

それは人と人の戦跡というには、いささか信じ難い規模の爪痕だった。

その変わり様に息を呑む深翠に声がかかる。

一声で疲労困憊とわかる色をしていた。

「――意外と早かったな……」

この荒地で唯一、以前と全く変わらない荘厳な佇まいを見せている社とは、対照的な傷だらけの姿。

まさに満身創痍であった。

竹はそれまで腰掛けていた社へ上がる短い階段から、のそのそと立ち上がる。

「夜明けまでは目を覚まさないと思ってたんだけど……回復力もさすが月読ってことか。全く、休んでる暇もありゃしない」

「あ――」

文句を言っでやりたかった。

問いただしてやりたかった。

言いたい事はたくさんあった。

だがそれが言葉にならない。

竹の身体の傷ひとつひとつが、自分自身の為に受けたもの。

それを理解して、言える台詞が見当たらない。

竹はそんな深翠の心境を理解して、口元を緩める。

いくら否定したところで、究極的なところで彼女は優しいのだ。それは言ってしまうえば甘さであり、素人臭さだ。

本来の彼女の立場なら捨て去るべき感情。

しかし、深翠は立場の上に生きてこなかった。

生誕した時から背負われた、重すぎる運命は確かにあった。それゆえに時たま裏の世界を垣間見たこともあっただろう。

しかし、それ以外は普通に暮らしてきたのだ。

月読の巫女という神の一柱ではなく、大神深翠として。

それは竹とは違う生き方。

生まれた時から運命を背負っていた、というスタート地点は同じようなものでも、その後の道のりはまるで違う。

だが竹が擦り切らせ、捨ててきたそれをこの期に及んで持ち続けられる、その無謀とも言い換えることの出来る尊さを否定できるほど竹も人を辞めてはいない。

竹は口元を緩めたまま言う。

「護衛の依頼、完了したよ、大神さん。結果的に君を殺そうとする役目を持った者は、こうしてオレが倒したわけだけど——まだ日の出を迎えたわけじゃない。オレの言いたいこと、わかるかな？」

竹の言葉に、深翠の表情が強張る。

「……はい。私は死すべき運命を、まだ乗り越えたわけではない」「そういうことだ」

ここで深翠が死ねば、全ては元通りに、何もなかったことになる。

「私を殺しますか。……仕方ありませんね。私は負けたん——」

「あー、違う違う。それは早とちりだわ」

「どういうことですか？ 私を殺さないでくれるんですか？」

「それも少し違う」

「だったら——」

戸惑いを見せる深翠に竹は静かに問う。

「一つ。一つだけ聞いておきたいことがある。とても大事なことだ」

「何ですか？」

その問いへの答えで、自分の生死が決まる。
それを察した深翠の声は硬い。

だがそれとは対照的に、竹の声はこの上なく穏やかだった。

「大神深翠。君はこの場で果てるつもりはないと言った。

死にたくない。

生きていたい。

それはどうしてだ？

その運命を知ったから？

それが両親の願いだったから？

その理由を教えてください」

大神深翠を死せる運命から救おうとした人物の動機はそれぞれあった。

運命を知った大神翠は、建前としては敗北者であり続けることを嫌った為。

しかし、それは突詰めれば結局は、愛した夫の敵討ちだった。

運命を知った大神真上と桂里は、建前も本音もなく、我が子をその血塗られた運命からただ解放したかった。

それが彼女等の原動力だった。

だがしかし、文字通りその身を犠牲にしてもらった上で、今日というこの運命の日を迎えた大神深翠。

——彼女だけは、未だにその理由が曖昧だった。

生きる理由。

死にたくない。生きたいと願う理由なんて、普通ならばそこまで意識せずとも良い問題かもしれない。

だがしかし、これだけの犠牲の上に、これだけの努力の上に今こうして生きていて、それを重々承知であるはずの彼女が、ただ流されるままに生きていたなどというのは、決して許されることではない。これまでの彼女は言ってしまうえば、両親が、大神深翠が敷いてくれたレールの上を進んでいただけにしか見えない。

先人たちが見せた執念とも言つべき言動。

それが大神深翠からは感じられない。

少なくとも竹にはそう見えた。

だから竹は問うたのだ。

死にたくない理由を。

生きていたい理由を。

「さあ、答えてくれ大神深翠。お前の本音を」

「……私は——」

竹の視線を正面から受け止め、深翠はゆつくりと口を開く。

その表情はこれまで見たこともないほどに、冷たいものに変化していた。

「私は別に——生きたいとも、死にたくないとも思っていないません」
まるであらゆるものに絶望したかのような空虚で冷淡な声だった。
その口元には、薄い冷笑が浮かんでいる。

「ただ、そういう風に脚本が描かれていたから、私はそれに従っただけです。」

私の両親がそして大神翠が描いた脚本に。

本当に迷惑な話ですよ。生まれる前から、そうなるように、そうするように決められていたなんて。

しかもそれがどれだけの犠牲の上にあるのかわかってしまいうんですから、断りようも、抗いようもない。

入り込む余地がなかったんですよ、私の意志なんて。

最初からひとつも関係なかったんです。

そんな状況で、私が生きたいと思う理由なんて用意できると思えますか？

わざわざ死にたくないなんて思えますか？

だってそんな風にわざわざ考えようが、考えまいが、結局は同じところに行き着くんですよ？

くだらないじゃないですか。意味ないじゃないですか。必要ないじゃないですか。

だから私は考えません。思いません。

生きたいとも、死にたくないとも。

だって馬鹿馬鹿しいですから。

むしろ私は——さっさと死んでしまいたいんです」

深翠の言葉に竹はひとつ納得がいった。

『唯一の^{オリジナルワン}の贗物。』

あれが創り出されたことは、彼女にも予想外だったことだろう。

しかし、あれは例え贗物とはいえひと目見ただけで、敵対するな
どという選択肢を奪うほどの力を感じさせた存在だった。

竹でさえ出来れば逃げ出したいと思ったのだ。

深翠も同じように感じたはずだ。

いや、完全なまでの未知。しかも自身の能力の暴走ともいうべき結
果により現れた存在を前にして、竹よりもその思いは強かっただろ
う。

だが彼女が取った選択は、竹との共闘。

無謀極まりない選択だ。

『神殿建立』という切り札的な異能は無論使えず、緑影の狼という
攻撃手段しか持たない彼女が足手纏いになるのは明白だったはずだ。
それなのに彼女は、竹と共に戦おうとした。

もしかすると、竹の蹴りも、首筋への刀での一撃も本当ならば避
けることも出来たのかもしれない。

あるいはあの狼たちならば、防ぐことが出来たのかもしれない。
しかし、それをしなかったのは——さっさと死んでしまいたい。

そういう思いが、大神深翠という少女の裏に隠されていたからだ
ったというわけだ。

「……なるほど」

「——なるほど、ですって？」

竹が小さく頷いたのを見て、みると深翠の顔が歪んでいた。
それは不快感と怒り。

「何を……何をわかったような気になっているんですかっ!？」

お前に——お前に一体、何がわかるという?!

私の何も知らないくせに!

私の本音に気付かなかったくせに!!」

湧き上がった激情に任せて、深翠は声を荒げる。

もうそこには、普段の大神深翠はいない。

嘘で固められた仮面を外した、大神深翠の本音がそこにあった。

豹変した深翠の怒声。

しかし、その程度でひるむ竹ではない。

「……あほか。お前のこと? そんなことわかるわけねえだろ。

だって、ずっと隠してたんだろ?

だったら気付けるわけがない。

それとも何か? 気が付いて欲しかったのか?

だったらそう言うてくれなきゃな。

残念ながらオレは、女関係は鈍感であるようにしてんだよ。

だって色々と面倒だろ?

——お前みたいのがいるからな」

竹は皮肉に笑った。

「……ふざけるな。私が今までどれだけ苦しんだと思ってる」

「だからそんなこと知らねえっての。だったら言ってみな。お前が

何に苦しんできたのかを。どうしてさっさと死にたいなんて思った

のか、冥土の土産に話してみろ」

竹は刃の先端を深翠に突きつけながら言った。

その竹の行動に深翠は薄く微笑をつくる。

「いいでしょう。それなら教えてあげますよ」

——何故、死にたいと思ったのか。

そこに行き着くまでの記憶。

それは月読の巫女、大神深翠が観てきた、ひとつの地獄。

翠の章 28（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

前話、今話、次話と合わせてひとつにする予定でしたが、予定通りいくわけもなく……未熟。

深翠は一段と低い声で、とつとつと語り始める。

「私に備わっている異能は都合三つ。

一つは『緑影の狼』。これは大神と月読の血の交わりにより発現した力。

二つ目は『神殿建立』。これは月読の巫女として、私だけに備わった力。

そして三つ目が『月夜見』。月読という神に備わった、過去を——いえ、万物の記憶を記録として読むことが出来る——最低の力」
複数異能保有者。

本来、人ならざる力というのは一人ひとつの原則があるのだが、深翠のように一人で幾つもの力を持っている者もごく稀に存在するのだ。

しかし、それでもせいぜい二つ。

三つも異能を持っている者など、世界中を探しても彼女くらいしかないのではないだろうか。

——それはさておき、最低の力とはどういう意味か。

竹は言葉を挟まず深翠の絞り出すような声を、ただ聞くことにする。

「『月夜見』という力は、両親から授けられて備わった『緑影の狼』や、その力の存在に気付くまでに時間のかかった『神殿建立』とは違い、月読、大神翠の血族の者ならば生まれた時から備わっている力でした。記憶を記録として読む力。

私はこの力の制御が出来なかった。

大神翠以上の力を持った存在、月読の巫女であろうと——いえ、だからこそ、この瞳に宿った力を扱うのには、当時の私は幼すぎた」
それは最も濃ゆい血を持つが故の悲劇。

「『月夜見』という力には、ある種の制限のある力です。それは自身より神格が低いものに限って、記憶の記録を読むことが出来る」と

いう制限。でもですよ？ そんな制限、私には掛かっていないのと同じことでした。人、動物、鉱物、人工物、液体、気体、この世界に存在するありとあらゆるものと比べても、月読の巫女たる私より神格の低いモノなんて、あるわけがないんですから」

確かに彼女よりもそれが高位のモノなど、ほぼ皆無であろう。

「——だから私は、その全ての記憶の記録を物心付いた時から、いえ、それよりもっと以前から読ませ続けられていたんです。その中でもとりわけ人間のそれは醜悪なものだった。

騙されるのは嫌なことだとわかっていて騙し合う。

裏切られるのは辛いことだとわかっていて裏切り合う。

嘘を吐かれるのは悲しいことだとわかっていて嘘を吐き合う。

見下されるのは気分が悪いことだけど、見下すのは気分が良い。

言い訳されるのは腹立たしいことだけど、自分の言い訳には目を逸らす。

傷を負えば痛い。

でも、平気で他人を傷付ける。

世界は穢れきっていたんです。

そんな世界を見つめ続けて——生きていたいなんて思えるわけないじゃないですか」

騙し、裏切り、嘘をつく。

見下し、言い訳し、傷付ける。

どんな聖人君子だろうと、邪念はある。

心に一点の曇りもない人はいない。

本来であれば、人は成長する過程で少しずつそれらの穢れを経験していくものだ。

しかし、だというのに彼女は、最初から穢れそのものをいくつも見せ付けられてきた。

全く耐性についていない成長過程の幼い心に、その仕打ちが地獄の業火で焼かれ続けるのに等しい拷問だったといえよう。

絶望するのわからなくはない。

むしろそれが当然の末路だ。

だが、竹はそれがわかっていてなお、同情の素振りを見せない。

「それが辛かったと？」

「ええ、辛かったですよ。その上、自分自身の運命すら決め付けられているんですから、救いのひとつもありはしなかった。当時の私は本当に毎日、毎日、気が狂う思いでしたよ」

深翠はそう言って乾いた笑いをする。

「言葉にしてしまえば簡単ですよ。本当に。でもそれ以外の言葉で表現出来ないのだから、笑い話です。どれだけ辛くても、どれだけの地獄を見続けても、私の見てきた地獄を共有することなんか出来やしないんですから」

「そりゃそうだ。人は元々、共有なんか出来ない生き物だろう。記憶であるうと、記録であるうと、何であるうとだ。仮に同じものを見たところで、受ける印象、蓄積される記憶はそれぞれだ。例えば——お前が地獄だったと喚いているモノが、他の誰かだったら鼻で笑ってしまうようなぬるま湯かもしれないしな」

自分の今の言葉に、深翠が再び激昂するのではと考えた。

しかし、意外にも深翠は冷静だった。

「そうですね。その通りです。以前、一組の男女にも同じような事を言われました」

「一組の……男女？」

猛烈に嫌な気配がした。

深翠は淡々とその名を告げる。

「黒い魔法使いと白い暴君」

「——っ」

ここでその名が出てくるか。

史上最強の魔法使い。

絶対不敗の怪物。

歴史の調整者たる男女が、この件に以前から介入していたという

事実。

やはり、という思いと、してやられたという思いが去来する。

だが今はそんなことに囚われているわけにもいかない。

「それはいつのことだ？」

「十年以上前のことです。あの二人は何の前触れもなく私の許に現れて言いました」

——その眼の地獄を閉ざしたくはないですか？

「……ああ、そういうことか。それじゃああの宝玉は、君の両親が打ち込んだものじゃなくて——」

「その二人の手によるものですよ。私は一言も、両親の手によるものだと言った覚えはありませんが」

言われてみればその通りだ。

あの封印具は、かなりの稀少品だった。

あんなものを、血筋とその身に宿した異能以外は一般人と変わりなかった深翠の両親が入手出来るとは思えないし、仮に持っていたとしても使用するには相応の知識が必要になる。

大神翠辺りならば、そのどちらも可能だろうがそもそも深翠は、彼女すら予見できなかったイレギュラー的な力を持った存在なのだから、あの封印具や使用法を後世に遺していたとは思えない。

ならばあれを深翠に打ち込んだのは、別の誰か。

冷静に考えていれば、気付いていたであろう見落とした。

「彼らの提案は、私にとつても、そして両親にとつても渡りに船でした。私はあの地獄を見続けずに済むし、こちらは先ほど言いましたが、あなたに依頼する上で神性が隠れている方が都合が良かったですから。」

だから私は彼らの言葉に頷いた。

彼らがどんな人物なのかは後々、知りました。

まあ現れた瞬間に途方もない力を持った人物であることは理解出来ましたし、彼らの記憶の記録も読んだわけですが……

それでも——彼らに私の見てきた地獄をとにかく言う権利があると

は思えませんでした。
それこそ生ぬるい」

それはそうだ。

深翠とあの二人が会ったのが十年以上前だというのなら、まだどちらの組織も健在だ。

黒の教団と天岩戸。

二大勢力の壊滅という戦場の記憶がない。

——否、その記憶がなくとも、魔法使いと怪物の記憶は凄惨なものだったはず。

片や魔道に傾斜した狂信者の組織にて、最強の称号を欲しいままにした最悪。

片や神の世へ執着した人外の組織にて、暴君として頂点に君臨し続けた怪物。

その彼らの記憶を生ぬるいと表現してみせる深翠は、一体どれほどの地獄を見てきたというのだろうか？

だがしかし、それを——全てを承知しても竹は揺るがない。

同情の余地はある。

気の毒には思う。

しかし、その上で竹は言う。

「あのさ、生ぬるいのはお前だろ？」

「なっ——?!」

「まったく、阿呆か。何が地獄だ。そんなもん全然じゃねえか」

嘲笑の混じった竹の言葉。

深翠の顔面が瞬時に怒りによって紅潮する。

それに構わず竹は続ける。

「騙して、裏切って、嘔吐いて。見下すこともあれば、言い訳することも、傷付けることもある。それが人つてもものだろう？」

「そんなこと——」

「わかってるって？ いいや、わかってないね。だって現にお前はそれを見続けることが出来なくて、そうやって逃げ出してる」

「だったら……だったら受け入れろとも言っんですか?! 冗談じゃない! あんなものを受け入れるくらいなら、死んだ方がましです」

「それが甘いつて言ってるんだ。死んだ方がまし? そんなわけないだろ」

生きていれば死ぬことは出来るが、死んでしまえば生きることとは出来ない。

生と死は比べられるほど平等ではないのだ。

だがそれでも生きているよりも、死を選ぶべき状況、選ばざるを得ない状態というのは確かにあるだろう。

それが賢い選択、尊い選択だと思われる場面があることも認める。しかし、そうしたところで大神深翠。

彼女が死を選ぶことが最善かといえば、決してそうは思わない。

「……あなたは地獄を見たことがないから、そんな風に言えるだけでしょう!？」

「いいや、地獄なら観てきた。だからこそ言える。お前の地獄は生ぬるい」

「何ですって……?」

「聞こえなかったか? なら何度でも言ってやる。オレはお前が見てきた以上の地獄を観てきたって言ってるんだ」

竹は胸を張って皮肉に笑った。

その態度を虚栄と取ったのか、深翠は冷静さを取り戻したように言う。

「つまらない嘘ですね」

「嘘じゃねえよ。お前じゃあるまいし……まあ口で言っても信用しないか」

竹はそう言っただけで肩を竦めると、無造作に投げ捨ててあった刀を腰を曲げて拾った。

引導を渡される時が来たのだろう。

天倉竹が地獄を観てきたというのが本当なのか嘘なのか、それを

確かめる術が深翠にはない。

何故なら、深翠は竹の記憶の記録が読むことが出来ないでいたのだ。

それは竹の神格が彼女を上回っていることの証明だった。

そしてそれに伴い、どちらの地獄がより地獄と呼ぶに相応しいものなのか、比べることは出来ない。

どちらの主張が正しいのか証明できない以上、これより先の会話は無意味だ。

だから竹はこの水掛け論を終わらせようと刀を手にとったのだろう。深翠はそう考えた。

だが、その考えは半分正解で半分だけ間違っていた。

竹は確かにこの結論の見えない水掛け論を終わりにしようと、刀を手にとった。

しかし、それは大神深翠の生を終わらせる事で、答えの出ぬままに終止符を打つ為ではなかった。

深翠が竹の変化に気付く。

「ん、そろそろ見えてくる頃か？」

「……これは一体？」

深翠の戸惑いの声に竹が答える。

「オレが今、手にしている刀の名は『夜月』。

神を殺す為に造られた神造武具の一振りだ。

この刀は、斬り付けた対象の神性を奪うという力を持った対神用の武器なんだが、同時に使用者本人の神性も奪い続けるという諸刃の剣でもある。

つまり今、オレはこの刀に殺され続けてる真つ最中なわけだ。

さつきもこいつを使って辛くも勝利を収めたところだ、そろそろオレの神格とお前の神格が逆転してくる頃だろう。

さあ——その眼でオレの過去を読んでみる。

たった十数年。オレが観てきた地獄を見てみるよ。

大神深翠。オレの地獄とお前の地獄、どっちがより地獄と呼ぶに相

応しいものなのか、比べっこいこう」

竹は不敵に宣戦布告をし、刀の切っ先を深翠に向けた。

「……いいでしょう」

竹の挑戦を深翠は受諾する。

深翠の口元には、彼女自身ですら気付いていない小さな笑みが浮かんでいた。

その笑みがどんな種類のものなのか、当然、深翠は解らない。

だが少なくとも、その微笑がこれまでの暗い影を落とすようなものではないことは確かであった。

「それはらば、どちらの程度が本当か、あなたの記憶の記録、読ませてもらいます」

まるで子供同士の争いだった。

自分自身を弱体化させてまで、どちらの主張が正しいのか白黒付けようとする竹も竹だが、その挑戦をあつさりと受けて立とうとする深翠も深翠だ。

だがしかし、これまでの人生が非日常に彩られていたとしても、二人は確かに成人を迎える前の子供なのだから、そこまでおかしいことではないのかもしれない。

それに竹も深翠も、お互いに頭に血が昇ってこのような行動に出たわけではない。

二人とも冷静に考えた末の言動である。

竹には竹の、深翠には深翠の思惑があるのだ。

両の瞳が徐々に緑翠に輝きだしていく深翠へ、竹は言う。

「気を抜くなよ、月読の巫女。オレの地獄はきついぞ。それこそ、死にたくなるほどにな」

次の瞬間、一人の少女の劈くような悲鳴が、大森林一帯に木霊した。

翠の章 29（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

大変お待たせしてしまい申し訳ありません。

色々とやることがあり、執筆時間が中々取れず、この際ラスト3話くらいだから全部いっぺんに更新しよう、などと考えていました。ですが音沙汰なく、その方針もどうかと思ったのです。すでに完成していた1話分だけ更新します。

恐らく残り2話になりますが、こちらは同日にいっぺんに更新します。なので再び時間が空くと思いますが、何卒ご容赦ください。

かなりピヨピヨの状態で書いたのでおかしな部分があるかもしれませんので、その際はご連絡くださいませ。

エピソード

5月末。

長かったようで短かったゴールデンウィークが明けてから、2週間以上が経った日曜日。

竹は自宅にて、いつものようにゴロゴロと自堕落な休日を満喫していた。

「ん？」

昼過ぎ、携帯に着信があった。

液晶画面には知らない番号が映し出されている。

知らない番号ということは、考えるまでもなく知り合いではないということだ。

折角の休日を知り合い以外に付き合うほど、愛が余っているわけではない。

それにもしも急を要するような電話だったとすれば、留守電に伝言を残すだろう。

あとはそれを聞いてから判断すれば良いことである。

竹は少しだけ考えて、その着信を無視することにした。

しかし、暫く放置していたのだが、一向に着信は切れる気配がない。

いや、正確には数十秒で携帯が留守電に切り替わると、一度鳴り止み、再び着信が鳴り出すのだ。

「なんだよ……」

誰だか知らないが、しつこい。

いい加減、イラついてきた竹は電話に出ることにした。

開口一番文句の一つでも言ってやるつもりだ。

「——どうしてすぐに出ないんですか」

少し怒ったような声がした。

開口一番、こちらが文句を言われた。

何故だ。

だがなんとなく、それに押されてしまう。

「いや——ちよつと気付かなかった」

とりあえず、少しだけ嘘をついてみた。

「はあ、携帯電話なんだから、携帯していなければ意味がないじゃないですか」

飽きたのか、憤慨しているのか、とりあえず電話の主は竹の嘘をそのまま信じたようだった。

「まあそうだ」

実際はきちんと携帯していたわけだが、それをいちいち訂正するところらの嘘がバレてしまうので、適当に頷いておく。

「それで、何の用？」

電話の相手は漸く本題に入る為か、こほん、と一度咳払いをする。

「退院しました」

「誰が？」

「私です」

——そういえば、近々退院するという話だったか。

特に退院祝いをするような間柄でもないが、おめでとの一言くらい言っておくべきだろう。

「ああ、そりやおめでとう」

「……それだけですか？」

「は……？」

それだけが、何かまずかっただろうか。

とはいえ、何か思い当たる節もない。

なのでさらりと返答する。

「それだけですか？」

「……っ」

直後、ぶちりと電話が切れた。

一体なんだったのかと首を傾げつつ、竹は一つ欠伸を噛み殺す。
ゴロゴロしていた為だろう。

いよいよ本格的に眠くなってきた。

「昼寝でもするかね……」

もごもごと呟いて、竹はソファの上に寝転んだ。

「——ん……」

テーブルの上に置いた携帯を引き寄せ、時間を確認する。

うつらうつらしていたら、1時間ほど経過していた。

寝方も眠りも半端だった為か、まだ猛烈に眠い。

これはベッドで寝てしまった方が良さかもしれない。

竹は携帯をテーブルに戻し、のろのろとソファから身を起こし——
「——うえ?!」

対岸のソファの異常に気付いて、間抜けな声を上げた。

眠気は完全に吹き飛んでいた。

それはそうだろう。

まず目に飛び込んできたのは、薄いグリーンの色無地。

いつの間にか、これでもかというほど仏頂面の大神深翠が行儀良くソファに腰掛けていた。

「オハヨウゴザイマス」

深翠の第一声はものすごい片言な挨拶だった。

「あ? ああ、おはよう」

「……」

「……」

「って違う!」

何を普通に返しているのか。

セルフ突っ込み。

漸く調子が戻ってきた。

竹はとにかく今の心境を簡潔に一言で表す。

「——何故に?」

竹の疑問は尤もだった。

その問いに深翠は仏頂面を崩さずに返答する。

「退院しましたから」

尤もらしく実に簡潔に深翠は言った。

だがまるで意味がわからない。

少なくとも退院と不法侵入はイコールではない。

「いや……」

竹はきちんとソファに座りなおし、自分に気付かれずに不法侵入してみせた深翠をジト目でねめつける。

五秒、十秒、二十秒、と沈黙が続いた後、仏頂面だった深翠の表情の下に僅かな変化が見て取れた。

一応、悪いことをしたという自覚はあったらしい。

竹は軽く溜息をついて、それ以上の追求をやめることにした。

——退院祝いだ。

今回の不法侵入に関しては不問にすることにしよう。

テーブルの上からタバコの箱を手繰り寄せる。

そして、タバコに火を点けながら言う。

「身体はもういいの？」

「え、あ、はい。もう全快しました……というか身体の方は1週間程で完治していたんですが——心の方が」

深翠は微妙な顔をした。

竹も微妙な顔をする。

身体のダメージもそうだが、そちらの方も自分が与えた傷だけに、なんとも言えない気分だ。

まあ深翠の方は、竹を恨んでいるわけでもないようなので軽く答えておくのがベターだろう。

「あー、なるへそ」

「……今時、へそはないと思いますよ？」

「うん。そうかも」

「そうです」

二人は視線を合わせて軽く苦笑いする。

「ええと——竹さんの方は身体は？」

「……竹さん？」

問い掛けの答えより先に、竹は深翠が初めて使ってきた呼称が気になった。

「……いけませんか？」

「いや、いけないってことはないけど……？」

「そうですか。なら構わないじゃないですか」

そう言われてしまえば、それまでだが一体どういう心境の変化があっただろうか。

今の今まで天倉君で固定されていただけに、そこはかたなく妙な気分だった。

とはいえ呼び名が変わった程度のことだ。

大して気にするほどの変化でもない。

入院中に何か思うところでもあったのだろう。

それに苗字で呼ばれるよりも、竹は名前で呼ばれる方が好きだった。だから竹はその話題を切り上げて、先ほどの質問に答える。

「オレも身体は回復してるよ。まあ——」

竹は何か言い掛けたが、やっぱりなんでもないと肩を竦めた。

しかし、そこまで言いかけられては気にするなという方が無理なものである。

「何ですか？」

深翠が関心を向けた。

だが、よほど言いたくないことなのか、竹は言い渋る。

「いやまあ、気にしなくていいよ」

「いえ、気になります。何を言いよどんでいるのかはわかりませんが、もしかしたら私が原因なのかもしれませんから」

——自分が原因で何かあったのなら教えてほしい。

単純に気を引かれたというのもあるが、それ以上に深翠は竹のことを案じていた。

ゴールデンウィークの時点からは考えられない心境の変化である。それは彼女がした経験の現われだった。

だがしかし、その経験、変化は深翠のみのもの。

竹にもその変化が当てはまるかと言われれば、その限りではない。

「ああ、それなら安心していいよ。大神さんには関係のない話だから」

竹が言った。

その声は普段よりも幾分柔らかく、それゆえに嘘っぽかった。

「——嘘ですね」

「嘘じゃないよ」

「嘘です」

「嘘じゃ……」

「嘘」

「……」

竹は小さくため息を吐き、灰皿にタバコの灰を落とす。

そして、未だに回復し切れていないある件について軽く話すことにした。

竹が深翠の語った話の粗筋はこうだ。

竹の知り合いに、黒澤怜という知り合いがあり、その知り合いにゴールデンウィーク前に自分が所有するコレクションが置かれた倉庫の整理をしないかと誘われていた。

だが竹は深翠から依頼を持ちかけられた為、それを断った。

それだけなら詳細はともかくよくある話だ。

だが帰ってきてからが問題だった。

帰ってきて黒澤怜と連絡を取った竹が、その後倉庫整理はどうしたのかと、話の種に軽い気持ちで聞いてみると――

「ん？ ああ、終わったよ。すぐに片付いたしな」

「そうなんですか？ そんなすぐ終わる量でもなかったと思いますけど」

「整理していたら時間はかかっただろうね。でも全部売り払ってし

まったから、そうでもなかった」

「――は？ 売った？」

命よりも大切だとさえたまったことのあるコレクショントちを、
怜は売り払ったのだという。

まさに驚天動地であった。

しかし、当の本人はさっぱりとした顔で、言ってみせる。

「ああ、売った。整理するよりも楽で良かった」

竹が手伝わなかったことへの当てつけか、最後の台詞はどこか皮肉
めいていた。

そして、その日から竹と怜は連絡を取っていない。

まあ深翠の実家から帰ってきて、怪我が治り切らないうちにいくつ
か木っ端仕事を請けて、それなりに忙しかったということもある。
ちなみに請けた仕事の全てを、竹は十三夜の誰かしらに手伝っても
らった。

深翠の実家に一人で赴いた結果、余計な手間と怪我を負ったことが、
そうさせたのだ。

竹は今後、滅多なことがなければ誰かに助力を頼もうと心に決めて
いた。

さて、別に喧嘩をしたわけでもないのだが、何だかんだで出会って
からこれまでの間、黙っていても何かにつけて連絡を寄越してきた
怜との不通。

それが竹が回復出来ていない事柄。

ちよっとした悩みの種というやつだ。

竹が言い渋ったのは、深翠の依頼に応えたからこそ起きた事ではあ
るが、彼女には否が一切ないので言いたくなかったのだ。

原因はあっても、無関係なのである。

しかし、深翠はそう思わなかったのか、竹の説明を聞き終えると
その話を随分と詳しく知ろうとした。

特に黒澤怜という人物について、そして竹と彼女の関係について。
別段、隠し立てするようなことではなかったので聞かれたことに

は答えたが、それでも妙に熱の入った深翠の質問責めには辟易した。とはいえ、何故そこまで食い付くのか理由は聞かないことにした。聞いたら間違いなく面倒なことになると本能が告げていたのだ。だから竹は、深翠はこれからの自分の為に色々と知っておきたいのだろう、と勝手に理由付けをして納得した。

それもある意味間違いではない。

深翠は日常の反対側に足を踏み入れている。ならば無知では困る。

知らなかったで済むような世界ではないのだ。

「……なるほど、その女性には注意する必要があるそうですね」

竹が二本目のタバコに手を伸ばし、本数制限なく喫煙出来る素晴らしさを実感している時、深翠がぼそりと呟いた。

「ん？ 何か言った？」

よく聞き取れなかった竹が聞いた。

「いえ、何も？」

「そう？」

「はい、そうです」

深翠はしれっとした表情で返した。

そついうのなら聞き間違いだったのだろう。

確実に何か呟いていた気がした——というか大体聞こえていたのだが、これも触れない方が良さそうな気配だ。

こついうのはバランスが大事なのだ。

「——んだ。大神さんは何しにきたの？」

ここにきて、竹は漸く本題に入った。

深翠は竹の言葉に思い出したように、足元の鞆に手をやる。

鞆の中からは数冊の本とプリントが数枚出てきた、ルーズリーフが出てきた。

本は二人が通っている学校の教科書だった。

だが何故そんなものを今取り出したのか意図がわからずに、竹が怪訝そうな顔を見ると深翠が口を開く。

「休んでいた間に出された学校の宿題です」

「うん」

「それを片付けようかと思ひまして」

「……うん？」

「なんですか？」

「いや、それ自体は問題ないんだけど、何故わざわざオレの家で？
宿題を片付けることはいいことだ。

少なくとも悪いことではない。

だがそれは深翠のやるべきことであつて、竹にはなんら関係がない。

深翠が少し頭の弱い子で、一人では宿題が終わらないなんてことであるのならば、竹に講師役をやつてもらつて家に来てみたという可能性もあるのだが、万が一にもそんな可能性はない。

高校入学以来、ペーパーテストは全教科満点。

それが大神深翠の成績である。

竹も成績は悪い方ではないが、それでもそんな馬鹿げたスコアを叩き出している相手に教えることなんかないはずだ。

解答があつて問題があるのが試験だ。

記憶の記録を読んでしまえば、この結果は楽勝だろう。

もしかすると、彼女のその成績は能力を使って築き上げられた点数なのかもしれない。

竹がそんなことを考えていると、深翠はその考えを読んだように言う。

「まさか、そんなことしていませんよ。私は普通に教科書を読んで他の一般生徒と同じように勉強しているだけです。まあ先の入院中も勉強しかなかった程度には、勉強時間は多い方ですが……：といつかそれくらいしかすることがなかったんですけどね。入院中は誰もお見舞いに来なかったですし」

最後の言葉には棘があつた。

「……」

それは置いておいて、その言葉を信じるならば深翠の学力はその能力によるものではなく、完全に彼女の努力の賜物であるらしい。地味にすごい。

「暗記系の教科は得意なんです、それ以外は少し苦手なので、良い復習期間になりました」

いつぞやに電話番号を一発で覚えたことといい、どうやら彼女は記憶力がいいらしい。

しかし入院中に勉強をする時間があるのなら、宿題もやっておけよ、という話である。

「……大神さんが頭が良いのは理解できた。話を戻そう。それで何故にオレの家で？　ここは図書館でも喫茶店でもないはずだけど」

「……言わなければ察しませんか？　それならそれで覚悟を決めますけど？」

深翠は口元を引き締め、深い翠の瞳を向ける。

その瞳の奥には、確かな覚悟と僅かな期待が混在していた。

竹はや二の染み付いた天井を向いて紫煙を吐き出し、

「OK、お好きに勉学に励んでくれ」

と言つて手近にあった読みかけの文庫本を手にした。

「……はい。そうします」

そう言つて宿題に取り掛かり始めた深翠の表情はどことなく不満気であつた。

小一時間ほどでお勉強の時間は終了した。

さすがと言うべきなのか、彼女が片付けた量は竹ならば最低でも後三十分は掛かっただろう。

だが深翠は余裕綽々といった感じ。

「このくらい普通ですよ」

「……ああ、そうですか……インテリめ」
「ぼそり、と暴言を吐く。」

「何か言いました？」

「いや、何も？」

「そうですか。なら良いですけど。——ああ、そうそう。良ければインテリの勉強法を見せてあげましょうか」

「聞こえてんじゃねえか！」

竹は反射的に言葉を荒立てて突っ込んでいた。

「は？ 何のことですか？」

「そこで恍けるんだ！？」

反射的、その？。

深翠はその突込みをスルーする。

そして、役目を終えた教科書たちを鞆に仕舞ながら言う。

「というか、天倉君もそれなりに成績は良かったですよね？」

「……まあそれなりに。てか何故に知ってるん？」

深翠と成績の話はしたことがなかった気がするが、どこで知ったのだろうか。

「噂です」

「噂ですか」

「はい。1年の時に坊主で髭の人が言っていました」

「ファック！！ あいつ何言い回ってんだよ」

「別に言いふらしていたわけではないですよ？ ただ声が良く響いていただけで」

「……ああ、はいはい。まああの声は確かに響くわな」

竹は外見に似合わず、声の高い友人のことを思い浮かべながら頭を掻いた。

「はい。それと私は眼も耳もいいんです」

鞆に全てを詰め終えた深翠が立ち上がる。

用事が済んだので帰るつもりだろう。

引き止める用もないので、玄関まで彼女を見送る為に立ち上がる。

「そうなんだ。眼が悪いオレには羨ましい話だ」

「眼が悪いんですか？ その割には眼鏡とかかけてないですよね」

「ん、いや、眼鏡的なものはかけてるよ」

「コンタクトですか？」

「まあそんな感じ」

玄関でスリッパから草履に履き変えながら深翠は、そうですか、と頷くと扉を開ける前に竹と向き合う。

「——竹さん。今度、インテリの勉強法を見せてあげますから」

「まだひっぱるんだ?!」

「冗談ですよ」

「……センスねえな」

「かもしれません。それでは、また明日」

深翠はどこか寂しげな表情でそう言つて、玄関を開けた。

竹は玄関扉を開けたまま、草履がコンクリの廊下を叩く音だけに耳を傾ける。

「……」

最初から後手後手に回る傾向のあつた話だったが、最後の最後までい先手をとつてもいいだろう。ただどこれは独り言。

そう自身に言い聞かせて呟く。

「——次に冗談言う時は、もう少し笑えるものにしてくれ……それじゃあ、また明日、学校で——深翠」

鈍感ではられない、されどそれに応えるつもりもない。

呼び名を変えるくらいがボーダーライン。

そんな宙ぶらりんな独白。

宛てるべき人物には届かないだろう言葉。

ただ——立ち去る草履の音は幾分、軽快に鳴っていた。

アラタナハジマリ 30（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

大変、大つ変長らくお待たせいたしました。

ずっと小説書いていられば良いのですが、そんなわけにもいかず…… 申し訳ありませんでした。

まさかここまで間が空くとは、本当に未熟。

次作はこんなことにならないよう、もう少しペース配分を考えるつもりです。

というわけでラスト1話は宣言通り続けて更新します。

更新を待たれていたという方がいましたら、重ねてお詫び申し上げます。

月読巫女 31

月読巫女

視える今と、視えぬ過去。

満ちる月と、欠けた月。

そのどちらも視ることの出来る私には理解できない。

どうして笑えるのだろう。

どうして生きられるのだろう。

どうしてその道を選べるのだろう。

人の記憶は醜悪で、

人の記録は腐臭に満ちて、

もう何も視たくない。

いつもいつも眩暈がする。

——それでも今までは耐えてこられた。

だけど、あなたの記憶は観たくない。

その記録には、これ以上耐えられない。

あなたの記憶の記録。

——眩暈で済むような代物ではないから。

*

絹を裂くような悲鳴が夜を駆け巡った。

深翠はすぐさまそれから視線を外し、胃が反転するほどに嘔吐を繰り返す。

そして、ひとしきり吐き終えると、袖で口元を拭う。

彼女は臓腑の奥までが痙攣したように、全身をガタガタと震わせていた。

「——ああ、なんてこと……」

深翠は奥歯をガチガチ鳴らしながら、弱弱しく、何よりも深い絶望を込めて呟いた。

「……あなたは……」

彼女をたった一瞬で、怖気付かせてしまったもの。

大神深翠がその眼で観たもの。

観てしまったもの――

「どうして……こんな……」

それは結末。

変えようのない滅びの風景。

深翠は自分よりも、厳しい地獄があることへの希望を抱いていた。

一抹の望み。

それは確かに希望に沿う通りにあった。

天倉竹の過去の中に。

だがしかし、だとしても彼女は――ここまで酷いものを見せ付けられるとは思っていなかった。

地獄の釜の蓋を開けたなんてものではない。

その程度で済めば良かった。

だがあれはそれ以上。

地獄の最下層の更に下に位置するものに他ならない。

人が決して眼にしてはならぬ景色であった。

そして、だからこそ理解できない。

「……あなたは……あなたは、どうして……こんなものを背負い続けていられるの……」

あの終焉の景色に身を置いてなお、笑っていられるのが不思議でたまらない。

生きていられるのが不可解で仕方ない。

緑翠の眼をした巫女は、世の汚濁を全て知っているからこそ問いかける。

「あの場所での、あの選択……あなたがその道を選んだことが理解できない」

滅びの中心にて、天倉竹が下した決断の記録。

それは不条理。

ただその一点に尽きる。

深翠は震える両手で抱きしめ、笑った膝で精一杯、身体を支えながら竹を見やった。

その瞳にはこれまで人として見ていた色はなく、何か化物でも見るかのような畏れが映っていた。

「……お前に私の何がわかる——そう、聞いたよな、大神深翠」

竹はポツリと語り始めた。

これは会話を期待した、問いかけではなく独白。

もはや自分を何か違うモノとして見ている深翠とは会話が成立しない、と高をくくったようだった。

それに深翠も気付く。

だから何も言わず竹の言葉を——否、天倉竹という名の化物の独白に水を差すことなく耳を傾ける。

「それから色々と聞いたわけだが……結局、オレはお前のことが全然わかってないんだ。さっきも言った通り、人は究極的には分かり合えない。言葉でちよつと説明されたくらいで、一体何を知ることが出来るっていうんだよ……。まあだけど——お前はもつと深いところでオレを識った。だからオレはあえて、お前にオレの何がわかるんだ、とは言わないよ。お前はどんな言葉よりも正しく、確かな真実を知ったんだから」

竹はすつ、と足を前に踏み出した。

「……でもな、これだけは言っておく。どんな生き方をしてたって生きていれば辛い目には遭うもんだ。痛みの程度の違いはあれな」
一歩、二歩と竹が静かに深翠に近づいていく。

「オレはそれをずつと前から知っていた。少なくとも、お前よりは解ってた。そんなオレをあの時、動かした原動力——」

——あと一歩。吐息すら届きそうな距離で竹は止まった。

「オレは——死にたくなかった。死なせたくなかった。ただそれだ

けだ」

竹は刀を持ち上げ、一度刃を深翠の首筋に添えてから振りかぶり

「それじゃあ、さよなら。——死にたがり」

そんな執行の言葉と共に、白銀の刀が薙いだ。

——ひやりとした感触がした。

深翠はいつの間にか力いっぱい瞑っていた目を恐る恐るあけた。

神殺しの刀身は、彼女の首筋に傷を付けるぎりぎりのところで止まっていた。

そして、その刀を止めた竹は——

「ほら、やっぱり死にたくねえじゃん」

そんな風に、どこか呆れたような口調で言って刀を下げた。

表情はどことなく可笑しげであった。

「何が死にたいだ。嘔吐くならもう少し上手くついてくれ。足、震えてるし、泣きそうだし」

「——っ、これは……」

深翠にはその後に続く言葉がなかった。

それはそうだろう。

彼女はつい先頃まで、心の底から死にたいと、死んでも良いと思っていたのだ。

だが、現状はどうだ。

死に直面した彼女は、そんな想いとは裏腹に死に恐怖し、震え上がっている。

深翠はそんな自分自身に対して驚きと戸惑いを得ていた。

しかし、同時にそれは当然のことでもあった。

彼女は自分よりも深い闇を他者に求めている。

そしてそれはあった。

彼女は自分が最下層にいないことを知った。

それにより——少しだけ、自分の人生に希望を抱いたのだ。

天倉竹。

この少年より自分は幾分もマシで、そして何より彼より酷くなることはありえない。

ならば自分が死ぬには少しばかり早いのではないか。

そんな風に思ったのだ。

思ってしまったのだ。

そしてそう思わせることこそが——竹の思惑であった。

「さて、ここで質問だ。もうこれっきりの質問だから、よく考えて答えてくれ」

「……どうぞ」

「大神さん。今の君は死にたいのか、死にたくないのか、どちらの側だ？ 死にたいのなら、殺してやるし、死にたくないのなら見逃してやる」

「それは——もう考えるまでもないことです。今の私は……どうしたって死にたくありません」

「そうか」

「そうです。……あなたにそうさせられたんです」

一抹の疑念、僅かな躊躇、淡い希望。

今までの深翠にはなかったそれを竹は引き出し、刀の一振りで見逃させたのだ。

全ては——

「だからこの勝負は私の負け。それと——」

「何？」

「お仕事はこれでお仕舞です」

深翠は深々と頭を下げた。

「これで本当に依頼達成ということで良いのかな？」

竹は満足そうに笑う。

深翠もそれにつられて微笑んだ。

「はい。確かに私は護られました」

——全ては深翠を護る為に起こした行動だった。

今、漸くそのことに気付いて、深翠は小さく息を吐き出した。

「……本当に、あなたは——」

その表情に、もう畏れはない。

自分の全てを曝け出してまで、自身を護ろうとしてくれたのだ。これまで溜め込んだ負の感情は全て露と消えている。

ゆえに残ったのは僅かな——

「——馬鹿なんじゃないですか？」

残った感情に対する戸惑いと躊躇いが、深翠にそんな言葉を言わせていた。

「は？」

「というか馬鹿ですよ、実際。命を護るだけなら、ここまでする必要はなかったと思いますし」

実際、深翠はそんなことは思っていないのだが、一度口が滑ってから後に引けなくなっていた。

そのせいなのか、顔が熱い。

深翠は頬を上気させたまま、勢いに任せて喋る。

「そういえば、格好良く任せとけなんて言うっておきながら、いきなり昼寝なんかしましたよね。それだけじゃないです。他にも……ええと、他にも色々ありました！ 絶対、ありましたよ?!」

混乱気味に喚き始めた深翠に対して、竹は困惑気味に呟く。

「……いや、何故に罵られてんの、オレは」

「——あ……」

竹の冷静にして的確な突っ込みに、一気に深翠の頭が冷える。

ただ顔色は先ほどよりも朱が強みを増していた。

「すみませんでした……」

「……まあいいよ。いや、良くないか——この流れだと誤解されちゃいそうだしな」

「誤解？ 何に對してですか？」

深翠の言葉に竹はにんまりと、怪しさ抜群の笑みを作った。思わず深翠は身構える。

「……なんですか？」

相変わらず怪しい笑みのまま竹は答える。

「あー、一つ言っておくけど、これは別に今、不当に罵られたことに対しての報復とかではないから。その辺はあしからず」

「はい？　どういう意味——」

深翠の言葉が途切れる。

ただし、彼女は台詞の途中で口を閉じたわけではない。

深翠の口はしっかりと台詞の続きを言う為に開いたままだ。

ただ声が出なかっただけ。

彼女の頭上。

遠く青白んできた天空に、突如、銀色の球体が魔法の鏡のように輝き、浮かんでいた。

「……これは——？」

突然の出来事に口を金魚のようにパクパクさせて驚く深翠に、竹はゆっくりと説明する。

「オレが君を護って終わり。そういう綺麗な終わり方もありっちゃありだけど、大神さん。こういう世界は落とし所ってのが重要なわけだ。それに、どんな物語もピリオドを打たなくちゃ」

竹はそう言って、頭を掻く。

いつの間にか、その手に握られていた得物が消えていた。

さあつと深翠の顔から血の気が引く。

「あんなもの呼び出したまでは良い。だけどオレを殺してまで観た地獄。その代償くらいは払ってもらう。……ああ、そうそう。実はさっきのもしイラつとしたわ。

——堕ちろ、夜月」

それは膨大な力の塊。

神殺しの名を持つ盈月が、終止符を打つべく神の一柱の末裔に落とされた。

深翠が目を覚ますと、目の前には竹の顔があった。

何事かと体を起こそうと試みるも、体中が悲鳴を上げて失敗する。そこで自分が、あの嘘みたいな力の塊に押し潰されて、今まで意識を失っていたのだと把握する。

夜はすでに明けていた。

太陽の位置からすれば、少なくとも3時間以上は意識を失っていたらしい。

——よく死ななかったものだ、と深翠は自分の体の頑丈さに感謝した。

素直に、感謝した。

「それじゃあ報酬の話に移ろうか」

大の字で倒れる深翠を上から除き込むようにして竹は言った。

「報酬……」

たった一言、呟いただけで全身が痛んだ。

「そう、報酬。まだ決めてなかっただろ」

目を覚ました直後、それも自分のダメージを承知の上で、そんなことを平然と言う竹に深翠は苦笑いした。

また体が軋んだ。

ただ今はまだ負傷退場するわけにはいかない。

溜まったものを清算しなければ。

「——そういえば、そうでしたね。……ただこの状況。むしろ私が賠償を請求したいくらいですが。……まあいいです。仕事は達成してくれたわけですから」

「そういうことだ。話が早くて助かるわ」

「……ええ、そうですね。自分でも驚いているくらいです。それで、何がお望みですか？」

竹は皮肉に口元を歪める。

「——報酬は今後、オレに嘘を吐かないこと。お前は色々と嘘を吐き過ぎる。今回はそれに振り回された。もうこんなことは二度と御

免だ」

何を要求されるのかと思えばそんなこと。

拍子抜けだった。

これまで竹に嘘を吐いてきたのは、それが必要だったからだ。

本来の深翠は、好き好んで嘘を吐くような人物ではない。

ただ、嘘を吐く度、妙に堂に入って出来たのは本人も驚く発見ではあったが。

それはさておき、その程度の要求ならば何の問題もない。

「……ちなみに、私の嘘はいつから気が付いていたんです？」

「——最初から。だって、こんなところに手紙なんて届くわけねえだろ」

冗談なのか本気なのか、竹はそう言って笑って見せた。

「ずるいですね。最初から信じていなかったなんて」

「いや、信じてたのは本当。だけど——全部が本当だとは思っていなかった。言っただろ？ 人は嘘をつく生き物だって」

その返答に深翠はころころと声を出して笑った。

痛む体を無視して笑った。

彼女にとって今回の件は、どこまで騙し続けられるかという話だったのに、竹は最初から信じていなかった。

——否、騙されることすら許容して動いていた。

それでは敵うはずがない。

ただ——両親の願い、そして今や自分の願いとなった想いは叶った。

大神深翠は、死せるべき夜を超え——今、生きている。

それで十分だった。

「……わかりました。私は今後、天倉君に嘘は吐きません。ではさっそく——」

何を言うのだろうと好奇の顔を向けた竹を見上げ、深翠は薄い笑みを作りながら口を開いた。

「その前髪、変ですよ」

「……それは正直すぎる」

思わぬダメージを受けた竹に対して、深翠はしれっとした表情で返す。

「すみません。嘘が吐けないものですから」

「あー……」

「キャンセルは効きません」

「まちで？」

「マジです。だから——新しく依頼を受けてくれませんか？ 天倉君」

「……その報酬に、今のキャンセルにしると？」

「その報酬の使い方は、あなた次第です」

竹は苦笑しながら肩をすくめた。

「……とりあえず、言ってみてくれ」

「私は運命から逃れ、生き延びました。

だけど、それは今日限りのことで、明日にはそれを正す力によって、私は殺されてしまうかもしれません。

だから——私を護ってください。

運命から、歴史から、この世界から。

私はこれから——過去に縛られない明日を生きたいんです」

それは六百五十年前に生きた女には、ついぞ言えなかった言葉。

自分の為ではなく、運命に殉じた夫の為に、運命に抗おうとした女には言えなかった怨み言。

——いや、それとも少しだけ違う。

大神翠は過去に縛られぬ明日を知りたかっただけ。

だが大神深翠は過去に縛られない明日を生きたいと言った。

どこまでも自分自身の為に。

その深い翡翠色の瞳は、前を向いている。

未だ見ぬ明日へ。

絶望や悲嘆といった濁りは、もうない。

竹はその力強い眼をしつかりと見つめて言う。

「まあオレが生きている間に限り、って話なら……あと今回みたい
に護衛ってわけにはいかないよ？　大神さんだけにかまけてられな
いし」

「……それで受けてくれるなら、構いません」

深翠は小さく頷き、竹も頷き返した。

「わかった。」

天倉竹は運命、歴史、この世界から——君を護ろう。

ただし今後、無闇にその力を使わないこと。

それと——言って良いことと悪いことの区別はつけてくれ。

オレは意外と打たれ弱いんだ」

そう言って、半笑いで前髪をいじる竹を深翠は嬉しそうに見つめ、
「有り難う」
といった。

*

黒き古書のページが進む。

第二部の開演。

第一幕。

翠の巫女の物語は、運命を退け、
月を読む神の思惑通り閉幕。

物語は第二幕へ。

次の役者は、蒼き天使。

神の複製品の物語は、

運命の輪に乘せられて廻り出す。

いつか来る、終幕を目指して。

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

「巫女と御子。」

あの古文書には、本当はどちらの名が書かれていたのです？」

「さあ、どちらかしら。

どちらだと思う？

まあどちらでも良いのだけれど、
でもこれだけは教えておくわ。

——大神は嘔吐きの家系なのよ」

黒白の疑問に答えたのは、

この世界を治めているもの。

世界の中心に居るもの。

それは虹と黄金の一。

運命の少女は歴史を謡う。

「これは壮大な御伽噺。

虚ろな物語は、あと6つ。

ここに辿り着くまで、どこまで移ろうのかしら。

世界は——これだから面白い」

(了)

月読巫女 31（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

これにて翠の章は完結です。

色々と予定違いばかりの物語でしたが、漸く終わらせることが出来ました。

とはいえラスト間際で変に間が空いたので、無事着地出来たのかかなり不安です。もしおかしいところがありましたらご連絡ください。人物設定、年表についてはさりげなく更新します。

次章については、そちらでアナウンスしますが、早くても7月以降の更新になると思います。

それでは最後までお付き合いいただきありがとうございました。

歴史とは唯一である。

しかし、人が歴史を知ろうと思えば、それは過去から残されてきた文章、文献に頼らなければならない。

どれだけまことしやかに伝えられていても、記録がなければそれはただの昔話。

公に語られない歴史はただの記憶に過ぎないのだ。

つまり、歴史は記録されなければ生まれないのだ。

だが、その歴史は本当に正しいものなのか。

それは否である。

記録された歴史というのは、どうあっても真実にはなりえない。

個人が記録した時点で、歴史というのは嘘になる。

記録者は中立中庸でなければならぬが、人である以上それはありえない。

人はどこかに拠る生き物だからだ。

例えば天照。

たった一人の為政者となった天照は、権力の保持増をしなければならなかった。

自らの権力基盤を維持し、後世に繋ぐまでに権勢を誇るために、歴史を都合の良い道具にした。

だがそれは彼女にとって都合の良い歴史。

文献がいくら残ろうと、その歴史は嘘で、偽者だ。

ならば真実はどこにあるのか。

正しき歴史はどこにあるのか。

それは人に拠らないモノの記憶。

全ての歴史、正しき歴史は世界そのものが記憶しているはずだ。

しかして——私がそれを正しく知ることは不可能だ。

例えば世界の記憶の記録を読む事が出来ようと、それは私の眼を通

した時点で偽になってしまっただ。

今度は歴史を人が選ぶ。

私——人というフィルターを通した時点で、歴史は都合の良いように選ばれる。

人に抛り、人が選ぶ。

虚ろで、移ろうのが歴史。

完全なる中立中庸、全てを俯瞰する全知全能の神の視点を得ることなど、到底出来やしないのだ。

それでも、世界の王——否、世界の一であり、同時に全てである少女は、私にそれを語り記すことを許さなかった。

それが真であれ、偽であれ——まだ物語は終わっていないから。

私が観てしまった世界の記憶の記録。

それは過去から未来に繋がる円環の歴史。

あれは未来から過去に繋がる循環の歴史。

全ての始まりと終わり。

全てがあって、何も無い世界で——私は黄金の瞳と眼が合ったのだ。

オンナノムカシバナシ 32（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

本編中に載せるか迷った拳句、一回ボツにしたのですが、気付いたら出来上がっていたので完結後にゲリラ投稿してみました。

余談というよりも、題名通りな感じです。

人物設定、年表は週末くらいを目安に載せると思います。

人物設定 翠（前書き）

『翠の章』終了時点の人物紹介です。
ネタバレ含みますので、『翠の章』を読み終わった方のみご覧下さい。

人物設定 翠

天照（あまてらす）【残留】

三貴神。青色の眼。

月読とは違い、神の血を引いておらず、単純に実力で天照までのし上がった女性。

素戔鳴に続いて月読までもが居なくなった天岩戸を一人で統率した。ただし、戦闘力に限っては月読と戦闘になった場合、十中八九殺されるとか。

しかし本来、三人の支配者が運営していた組織だった天岩戸だが、それが一人きりになったときに起きた内部の混乱をあっさり終息させ、後世まで天岩戸が組織として変わらない形で存続させたりと、為政者としての手腕はかなり優秀だった模様。

月読（つくよみ）【消失】

三貴神。緑色の眼。

650年前に天岩戸から居なくなった神の血を引く女。

岩戸がいずれ開かれること、散り散りになった三貴神が再び揃うことを天照に告げた。

組織から逃げた後、豊葦原に根を張っていた大神の一族と交わる。その時から姓を大神とし、大神翠と名乗る。

素戔鳴（すさのお）【離脱】

三貴神。

月読が組織から姿を消す百数十年前に、天岩戸から離れたとされる人物。

天倉竹（あまくら たけ）【神の複製品】

元天岩戸、司令部所属。

無能。故に万能。白銀。デッドコピー。

高校2年生。3年前に天岩戸を崩壊させた張本人。

普通に高校生として過ごす傍ら解決士としてアングラな世界で様々な仕事をこなしている。

現在は天岩戸を崩壊させたメンバーで『十三夜』というチームを結成している。

端的にいうとわかりづらい人柄。

人を引き付ける何かを持っていて、水と油が多い十三夜のメンバーを繋ぎ合わせる接着剤になっている。

知らない奴の事はどうでも良く、知っている奴をどうでも良く思えるほど強くないらしい。美少女の場合は更にその傾向が強くなる。しかし、ただの女好きという可能性もあり、その性格から3年前から止まっていたとされる運命を再び廻す結果となってしまった。

世界の終末を体験しており、それは常人ならば発狂するほどの地獄。今章ではその地獄が、深翠に生を意識させることに繋がった。

大神深翠が創り出した『唯一の一』との対決によって負傷するが、大事には至らず10日ほどで完治。ただその後、ひと悶着あり黒澤怜との音信は回復していない。

神性を持つ者は使用するだけで殺され続けるという、神殺しの異名を持つ神具『夜月』を保有している。

視力は悪いらしいが、コンタクトのようなものを着用している。

伸びた髪をばつさり切ったが、前髪が短すぎると不評。自分でもそう思っている。

喫煙者。

仲間内でのあだ名は『竹』、『竹君』、稀に『TK』。

>i2750<ruby><rb>341<

黒澤怜 </rb><rp>(</rp><rt>くろさわ</rt><rp>れい</rp></ruby>【不明】

元黒の教団所属。魔法使い。

セミロングの髪を束ねて後ろで結び、少々吊り上った三白眼をした二十代半ばの女性。日々タバコとコーヒーで過ごしているらしい。宝具の蒐集家であり、宝具のことになると、精神年齢が下がり子供のような顔をして古今東西飛び回る。

竹とは3年前からの付き合いで、姉のような友人のような微妙な関係である。

竹曰く、保護者。

今章では蒐集した宝具の整理の手伝いに竹を誘ったが断られる。

その腹いせなのか、それとも別の理由があつてなのか、何故か命よりも大事なはずの宝具は全て売却してしまった。

松田聡也（まつだ としや）【創生の絡繰師】

元天岩戸、製作部所属。アーティスト。

明るい性格で十三夜の盛り上げ役。竹と同じ高校に通っている。

かなりの女たらしであり、常に様々な女性と付き合いがある女好きのB-B-O-Y。本人曰く、全て浮気ではなく本気であるので問題ないらしい。付き合った女性には確実に貢いでしまう癖がある。

やや太めで顎鬚と厳つい外見だが、声は割りと高い。

その声質は高校の教室では良く響くらしく、当時、竹とは一切関わりのなかった深翠が竹の成績を知っているほど。

宝具『土人形（偽）』を所有している。

仲間内でのあだ名は『松』『まつっん』

館花直人（たてはな なおと）【支配領域】

元天岩戸、戦闘部所属。スラッガー。

十三夜の中でも随一の戦闘力を誇る。

180センチを超える長身に、服の上からでもわかる隆々とした筋肉。

野性味溢れる顔立ちで、その風貌はワイルドなB系の兄ちゃんといった感じなのだが、中身は結構純情だったりする。

時間にはきつちりしていて常に5分前行動の体育会系。

今章ではチラツと名前が出ただけ。松田とイベントに行ったらしい仲間内でのあだ名は『おいちゃん』。ただその由来は自分でも不明。

下駄箱にいた女子生徒（げたばこにいた　じょしせいと）【クラスメイト】

ゴールデンウィーク前日の朝、下駄箱で挨拶をした。それだけ。

大神深翠（おおがみ　しんり）【月読の巫女】

本物の神の末裔で、近親姦により生まれた最も血の濃き娘。

その神格は月読の始祖に迫る。

黒髪、翠眼、三貴神。

翠の章のヒロインで、自らの死すべき運命を知った少女。嘔吐きの家系。

雪のように白い肌を持った美人で、日本人形のような顔立ち。誰に対しても敬語で話す、基本的には真面目で優しい人だが意外と怒りやすい。

『月夜見』という能力であらゆるものの記憶と記録を読むことが出来る。能力使用時には瞳が緑翠に輝く。

その他に『緑影の狼』、『神殿形成』など様々な能力を持っている、数少ない複数異能保有者。

特に『神殿形成』は、一つの異世界を創り上げるといふ神の業。

それは不完全ながら、世界の一である『唯一の一』を具現化させるほど。

幼い頃に、黒い魔法使いと白い暴君に出会っており、その時に神性を抑える封印具を胸部に埋め込まれ、その効果により一般人とほぼ変わらない状態でこれまで過ごしてきた。

その宝具は、竹との戦いで自外す。

彼女が死ぬことは600年以上前から予見されており、その運命を

回避させることが彼女の先祖と両親の願いであった。

だが本人的には、それはむしろ迷惑であった。

何故なら彼女は自身の大きすぎる能力が制御できなかった幼少時に、人の世の血生臭さを見せ付けられており、この世界で生きていくことに希望が持てなかった為である。

だが自分が観てきた地獄よりも、厳しい地獄を竹の中に観たことでその考えは改まる。

今章にて、これまでの深窓の令嬢というイメージは崩壊した。がそれはあくまでも竹だけのことであり、学校では相変わらずだとか。ただし近づき難かった以前よりかは、接しやすくなったという。竹に対して嘘を吐くことを禁じられた。

> i 2 3 1 0 — 3 4 1 <

脇光太郎（わき こうたろう）【電子の蜘蛛】

元天岩戸、情報部所属。マルミグナット。

竹たちとは違う高校に通う、十三夜のメンバー。

あらゆる情報を調べる事が出来る情報屋として、個人的にも活動している。

今章では竹は彼の情報網を頼らなかったが、そのせいで痛い目を見たこともあり、次からは彼を頼ることは多くなるだろう。

記述はないが実は眼鏡男子である。

仲間内でのあだ名は『コーチン』、『光太郎』。

大神翠（おおがみ みどり）【月読】

月読という神の血を引いた女性。緑の瞳。過去。嘔吐き。

650年前に岩戸の記憶を読んだことで、天岩戸から姿を隠した。その岩戸から読み取った記憶を元に月黄泉文書を記した。

大神の一族と交わり、豊葦原の統治者となる。

後に豊葦原に大規模な結界を張り、自身の魂を結界に組み込んだ。その結果、幽霊のような状態で現代まで残っているが、留まってい

る場所が結界内部な為、通常では会話等は成立しない。唯一、彼女と話すことが出来るのは大神家の一室に敷かれた意識転移のトラップを発動させた時のみ。

容姿は深翠と瓜二つだが、色気その他諸々、年齢分の違いはある。辰砂の顔料で化粧を施しており、それは豊葦原結界を作成する際に塗ったもの。

結構な嘔吐きで、彼女が結界内部にて竹に語った言葉のどこからが真実でどこからが嘘なのかは不明。ただし夫のことは本当に愛していた様子。

彼女が魂を結界に残したのは、表向きは来るべき時まで結界を存続させることだが、実際はいずれこの地に辿り着く少年に運命の打倒を頼む為だった。

それは運命の犠牲になった夫の敵討ちである。

大神桂里（おおがみ けいり）【巫女】

正統な大神の御子。

深翠の母親であり、真上の双子の姉。

運命に気付いてしまうほどの神格を持っており、それは本来、深翠の代で完成するはずだった力だった。歴史に先だって完成してしまったイレギュラー。

娘を死すべき運命から逃れさせる為に尽力し、その身を娘の影に落とした。

影の狼となっても多少の意思は残している様子。

大神真上（おおがみ まかみ）【忌子】

生まれるはずのなかった、あるいは生まれることが決められていた大神の男子。

深翠の父親であり、桂里の双子の弟。

運命に気付いてしまうほどの神格を持っており、それは本来、深翠の代で完成するはずだった力だった。歴史に先だって完成してしま

ったイレギュラー。

娘を死すべき運命から逃れさせる為に尽力し、その身を娘の影に落とした。

影の狼となっても多少の意思は残している様子。

さとう けんじ
佐藤顕志【不明】

元天岩戸、戦闘部所属。

十三夜のメンバーの一人で、竹たちとは違う高校に通っている。今章では、深翠との話題に詰まっていた竹に救いの電話をする。仲間内でのあだ名は『ケンジ』『ケンさん』『KJ』

襲撃者1（しゅうげきしゃ いち）【一流】

ナイフ使い。黒いボディースーツ。深翠が雇った襲撃者。東洋系の男。

瘦身小柄だが、鍛え抜かれた筋肉は仲間の二人以上に高純度。

始めに攻撃を仕掛けてきた。

かなりの手練で、深翠というハンデを背負っていたとはいえ竹と一進一退の勝負をしてみせる。

アキレス腱、両肩、肋骨に重傷を負っても、命乞いひとつしないプロ中のプロ。

竹は彼に敬意を持って、その首を切り落とした。

襲撃者2（しゅうげきしゃ に）【二流】

ナイフ使い。黒いボディースーツ。深翠が雇った襲撃者。

薬を使って肥大化した筋肉を持つ中東系の男。腹を蹴られ失神した。

二流の名にふさわしく半端なプロ根性と、卑しい狡賢さを眼の奥に持つ。

両耳を削ぎ落とされたまでは完全に屈服していなかったが、仲間の悲惨な死に様を見せ付けられ、さすがに全てを語ろうとした。

だが深翠の狼に頭を噛み砕かれて死亡。

襲撃者3（しゅうげきしゃ さん）【一流半】

ナイフ使い。黒いボディースーツ。深翠が雇った襲撃者。筋骨隆々の米英系の男。

側頭部にハイキックを食らい昏倒。

尊大な物言いで竹との交渉に臨もうとするが、自分の置かれている状況を正確に把握していない馬鹿の一流と竹に判断される。

その判断ミスから悲惨な拷問にあった拳句、命乞いするが時既に遅く、切り取られた睾丸ごと口から頭を串刺しにされて死亡。

大神の一族（おおがみのいちぞく）【山の民】

狼を崇めていた百名ほどの貴い血を持つ山の民。

豊葦原に元々根を張っていた一族。

大神翠を統治者とし、その身を豊葦原結界に捧げた。

結界が600年以上もの間、維持できたのは彼らの生命を使用した為。

彼らがそんなことを平気で行ったのは、そうすることで自分たちの血筋が祀っていた狼へと近づくことを運命として知っていた為。

ただし本質的には優しい一族らしく、深翠や、その両親の優しさはその血によるものかもしれない。

大神深夜（おおがみ しんや）【翠の夫】

大神の一族の中で最も強く、最も気高く、翠との相性が最も良かった戦士。

翠との間に子を生した後は、結界に身を捧げたと思われる。

大神翠に運命を打倒することを決意させた張本人。よっぽどいい男だったのだろう。

名称不明（めいしょうふめい）【唯一の一】

全能。黒金。極光。虹と黄金。オリジナルワン。

『歴史の筆記者』で『黒の書』を書いた人物。

一筋一筋が長く紡がれた、宝石のような七色に輝く髪。金色の瞳。この世のものとは一線も二線も画した、悪魔めいた神々しさを持つ美しい顔立ちをした少女。

黒い魔法使いと白い怪物を従えている。

今回、竹の前に現れたのは深翠が創り出した贗物。

辛うじて人型ではあるものの、顔もなければ服も着ていない人形の素体めいたものであった。

その為、竹でもどうにか勝利することが出来たが、もしも本物であれば、竹どころか十三夜が束になっても勝負にすらならない。

竹にとっての恐怖の対象。

名称不明（めいしょうふめい）【黒い魔法使い】

元黒の教団所属。男性。史上最強の魔法使い。

長身でやや細身、黒い外套を羽織っている。丁寧な口調。

『唯一の一』の作った『歴史』通りに物事を進める為に、舞台を整えている調整者の一人。

魔道に傾斜した狂信者の組織にて、最強の称号を欲しいままにした最悪。

今章では直接登場はしなかったが十年以上前に深翠の前に現れ、舞台のお膳立てをしていた。

名称不明（めいしょうふめい）【白い暴君】

天岩戸のトップだった女性。絶対不敗の怪物。

先代の天照とは彼女の事を指す。隻眼。白い外套を羽織っている。

『唯一の一』の作った『歴史』通りに物事を進める為に、舞台を整えている調整者の一人。

神の世へ執着した人外の組織にて、暴君として頂点に君臨し続けた怪物。

今章では直接登場はしなかったが十年以上前に深翠の前に現れ、舞台のお膳立てをしていた。

人物設定 翠（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

週末更新予定がオーバーしてしまいすみません。

今章は時系列的には、一番最初の話になるのでどの程度まで設定を載せるか悩みました。

その結果、何か妙に中途半端な形になった気もしないでもありませんが、そんな風に思ったあなたは是非、他章もご覧ください。

*10/20 深翠のイラストを挿入しました。

歴史年表

年表

それ以前

『岩戸』が閉じる。

2000年前

天岩戸の元となる集まりが出来る。

1000年前

天岩戸が組織として形を成す。

800年前

秋野神楽、石間山の鬼を討伐。『岩戸』を開く方法に至るも天岩戸を抜け、石間山に留まる。

以降、天岩戸から『素戔鳴』地位が消える。

その一年後、鬼子、秋野紅葉が生まれ、すぐに眠りに付く。

700年前

石間山に鬼が再来した噂が流れ、討伐隊が向かった夜、石間山が炎上。生存者は秋野家の当主のみ。

以降1000年毎に、このような事が起こる。

650年前

『月読』が天岩戸から消える。

狼を崇める大神の一族と、天岩戸から消えた月読が交わる。

月読、大神翠と名乗る。月黄泉文書を執筆。

豊葦原結界が張られる。

純血の大神の一族が事実上、途絶える。

500年前

黒の教団が設立される。

380年前

騎士団が発足する。

90年前

赤の女王、生誕。

84年前

耶麻寺早雲、生誕。

55年前

天使が『岩戸』の前に現れる。以降研究材料に。

天使の羽根を用いたナイフを、耶麻寺早雲らが開発。

50年前

山吹九音、耶麻寺早雲の手によりにより製造される。

＊方法を確立したのは『赤の女王』。後に『岩戸』を開く方法にも至る。

39年前

天野輝血が生まれる。

34年前

黒須蛭が生誕。

30年前

九音により、天照が殺害され天野輝血がわずか9歳にして天照となる。

その後、九音は天使とともに『岩戸』の向こう側へ逃走。姿を消す。
耶麻寺早雲、釜蔵の独房に幽閉される。
耶麻寺の一族は皆殺しにされる。

26年前

山寺一馬、天岩戸に拾われる。以降、道具として赤の女王に教育を受ける。

24年前

黒澤怜、生誕。

20年前

ヴィンセント・ワナー、両親が天野カガチに殺害され、自身も重症を負う。

18年前

黒豹のチームが天野カガチの手にかかり解散。

17年前

天倉竹、庵戸朋愛ほか、現十三夜のメンバーが生み出される。

16年前

九音が天使とともに、赤子（蒼香）を抱いて『岩戸』からこちら側に戻ってくる。

天使はその後死亡。

九音は組織から逃亡。天使の呪いで記憶を失う。

蒼香は、組織とは無関係の孤児院へ送られ、その後とある家庭に引き取られる。

13年前

黒須蛭、天野輝血、大神深翠の前に現れその胸に封印具を埋め込む。

7年前

黒須蛭、黒澤怜の兄妹により、黒の教団に所属していたものが皆殺しにされる。

ただ、実際に手を下したのは黒須。黒の教団壊滅。

黒の書が黒須の物になる。

怜が両親の故郷に戻り、一人で暮らし始める。

庵戸朋愛が史上最年少で管理者に抜擢。

6年前

秋

蒼香、引き取り先の家庭を皆殺しにされ、殺し屋の山吹九音と相棒の山寺一馬と出会う。

蒼香、九音へ復讐を誓う。

九音、一馬、蒼香行動をともにする。

冬

一馬が九音を殺害。蒼香の一つ目の復讐が終わる。

一馬、蒼香に生きる目的を与える。

蒼香、一馬に復讐を誓う。

一馬、耶麻寺早雲の独房へ逃げ込む。

怜が紹介者の仕事を始める。これにより騎士団から追われない立場に。

5年前

天倉竹が次期『天照』に選出される。

竹、これを断り十三夜の前身チームを発足させる。

4年前

現、十三夜のメンバーが『岩戸』の向こう側に到達。
そして帰還した直後、天岩戸への反乱を起こす。

天岩戸崩壊。

庵戸朋愛は瀕死状態から、今野大は死亡状態からアウローラの手により復活させられる。

3年前

竹、黒澤怜と出会う。

天倉竹、松田聡也、佐藤顕志、館花直人が黒澤怜の口利きで、英国にて騎士団と共同戦線を張る。

吸血鬼が滅びる。

その結果、十三夜と騎士団の休戦協定が張られる。

2年前

竹、依頼の最中に人質に取られた荒川宿禰を救う。

宿禰、竹に一目惚れするも忘れさせられる。

竹、宿禰と会ったことを気に留めず、忘れる。

1年半前

深翠、両親から全てを話される。

1年前

竹など十三夜のメンバーが高校入学。

宿禰、入学式で竹に再び一目惚れ。

深翠の家に手紙が届く。両親が失踪。

*手紙は届いていない。両親は失踪ではなく、深翠の影の一部となつた。

現在

4月

蒼香、一馬を殺害。二つ目の復讐を果たす。
再び目的を失った直後、黒須に出会い蒼香は殺戮の天使へ。

/ 29

竹、黒澤怜から蒐集品の整理を頼まれる。

/ 30

竹、大神深翠から依頼を請ける。

竹、怜の頼みを断る。

怜、蒐集品を全て売却。

5月 【翠の章】

/ 1

竹、深翠、白銅郷入り。

依頼の詳細を話される。

深翠が自身を月読の末裔であることを話す。

/ 2

食料を買いに買い物へ。

タバコがない。

竹、仕方がないので灰皿の代わりに瓶ジュースを購入。

深翠、料理をする。とても美味。

竹、爆笑。毒は入っていない。

竹、昼寝。

深翠、切れる。

/ 3

竹、日付が変わった頃に何かの唸り声を聞く。

調査に向かい、謎の生物と邂逅。

特に予定もなく、一日を古文書の解読にあてる。
狼らしき生物のことを深翠に聞くと空振り。

竹、深翠、夜の散歩で襲撃にあうがこれを撃退。

襲撃者のうち1名が、謎の生物に殺される。残り2名は竹が殺害。
深翠がいなくなる。

/ 4

竹、一晩中深翠を探すも見つけず。

竹、大神翠に出会う。

大神翠から話を聞くが依頼は断る。

竹、謎の狼から手紙を貰う。差出人は深翠。

/ 5

竹、深翠の指定通り決戦の場へ。

深翠、全てを語る。

深翠、『唯一の一』の出来損ないを創り出す。

竹、これに辛くも勝利。

深翠、竹の地獄を見る。生への執着が生まれる。

竹、敗北を認めた深翠にキツイ一撃を食らわす。

深翠、竹に嘘を吐かないことを約束。

竹、正直者の言葉にダメージを受ける。

深翠、竹に新しい依頼をする。

竹、その依頼を受ける。

下旬

竹、怜と音信不通。

深翠、退院後に竹の家に強襲。なんだかんだで仲良し。

殺人鬼のニュースが流れ始める。

6月

黒澤怜、耶麻寺早雲に殺人鬼の捕獲依頼をされる。
怜の紹介した賞金稼ぎが、返り討ちにあう。

7月 【蒼の章】

騎士団6番隊壊滅。

竹、殺人鬼の捕獲を怜に依頼される。

耶麻寺早雲、精神崩壊後に黒須とカガチの手により殺害される。
蒼香、竹に敗北。

竹、蒼香との戦闘により左腕を失う。

蒼香、山吹姓を名乗る。

下旬、若者を中心に『D&』の流通が開始。

8月 【紅の章】

竹、黒澤怜、松田聡也と『赤き秘宝』のお披露目会へ向かう。

竹、秋野菊代、アレクサンドラ・ワーナーと出会う。

紅葉、松田には僅差で勝利するも、竹に敗北。

竹、秋野神楽（菊代）の首を刎ねる。

竹、左肩から完全に義手になる。

/ 30

ヴィンセント・ワーナーが夢の国に入城。

9月 【橙の章】

竹、騎士団との交渉の為、甲斐輝明から策を授かり夢の国へ。

竹、交渉の場でプロポーズ。交渉は破談。

パレード開幕。4種の音による交響曲が奏でられる。

騎士団と天岩戸関係者の戦闘は、天岩戸関係者の全勝に終わる。
アレクサンドラ、いい感じに竹をハメて事実上の婚約。

ヴィンセント、剣と盾を連れ本国へ帰還。

/ 2 3

吸血鬼（猟奇殺人事件）最初の被害者が出る。

1 0 月 【黄の章】

初旬

紅葉、釜蔵に良物件を見つけ、そちらに双子メイドと引っ越す。

石渡直也、竹に頼まれて紅葉の主治医に。

怜、『黒の書』の解読に苦しむ。

吸血鬼のニュースが話題になり始める。

/ 3 1

十三夜の宴。

宿禰、夜たちとニアミス。

竹『D &』のバイヤーを始末するも宿禰、吸血鬼化。

1 1 月

/ 1

宿禰、高校の階段の踊り場で全てを思い出す。

吸血鬼のニュースが鳴りを潜める。

1 2 月 【藍の章】

吸血鬼（猟奇殺人事件）のニュースが再び沸き立つ。

宿禰、疑似吸血鬼であることと元に戻れないことが判明後に消息不明。

竹、アレクサンドラに吸血鬼（猟奇殺人事件）の犯人を捕える依頼をしてもらう。

竹、宿禰と戦闘。宿禰死亡。

大木、館花、本多が負傷する。

今野が十三夜に復帰。

竹、庵戸と4年ぶりの再会。一対一の勝負へ。庵戸死亡。

宿禰、アウローラの手により復活。

歴史年表（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

これで完全に翠の章は終了です。

例によって、次章の年表の際に今章の部分はある程度簡略化されます。

その次章は七つの物語のラスト『紫の章』、ヒロインは黒澤怜になります。

更新は夏、恐らく8月になると思います。早ければ7月には開始したいですが……進捗状況次第ということでご容赦ください。

それでは更新が遅かった今章ですが、最後までお付き合いいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3987f/>

月読巫女 翠の章

2010年10月10日21時00分発行